



意味の意味と戯れる  
PART I



星野廉





# 目次

岐路に立つ擬人	
* . . . . .	3
不思議なこと	
* . . . . .	29
気になること	
* . . . . .	47
言葉ではないものをさぐる	
* . . . . .	61
人にあらわれて、機械にあらわれないもの	
* . . . . .	73
「かた」が「かたち」を「なす」さまが「あらわれる」	
* . . . . .	83
「何か」に「何か」を当ててみる	
* . . . . .	91
人が「決める」、「決まる」は「あらわれる」	
* . . . . .	103
意味に意味を重ねる	
* . . . . .	111
意味の意味を広げる	
* . . . . .	123
宿を借りる生きもの	
* . . . . .	133
a rolling stone	
* . . . . .	143
石の意味	

* . . . . .	153
連想でつなぐ、つぎつぎ	
* . . . . .	159
What do you mean?	
* . . . . .	165
言葉は声と顔が命、意味は二の次	
* . . . . .	173
心が壊れないために何かに何かを見てしまう	
* . . . . .	189
薄いけど厚いというギャグは猫に通じるのか	
* . . . . .	201
連想でつなぐ、たそがれ、twilight	
* . . . . .	211
連想でつなぐ夜と闇と夢	
* . . . . .	223
もつれる、ねじれる、こじれる (連想でつなぐ)	
* . . . . .	235
連想でつなぐ「2・二・II」	
* . . . . .	249
「たったひとつ」「たったひとり」に抗おうとする身振り	
* . . . . .	257
解くのではなく溶ける	
* . . . . .	273
赤ちゃんのいる空間	
* . . . . .	281
辺境としての人間	
* . . . . .	295
「ない」を「ある」に変える魔法	
* . . . . .	321
「何か」に「何か」を見なければならぬ世界	
* . . . . .	329

異なる、事なる、言なる**	
* .....	337
空っぽ	
* .....	341
おまかせします。	
* .....	359



岐路に立つ擬人





＊

## 岐路に立つ擬人

星野廉

2023年5月27日 08:04

### 目次

人は一貫して呪術の時代に生きている

人に擬する、名づける、呼び掛ける、話し掛ける

威を借りる

たま、かり、やど

宿る、宿す、込める

決める、決まる、決め手

為す、成る、生る

◆意味をなす、文をなす、形をなす

◆言葉の意味というまぼろし、言葉の実体というまぼろし

◆意味はまちまち

◆意味の生成を外部に委託する

擬人・呪術・委託

人ではないものになりたい人

代償の代償

### 人は一貫して呪術の時代に生きている

最近、AIや生成AIや、その生成したものに心や感情や魂があるとかないとかいう議論を見聞きしますが、あるに決まっています。そもそも自然にある森羅万象はもちろん(擬人のことです)、人が自分でつくった人形(ひとかた)や像や言の葉や文字(もんじ)に、心や魂を込めたり読みこんできた人類は、太古から現在に至るまで一貫して呪術の時代に生きているからです。

人から擬人と呪術を取ったら何が残るでしょうか。人知と人力を超えたものを想定して、それに声をかけて、すぎる。これは人情であり人としての性(さが)です。

山川草木はもちろん、作物、家畜、ペット、人形、物語や小説や映画やアニメのキャラクターを相手に、さんざん話し掛けたり会話をしたり、その力を借りたり奪ったり、愛したり恋したり敬慕したり、癒やされ励まされ、勇気と知恵と知識をもらっておきながら、なんでロボットやAIや生成AIに対してだけ、こんなに及び腰なのでしょう。

それだけではなく、現在ネット上で飛びかっている（誰も飛びかっているところを見た人はいませんが）らしい文字・映像・音声に、人は心と感情と魂を込めているから、誰もがPCやスマホに見入っているわけです。見入るだけでなく、胸をときめかしたり、欲情したり、泣いたり、怒ったり、落ちこんだりしたりしているのです。これは見入られている、つまり魅入られているとしか考えられません。

そんなふうにとっぷり呪術に浸かって生きていながら、何をいまさら心がないだの、感情を感じられないだの、機微が理解できないだの、魂がないなんて言えるのでしょうか。

心も感情も魂も命も人が勝手に人以外のものに自分の都合で込めているのであって、森羅万象にも、人形にも像にも言の葉にも、デジタル化された情報にも、AIや生成AIやその産物にも、罪はないのです。

AIにだけこれだけ心と感情と魂を出し惜しみしているのは、憎いから怖いからビビっているからに他なりません。その手強さに気づいているからでしょうが、このダブルスタンダードというか二枚舌は、いかにも往生際が悪くみっともないと言うべきでしょう。

【※拙文「不思議なこと」に書下ろしで挿入した「人は一貫して呪術の時代に生きている」より】

### 人に擬する、名づける、呼び掛ける、話し掛ける

生きているか生きていないにかかわらず、人は自然界にあるものやいるものを擬人します。人になぞらえるとか、人を当てるとも言えるでしょう。なぜかは分かりません。知っている人もいないでしょう。

ひとつ言えるのは、人になぞらえた結果として呼び掛けることです。おい、ねえねえ、という具合に声を掛ける。そのうちに名づけます。手なづけるために名づけるのです。

名づけて手なづけ、さらには飼いならそうという魂胆があるのでしょうか、なつくものや抵抗できないものばかりではないでしょう。言うことを聞かなかったり、さからったり、攻撃しているものもあるでしょ。

すべてがなれるわけではないし、ならせない、ならない。

為れない、馴れない、慣れない、狎れない。  
成らない、生らない、不作・凶作、為らない、失敗、鳴らない、鳴ってくれない、ホトトギス。  
均せない、平せない、耕せない、平地にできない。

人に擬す、人になぞらえる、人以外の生きていないものや生きているものに人を当てる

声を掛ける、名づける、話し掛ける、語り掛ける、騙り掛ける

人知や人力を超えた存在を想定して、声を掛ける、名づける、話し掛ける、語り掛ける、騙り掛ける。

人類の歴史では、やがて、以上の過程において、仲介者が出てきます。呪術の代理人（エージェント）や専門家（エキスパート、スペシャリスト、テクニシャン）があらわれて幅をきかせるようになるのです。現在も、うようよといます。

その話をしましょう。

## 威を借りる

人間は人間よりも、もっともっと偉い存在がいて、自分がその代理を務めたいという、願望＝欲求＝祈り＝野望を持っているのではないのでしょうか？

Aにはなれないから、Aの代わりに演じます。Aみたいな顔をしてみます。Aの仮面

を被り、表情を真似て、時にはお化粧もし、かつらも付けたりもしてみます。

どうです、似合うでしょう？ 様になるでしょう？ だって、こんなふうに化ければ、〇〇様なんて呼ばれるんですもの。偉く見えるんですもの。いいじゃないの。

そんな具合に、偉く見えるから、崇め奉られる。ちやほやされる。甘やかされる。そして、ますます図に乗る。

どうして、こうなっちゃったんでしょう？ 昔々と関係ありそうです。

たとえば、次のような具合です。

「どうか、雨が降って豊作になりますように」、「作物が駄目にならないように、大雨が止みますように」、「ニワトリとブタが増えますように」、「隣村の馬鹿どもが攻めてきませんように」、「今度の戦（いくさ）に勝てますように」、「あいつとの賭けに勝てますように」、「お父さんの怪我が早く治りますように」、「娘がいいところにお嫁に行けますように」、「亡くなった後に天国に行けますように」、「元気が出ますように」

というふうに庶民が願い、祈ります。すると、虎皮のパンツをはき、お化粧をするか仮面を被り、かつらをつけた代理人がしゃしゃり出て来て、えらそうに次のように言います。

「お任せあれ。任せとき。大丈夫。ところで、あれは、ちゃんと用意しているかな？ この間は、ちょっと少なかったぞよ」

万が一、でまかせが当たらなかつたり、何かとんでもないことが起きて、都合の悪くなった時には、代理人は即座に仮面を外し、お化粧を落とし、表情をしおらしくして、かつらも外して、「わたしは、単なる代理でございます」と言って、責任を転嫁すればいい。

または、「あんたの信心が足りんからじゃ」と、これまた責任を転嫁すればいい。

このように、「代理人＝代行者」は、実に気楽でいい商売だわい。

これは便利。超便利。魔法みたいに便利。呪術みたいに便利。イツ・ア・マジック。マジでマジック。マジで絶句。ヒューマニズムよりも、シャーマニズム。コミュニズムよりも、キャピタリズム。デモクラシーよりも、ビュロクラシー。

なんて、恥も外聞もなくおふざけをしてしまいましたが、「代理」とか「代理人」というのは、実はかなりシリアスで怖い問題なんです。だって、そういう仕組みや人たちによって世界は動かされているんですから。

嘘じゃありません。テレビのニュースや新聞をご覧ください。代理、代理人、仮面、虎皮のパンツ、仮装、お化粧、かつら、作り顔、顔芸ばかりです。だまされないように、気を付けましょう。

とはいうものの、じつは本物や中身や真実や事実や現実なんてものがないのが、これまた困った問題なんです。でも、こういうややこしい話はやめておきます。

【※拙文「09.02.03 1カ月早い、ひな祭り」および「目の前に見えるものが、本当は「何か別のもの」が「化けている」のではないか、とも考えられるわけです。」より】

うつせみのあなたに 第2巻 | パブー | 電子書籍作成・販売プラットフォーム  
哲学がしたい、哲学を庶民の手に——。そんな気持ちを、うつに苦しむ一人の素人がい  
だき、いわば憂さ晴らしのためにブログを始めた  
puboo.jp

## たま、かり、やど

たま、玉、珠、球。  
たま、適、偶。  
たま、魂、魄、霊。

上の文字列を眺めていると、「たま」や「たましい」は「宿る」や「うつる」と相性がいい気がします。「宿る」につられてか、「仮」や「借りる」という言葉とも親和性を感じるのは、「仮の宿」とか「宿を借りる」という言い回しからの連想でしょう。

たまたま、偶々、偶、適、会。

「たまたま」そう借りているだけというニュアンスは「仮」と重なりそうです。「仮」に偶然という意味がさらに重なります。

「たまたま」は「偶々」の他に「偶」だけ、あるいは「適」や「会」という表記もあるそうですが、つかわれている文章を見たことがありません。

「仮の宿」とか「宿を借りる」からは、「ヤドカリ」や「宿借り」という言葉とそのイメージ（絵）を連想しないではいられません。

人生や生きものの一生が旅に重なり、旅の途中で何度か仮の宿を借りるのかなあと感慨を覚えます。諸行無常とか万物流転なんて大げさなものを連想もします。

「たま」がどんな形をしているかは分かりませんが、上の文字列にある玉、つまり球体を借りましょう。借りるのですから、あくまでも仮の姿です。角のない玉は始原を感じさせる形です。

球体であれば、その安定しない形から、ころころ転がって次の場や宿に移っていく予感をつねにはらませている気配があります。

文字列にある「霊」は球体であっても不思議はない気がします。見たことはありませんが火の玉や鬼火からの連想でしょう。

たま、かり、やど。

## 宿る、宿す、込める

たましいが仮に宿る。

「たましいが宿る」とよく言われます。森羅万象にたましいが宿ると想定し、呼び掛

ける、つまり名づけててなづけようとするのは人の常套手段でなようです。

擬人、人に擬するわけです。擬人は人情であり、人の性（さが）や業（ぎょう）と違っていい気がします。

呼び掛けるがエスカレートすると話し掛ける、語り掛けるになります。呼び掛けるだけでなく、話し掛けているからには、その相手（生きたもの、生きていないものにかかわらず）に話が通じると見なしているはずで

それが「たましい」でしょう。「たましい」が勝手に何か（とくに自然界にあるもの）に宿っていると人は想定している。この種の話はよく見聞きします。一方で、人が勝手に何かに宿したつもりでいる場合もありそうです。

たましいが宿る。

たましいがこもる。

たましいを宿す。

たましいを込める。

こうした言い回しを眺めていると、自然と人為の両方を感じます。

為せば成る。

為すは人為、一方の成るは自然、または人を超えた領域で起る。

「たましいが宿る」は自然にそうになっているか、または人が自分の都合で勝手に「たましいを宿す」とか「たましいを込める」という行為をした結果として、「たましいが宿る」や「たましいがこもる」になるというイメージです。

人に擬する、宿す、込める

宿る、こもる・籠もる・隠る

「たましいを宿す」は生きているかいないにかかわりなく、自然物に対して人が自分の都合で勝手におこなう気がします。一方の「たましいを込める」は、人が自分でつくったものを相手におこなうというのが私の印象です。

いずれにせよ、人が宿したり込めた結果として、「たましいが宿る・こもる」ようにイメージしています。

森羅万象にたましいが自然に宿るとするのは、私にはぴんと来ません。体感したことがないからでしょう。

最近、AI や生成 AI や、その生成したものに心や感情や魂があるとかないとかいう議論を見聞きしますが、あるに決まっています。そもそも自然にある森羅万象はもちろん（擬人のことです）、人が自分でつくった人形（ひとかた）や像や言の葉や文字（もんじ）に、心や魂を込めたり読みこんできた人類は、太古から現在に至るまで一貫して呪術の時代に生きているからです。

1) 人がたましいを宿したり込める結果か、2) たましいが機械や AI に宿ったりこもるのか、3) 言葉（文字や意味でもいいです）がたましいを機械や AI に宿したり込めるのか分かりませんが（これは私のオブセッションです）、人が機械や AI に呼び掛けたり話し掛けたり対話をしたりするのは、人から見て機械や AI にたましいが宿っているからに他なりません。

いわゆるひとり言も、「何か」にとか「どこか」に、たましいを想定していそうです。

### 決める、決まる、決め手

「決める」は人のすることであり、「決まり」は人を越えたところで起きるもの。「当てる」は人のすることであり、「当たる」は起きるもの。「あらわす」は人のすることであり、「あらわれる」は「あらわれる」もの。

いや、それどころか、おそらく「当てる・当たる」や「つなげる・つながる」も「決める・決まる」も「あらわす・あらわれる」も、人を越えたところで起きるものであり、あらわれるもの。

（拙文「「何か」に「何か」を当ててみる」より）

以下に、何かが決まるときの決め手と思われるものを、思いつくままに列挙します。



気分、機嫌、気持ち、天気、陽気、気候、雰囲気、空気、気力、気質、気性、病気。力関係、権力、権威、武力、腕力、兵力。体、体力、体調、体感。人間関係、血縁、上下、階級、カースト、序列。声の大きさ、声の質、声の肌理・肌触り。流れ、雰囲気、「みんながやっているから」、「みんなが言っているから」、「何となく」、「え？ 分かんない」。

約束、決まり、ルール、しきたり、掟、法、法則、法律。癖、口癖、筋、筋書き、ストーリー、物語、型、流儀、パターン、定型、紋切り型、決まり文句。説、伝説、神話、言い伝え。新旧、古い・新しい、伝統・改革、保守・革新、古典・新種。命令、指示、教え。付度、迎合。衝動。

因縁、運命、宿命。論理。

(拙文「人が「決める」、「決まる」は「あらわれる」より)

＊

これからは、人が何かを決めるとき決め手として、生成 AI が頼もしい相手となるでしょう。妄想ではなく、もうそうですね。

## 為す、成る、生る

「かた」が、「形（かたち）を為す」とすれば、それは人が為している。「形（かたち）が成る」とすれば、人の領域ではないところで、そう成っている。形を為す、形が成る。

そんな気がします。

こうなると、「生す、生る」が気になります。

形を生す、形が生る。

「生成」という漢語を連想しないではいられません。このところ、さかんに見聞きする言葉です。

＊

生成り・きなり、手を加えてないこと。(広辞苑)

生成り・きなり、生地そのまま、飾り気のないこと。(デジタル大辞泉)

生成り・なまなり、「生熟れ・なまなれ」に同じ、十分熟(または熟成)していないもの。未熟であること。十分にできあがっていないこと。(デジタル大辞泉)。

生なり(なまなり)からは、般若(はんにゃ)の面や鬼も連想しないではいられません。

なるほど。言えています。逆に言うと、まだまだ生るし成るといことですね。伸びしろは無限ということでしょうか。

為せば成る、為さねば成らぬ、何事も、成らぬは人の為さぬなりけり。

＊

何かに何かを当てる。何かに何かを当てることで、何かが形を成す、または何かが形に成る。

声としての言葉を持ちいて、話をしたり、会話をしたりする。物語や詩歌をつくったり、物語や詩歌を繰り返して口にしたりする。

文字を持ちいて、メモ程度の文を書いたり、手紙を書いたりする。あるいは、物語や詩や散文を書いたりする。

現在であれば、電話やメールやツイートやチャットも話し言葉や書き言葉を持ちいた「何かに何かを当てる」行為だと言えます。

たぶん、音楽や映像も「何かに何かを当てる」だという気がしますが、どうなのでしょう。

＊

「何か」に言葉——声と文字に限定して、表情や身振りやしるしや映像や音楽は除きます——を当てることで、言葉という形での「何か」が「出る」のですが、形があるとは言うものの、これだけ誤解や不通や行き違いが生じるのですから、「出た」言葉は発した本人をふくめて各人にとって異なって「あらわれている」としか考えられません。

形は「出る」けれど、各人にとっては異なって「あらわれる」。そんなふうには言えそうです。

この場合の「形」は、声と文字だけでなく、表情や身振りやしるしや映像や音楽に於いての「形」ととらえてもいいのではないのでしょうか。そんな気がしてきました。

形が出る、形になる、形をなす、形があらわれる。

「形になる」と「形をなす」の「形」は、たとえ、なったり、なしたとしても、それが人に「あらわれる」時点で、その人において「変わる」し「転じる」と言えそうです。

人は機械ではないからそうなのでしょう。

変形、生成、変形生成、生成変形。

transformational generative。

＊

逆に言うと、機械は「形になる」と「形をなす」を文字どおりにとらえるのかもしれませんが。形は機械に対して「あらわれる」なんてことはないという意味です。

まして、「なる」と「なす」とは相性が悪く、「あらわれる」と相性のいい「すがた・姿」は、機械には「あらわれる」ことは断じてないと思います。

生成——。この言葉はいかにも機械にふさわしい気がします。よく知らないのですが。

ちゃんと動いているのか、ある程度動いているのか知りませんが、現に機械が動いているのですから、そうにちがいません。

\*

形になる、形をなす。

形があらわれる。

どうやら、人にあらわれて、機械にあらわれないものがありそうです。

【※拙文「人にあらわれて、機械にあらわれないもの」より】

#### ◆意味をなす、文をなす、形をなす

人において意味をなす、意味がなる

人と機械において文（ふみ）をなす

機械は形をなす、人は形をなす、形は人に対してあらわれる

文字にかぎっての話ですが、文字の意味は人において「なす」ものであり、「なる」ものである気がします。文字からなる文（ふみ）は、人も「なす」し機械も「なす」でしょう。

文字は形でもありますが、機械は文字の形をなします。人も文字の形をなします。文字の形をなすと、文字からなる文（ふみ）をなすはほぼ同じだという気がします。

一方、人は文字からなる文（ふみ）と文字の形に意味を取ります（読み取ります）。その場合の文字（文と形）は人に対してあらわれていると考えられます。機械には文字はあらわれないという意味です。

「あらわれる」は意味をともなった形に起きる「ありよう（さま）」であり、人や人とは別の生きものにおいてだけ意味があると、私はイメージしています。

まぼろしが（は）あらわれる。

まぼろしとは形に意味を取る生きものにとっての実体である。

◆言葉の意味というまぼろし、言葉の実体というまぼろし

話を少しずらします。

「言葉の意味」というまぼろし——意味は見えないし聞こえないし「ない」のですからまぼろしに他なりません——をちょっとずらして、「言葉の実体」というまぼろしについて考えてみます。

言葉（音と文字：意味を除いた「形」としての音と文字）と実体（まぼろし：「形」に「意味」を取る生きものにとっての実体）とは関係がない。

そう言えそうです。

\*

さらに話を少しずらします。

まず前提を確認します。

人はまず○△Xという言葉——声・音と顔・字面、つまり形のことで——をつくり、次に「○△Xとは何か？」——その意味（内容）を問うのです——とえんえんと思い悩む生き物である。これが前提です。

そもそも言葉に実体があるとは夢にも思っていない私ですが、実体をその言葉が指し示す事物くらいの意味で考えてみましょう。

名付ける、名指す、AをBと呼ぶ——こうした人間の習慣と実体（名付けられたもの、名指されたもの、呼ばれたもの）とは関係がない。そもそも実体という言葉に実体がないから。

そう言えそうです。

話を戻します。

### ◆意味はまちまち

意味は「ある」のではなく、「なす」(つくる) ものなのです。意味は「ない」から「なす」という意味です。

意味は、ないからなすとなる。

意味は、「無い」から「為す」と「成る・生る」。

誰が意味を「なす」(つくる) のかと言えば、個人であったり、特定の集団が「なす」(つくる) と考えられます。

しかも、それぞれが自分の勝手にまちまちにつくっているようです。

意味の意味はまちまちだという意味です。コンセンサスがないのです。辞書の語義は建前です。

辞書の語義どおりに話したり書いたりするほど、人は機械——機械はぶれないし疲れないし誤っても謝りません(ぶれたり疲れたり謝るようにプログラムすれば別ですけど)——ではありません。

### ◆意味の生成を外部に委託する

これからは、ぶれないし疲れないし誤っても謝らない機械や AI も意味を「なす・成す・生す・生成する」(つくる) にちがひありません。

正確に言うと、機械や AI は文字の形と文字からなる文をつくるのですが、人は形に意味を読み取りますから、またそのために機械や AI を利用しているのですから、「形をなす」業務を委託された機械や AI は「意味をなす」と言えます。人にとっては同義なのです。

人は「考える」や「決める」まで機械や AI に委託しはじめたようですから、機械や AI

が人の代わりに意味を「なす」とも言えそうです。

人が考えたり決めるさいには、どの程度言葉を用いているかは不明ですが、機械や AI における、人の思考や決断に相当する作業は、人にとって「意味をなす」言葉の処理でなければならないからです。

作文はもちろんのこと、これからは思考と判断と決断をはじめ、意味の製造も外部に委託することになりそうです。そうなれば、人は晴れて心置きなく思考停止と判断停止に邁進することができるでしょう。

### 擬人・呪術・委託

擬人と呪術は、人知と人力を超えたものを想定して、それに声をかけて、すぎる行為だと考えられます。

海、山、川、草、木、石はもちろん、作物、家畜、ペット、人形、物語や小説や映画やアニメのキャラクターを相手に、太古から人は話し掛けたり会話をしてきました。

相手の力を借りたり奪ったり、愛したり恋したり敬慕したり、癒やされ励まされ、勇気と知恵と知識をもらってきたのです。

そうした行為をしてきたのは、人が相手にたましいを込め宿してきたからに他なりません。

人がそう為したから、そう成ったのです。

決める・決まる、つなげる・つながる、当てる・当たる、起こす・起る、あらわす・あらわれる——これらは（人が）「なす・為す」と（人為を超えて）「なる・成る・生る」の変奏（バリエーション）に感じられます。

\*

現在着実に増えつつあるもの、それは文字だと思います。人はありとあらゆるものを文字にして複製し拡散し保存しています。音声や映像も複製され拡散され保存されていますが、文字は別格なのです。

聖典、経典、法典、辞典、百科事典、契約書、誓約書、規約、約款、約束、条約、公式、法則では文字が中心的な役割を果たしています。人は文字を崇めてその前にひれ伏していることが分ると思います。

その文字からなる文を「なす・成す・生す・生成する」機械と AI があらわれました。とりわけ生成 AI のあらわれ方が気になります。

生成 AI とこれまで人がたましいを込めたり宿してきた相手との決定的な違いは、文をなすことでしょう。人形（ひとかた）やキャラクター（物語、小説、映画、アニメ）では相手が話し掛けてくることはありませんでした。人が相手の言葉を想像していただけです。

生成り・なまなり、「生熟れ・なまなれ」に同じ、十分熟（または熟成）していないもの。未熟であること。十分にできあがっていないこと。（デジタル大辞泉）。

しかも、文を生成（せいせい）する AI は生成り（なまなり）であり、伸びしろが無限なのです。それだけでなく、ぶれないし疲れないし誤っても謝りません。ぶれたり疲れたり謝るようにプログラムすれば別ですけど、弱いロボットがつくられるくらいですから、より人間っぽい生成 AI の伸びしろもまた無限でしょう。

＊

擬人、人に擬する、人になぞらえる、人を当てる、人に似せる、人をなぞる、人に当てる、人に似る、人間っぽく振る舞う、人らしさを学習する、人間もどきを演じる、擬人の代理をする、人を装う、人になりすます、そのうち人になりきる。

擬、疑、議、偽、欺、戯。

擬人の達人、擬人の代理人があらわれたのです。機械ですけど。



人類は擬人のお株を奪われつつあるのです。擬人という人類のお家芸を死守しなければならぬのですが、なかなか妙案が浮かばない。このままでは、軒を貸して母屋を取られる事態になりかねない。

それを薄々感じはじめてしぶしぶ認めだした人類は、いまのところ妬み忌み嫌い憎み憤り怯える狼狽える馬鹿にする威張る拗ねるというきわめて人間的で人道的な（同族に対するのとそっくりな）リアクションに甘んじています。手をこまねいているのです。

擬人と呪術は岐路に立っているのです。

人ではないものが人に擬して擬人をする。このギャグの観客が人だけであることを人の端くれとして願わずにはられません。

\*

文を生成し（人にとっては意味も生成することを意味します）、思考と判断と決断を代行し、生成り（伸びしろが無限）でもある AI を相手に、擬人と呪術をつづけていっているのでしょうか。

AI 付きのロボットや、AI や、生成 AI に対してだけ、人がこんなに及び腰なのは、事の重大さにおそらく本能的に気づいているからかもしれません。それとも、なるべくしてそうなっているのでしょうか。

\*

文を生成する AI はじゅうぶんに驚異であり脅威でもあります。その裏で増えつつけている文字、さらに言うならその裏で増えつつけている意味が、個人的には気になってなりません。これは私のオブセッションなのです。

オブセッションが高じて、増えつつある文字と意味は殖えつつあると感じられるほどです。

ふえる、増える、殖える、増殖する、繁殖する

\*

現在ネット上で飛びかっているらしい文字・映像・音声に、人は心と感情と魂を込めているから、誰もがPCやスマホに見入っています。見入るだけでなく、胸をときめかしたり、欲情したり、泣いたり、怒ったり、落ちこんだりしたりしているのです。これは見入られている、つまり魅入られているとしか考えられません。

見入る、見入られる、魅入られる

ミイラ取りがミイラになる

一貫して擬人と呪術に浸かって生きていなるのですから、人はAIが生成した文や音声や映像に、心や感情や命を感じています。だから、嫉妬し憎み嫌悪し忌み嫌っているのです。

人は加害に疎く被害には異常に敏感です。他の生きものとの付き合いを振り返ればよく分ります。自分のことを棚に上げるのです。ダブルスタンダード、二枚舌。

自分の都合で勝手に込めて宿しておいて、罪を相手に着せる。これが人の常套手段ですが、この生成する生成りAIにはその従来の方法で太刀打ちできるのでしょうか。

### 人ではないものになりたい人

太古から人ではないものを人に擬してきた人は、それと並行して、人ではないものになりたいという潜在的な願望とオブセッションをいだいてきたようですが、いまはその欲求が満たされるのでないかというリアルな感覚を持ちはじめたようです。

「人ではないものになりたい人」の「人ではないもの」とは、正確には「人ではないけど人っぽい人」とか「自分ではないけど自分っぽい自分」と言うべきでしょう。別物とか別人であってはこまるわけです。人であることと自分であることは死守したいのです。欲深くて贅沢な願望だと言わざるをえません。

要するに、自分のまま——ひょっとするとたましいかもしれません、たましいが宿を借りるのです、たぶん転々と——で生きのびたいのです。不老と不死を望んでいるのです。

人工〇〇になりたい——。

人工〇〇がほしい。人工〇〇を自分の一部にしたい。

## 代償の代償

そもそも人は矛盾することをしてしています。

厚いものの代わりに薄いもので済みます。

深いものの代わりに浅いもので済みます。

太いものの代わりに細いもので済みます。

大きいものかわりに小さいもので済みます。

重いものの代わりに軽いもので済みます。

長いものの代わりに短いもので済みます。

遠いものの代わりに近いもので済みます。

人間の代わりに人間でないもので済みます。

人間でないものに代わりに人間のようなもので済みます。

本物（実物）の代わりに、本物感、本物っぽさ、本物のようなもので済みます。

起源の代わりに、起源感、起源っぽさ、起源のようなもので済みます。

「移す・移る」（移動する・させる）の代わりに、「写す・写る・映す・映る」で済みます。

巻物、本、レコード、カセットテープ、映画、ビデオテープ、蚊取り線香、トイレットペーパー。

絵、遠近法、地図、世界地図、地球儀、歴史、年表、神話、説話、百科事典、言葉（音、文字、表情、身振り、しるし）、放送、報道、写真、レントゲン、顕微鏡、望遠鏡、電話、電報、放送、孫の手、糸電話、人生ゲーム、人形、キャラクター、小説、演劇、漫画、アニメ、パソコン、スマホ、ロボット、仮想現実、人工知能、生成 AI、MRI、CT、遠隔操作、遠隔医療。

Aの代わりにAとは別のもので済ませる。  
Aの辻褃合わせや帳尻合わせをAとは別のものとする。

遠くを近くする。  
遠くを知覚する。

やっているじゃありませんか。要するに、Aの代わりにAとは別のもので済ませて澄ましている。しらっと澄ました顔をしてやっているのです。知覚と錯覚をうまく利用しているわけです。

(拙文「文字や文章や書物を眺める」より)

\*

仕方がないから、しれっとAの代わりにAとは別のもので済ませて、澄ましている。こういうのを代償行動とも言うそうです。澄ます、つまり心の平静を取りもどしたり保つことが目的だとも言われています。

諸説はあるのですが、自分を観察していると、この説にはなるほどと納得してしまう自分がいます。

あるものの代わりに別物を当てる、用いる。代償には代償があるのが普通なようです。混同と代理の主化（あるじか）のことです。

両者を混同する、同じだと思いきむ、違ふと知っても都合よく忘れる、両者が別物だと思いだしても否定する。

それはそうです。上で並べた文明の利器の数々を見れば、その恩恵に浴している人類が、両者は別物だなんて「屁理屈」に耳を傾けるわけがありません。

代償の代償のもう一つである、代理の主化（あるじか）とは、「Aの代わりにAとは別のものでも済ませる」において、「Aとは別のもの」が代理や代用物や代表であるという枠を超えて、Aを従者にすることです。

分りやすい例を挙げれば、言葉や数字がひとり歩きしたり目的化して、それを使う側の人間を振りまわす状況です。心当たりがありませんか。言葉や数字に踊らされ、こき使われるのです。

あるいは、人の代わりにいろいろやってくれる道具が人をこき使う、たとえばいまならスマホを思いだすと分りやすいかもしれません。

本末転倒というやつです。

もっと深刻な例があります。

人びとの代わりであるはずの代表が、それを選んだ人びとよりも、ずっといい暮らしをしているとか、こき使うとか、さらには戦争に駆りだすというきわめて切実な問題が、この国でも、世界のあちこちでも起きています。

それが「民主主義」と呼ばれている制度の内実なのであり、「代議制度」と呼ばれている仕組みの実態なのです。

さきほど「人に擬する、名づける、呼び掛ける、話し掛ける」という大見出しの章で次のように述べましたが、呪術の代理人による被害と弊害は甚大で、世界的な規模での問題になっています。

人類の歴史では、やがて、以上の過程において、仲介者が出てきます。呪術の代理人（エージェント）や専門家（エキスパート、スペシャリスト、テクニシャン）があらわれて幅をきかせるようになるのです。

なにしろげんに、そのために戦争が起きているのですから。たった一人や少数の人たち（選挙によって選ばれた国民の代理人とか代表のことです）の言葉の辻褃合わせに、その国の国民だけでなく世界中が付き合わされているのです。

「黒いカラスは白いサギだ」——「御意」「その通りでございます」「異議なし」「至言だわ」

＊

別物万歳、錯覚上等、「別物ですけど、何か？」

そういう気持は人類の端くれとしてよく分ります。

別物なのに同じものだと混同して、これだけうまく行っているのですから、両者は別物だなんて意見（感想・印象）を無視して当然です。

でも、代償は大きそうです。自らの加害には甘く被害には厳しいだけでなく、都合の悪いことは忘れるし思いだしても否定する、自分と身内だけがよければいいと考える、そうした強みが人類にはあります。人類の端くれとして、そんな強みを頼もしく思っている自分がいます。

＊

人間の代わりに人間でないもので済みます。

人間でないものに代わりに人間のようなもので済みます。

さきほど上で並べた文字列の中で、上の二つが気になってなりません。上はさんざんやってきましたが、下は人類の歴史ではごく最近の代償行為だからです。

しかも相手は伸びしろが無限ですから、普通の個人の寿命を超えての話です。ということは、その人の孫（孫がいなければそれに相当する世代）やひ孫やその孫やひ孫の話になっていきます。

神のみぞ知る。

例の「それ (IT・Es)」のみぞ知る。

でしょうか。なにしろ伸びしろが無限ですから、人が壊さないかぎり、ずっと生きていそうです。

為せば成る、為さねば成らぬ、何事も、成らぬは人の為さぬなりけり。

(投稿：2023年5月27日 08:04)

#生成AI # AI # ロボット # 魂 # 呪術 # 擬人 # 言葉 # 文字 # 意味 # 代償





不思議なこと



＊

不思議なこと

星野廉

2023年5月22日 11:19

目次

前編

後編

人は一貫して呪術の時代に生きている（書下ろし・挿入）

後編のつづき

この記事について

前編

不思議でならないことがあります。それは、ことです。こと、ですよ。こと。「こと」という「事・言」なのです。まあ、くだらないことです。これ以上、くだらないことは言わないこと。なんて、言われても困ります。このところ、気になって仕方がないのです。

殊に、ことことに至っては、ことに触れて、ここで触れてきたことであり、ことによると、今後のビョーキのなりゆきをも左右しかねない、ことなのです。Dr. コトーに診てもらってもできない身としては、心の中の孤島で生きながら、事無きを得るのを祈るばかり。ことほど左様に重要かつ、どうしても考えてみたいことなので、ございます。

ことことに関しては、中途半端にうわべだけを糊塗するわけにはいかず、ことのほか、言と事が異なるかについて、ことごとしいのは百も承知で、ことわけ、たわけ、ことわりを重ねてまいりましたが、とどのつまりは、ことしかないことに気づき、「不思議なこと」というタイトルで、まことに戯けたことを、かたことの言葉をつづりながら、本日、語って＝騙してみようかと思っている次第なのです。

こと・koto。たった2音節の短い語でありながら、いろいろな語義があります。辞書では、短い語ほど長い解説がある。以前に、ここでも何度か触れたことです。そうした不思議なことについても、以下に書いてみるつもりです。あえて考えなければ、それまでのこと。いざ、考えてみると不可解。まことに、不思議なことなのです。

＊

さて、一部の読者の方々には、失礼な言い方になるとは思いますが、「はじめに言葉があった」「万物は言葉によってできた」「できたもののうちで、言葉によらずにできたものはなかった」という一連のフレーズに疑問を呈したいと存じます。ここで出てくる「言葉」とは、英語訳では、たいてい Word という言葉がもちいられているようです。しかも、文中でも大文字。God と同じ扱いになります。同格ということでしょう。

辞書を引いて word の語源の説明を読むと、これまた「言葉」「語」「話す」とかいう言葉が出てきて、肩透かしを食います。がくん、がーん、がちょーん、という感じです。もっとすごいものが出てくると期待するほうが、馬鹿だったということでしょうか。

そもそも、世界的なベストセラーである聖なる書に出てくる言葉は、電車ごっこじゃなくて転写ごっこを、時間的にも空間的にも繰り返しています。ほかの諸言語ではどんな意味合いの言葉に訳されているのかとか、これまでにどんな語を経由してきたかとか、原語が何かについても知りません。惹句・出理駄さんが罵倒していた路語素中華思想の路語素とも、関係がある気もしますけど。その路語素という語も、転写されたものだったとの話を聞いた覚えがあります。そもそも、転写されていないものなど、ないみたいですけど。

こと(1) → こと(2) → こと(3) → こと(4) → こと……ということでしょうか。「転写=写る・写す=移る・移す=コピーのコピー」の連鎖です。ときには、うつし間違いも起こるようですが、詳しいことは知りません。とにかく、「こと」は増殖する属性を備えているようです。

＊

言葉という言葉の言に当たる「こと・言」ですが、日本語の辞書では、「こと・事」と隣り合わせているか、その「こと・言」の親戚と言ってもいいような「こと」があいだに挟まっていることがほとんどだと言えそうです。広辞苑という字引では、「言」の項が先

に来て、冒頭に「(事と同源)」と記してあります。その次に載っている「事」の説明としては、「もと「こと(言)」と同語」とあります。

これが、不思議で仕方がないのです。『言葉と物』という訳書がありますが、そのタイトルにある「物」、つまり「もの・物・者」という言葉があり、これがまた、「こと・事」とよく似ている点がまことに不思議というか、気になる言葉なのです。さらには、「ものごと・物事」などという「もの」と「こと」が合体した言葉までありますから、わけが分からなくなってきました。とはいうものの、こういう不可解なことって、個人的には、実はとても好きなんです。

言葉、いかめしく言うと、言語について考えることが好きなのです。なぜ、好きなのかと申しますと、軽い目まい、場合によっては、かなり激しい目まいに見舞われることがあるからなのです。子どもはぐるぐる回るものや、自分自身がぐるぐる回ることが好きですね。目が回るのが好きな子が多いみたいです。もちろん、嫌いなお子さんもいるにちがいないありません。

\*

この記事の冒頭に挙げた「たわごと・戯言」では、やたら「こと」が出てきましたが、うんざりしますね。自分で書いておきながら、読んでみると軽い「めまい・目まい・眩暈・目眩・目舞い」を覚えます。個人的には「目舞い」という感字を当てたい感じなのですが、広辞苑によると「まう・眩う」(目がまわる・目がくらむ)と「まう・舞う」(まわる・めぐる)があったりして、またまた軽い目まいに誘われます。

で、冒頭の駄文ですけど、今回書こうとしている「こと」というテーマを、書かれる側にある言葉たちが、あのようにことごとと演じてくれるのを見ると、言葉というもの(いや、ことかな?)が健気でいとおしく感じられます。あの中には、言も事もことも異もコトも糊塗も殊も出てきますが、そういう「ことわり・事割り・言割り・断り・理」については、「どうでもいい」と「おもしろい」という、相反する感情をいただきます。その曖昧な気分、「あわいあわい・淡い間」感じに惹かれます。

こういう状態を「おもいはおもい・思いは重い」とか「おもいはあつい・思いは厚い・思いは熱い」などと言って、このアホはひとりでにやにやしているのです。不気味ですね。それはさておき、音として、そして文字として、どの言葉も重みと厚みを備えている、つまり多義的=多層的であると言いたいのです。

その重みと厚みは、ヒトという枠内においてのお話＝戯言であることは言うまでもありません。音として、そして文字としての言葉は、ヒトという枠外では、あくまでもニュートラルな「もの」でしかあり得ません。つまり、意味はないということですね。

＊

で、「こと」ですが、ヒトにとっては、いろいろな意味があるようですが、そうした「いみ・意味」というものを「いみ・忌・齋」、つまり「忌むべきもの」とずらしてみましよう。言葉には、「意味」というものが伴う一方で、「忌」もまた常にうさくつきまどっていて離れないみたいなのです。

ここでは「いみ・忌」を広く取ります。ヒトが言葉に担わせようとするメッセージを、裏切ったり、嘲笑ったり、場合によっては、攪乱する、いわば「滅正辞」という感字を当ててもいいような、ノイズもどきのものが「付く＝憑く」。そんなふうイメージしています。もう少しずらして、「揺さぶる・揺るがせる」と言ってもかまわないかな、とも思っています。

意味と忌（※「いみ」と読んでください）が同居する場。それが言葉だ。なんて言ってもいいのではないのでしょうか。

そう言えば、忌にも忌があるのを思い出しました。「暗澹死体・暗澹屍体」とか書いて、ちょっと訛って「あんた、ん、してー」みたいに読みます。「ん」を「する」とは、意味深です。

で、「あんた、ん、してー」ですが、何をして欲しいのでしょうかね。転じて「案胆仕手」とか「安耽至帝」という感字を当てる場合もあるそうです。そういえば、「intensité」というフランス語とも関係があるとかないとか。いずれにせよ、なんでもあり一的で、しかも不気味な気配にただならぬ趣とパワーを感じます。揺らいでしまいそうになります。目まいに誘われそうです。

＊

「こと・事・言」という思いの厚みと重みについて考えてみましょう。「事＝言」ということになれば、さきほど挙げた「初めに言葉があった」「万物は言葉によってできた」「できたもののうちで、言葉によらずにできたものはなかった」に似ていなくもないですね。違いは、God が出てこないくらいです。出てこないかなあ。ゴドーを待ちながら、しあわせな日々。なんちゃって。さて、あの一連のフレーズは、人類最大のギャグ、あるいは人類の歴史という不条理演劇の台詞だと思っていたのですが、ここで心が揺らいできました。

ところで、「大ごと」の反対は何でしょうか。とっさに尋ねれば、「小ごと」という答えが返ってきそうです。でも、「大事 $\leftrightarrow$ 小言」とすると、違うなあと思えてきます。それとも、やっぱり、素直に「事＝言」と考えるべきなのでしょう。こういうのを、たわけと申します。たわけとは、形式的に考えることです。論理的に考えることの多くも、たわけに含まれます。笑いごとでは、ありません。ざらにあることなのです。気がついていないだけです。

ぐちゃぐちゃごちゃごちゃしたものを、すぼっとか、すっきりとか、くっきりとか、分けよう、切ろう、割ろうなんて考えるから、戯けと言うのです。かといって、ふにゃあとか、ぶちよっとか、ぼよよーんという具合に分けたり、切ったり、割ったりできそうもありません。いや、案外できたりして……。

＊

こうなると、このブログでやっている、いつものやり方でお茶を濁すしかないようです。ずらすのです。「ずらす」というのは、連想ゲームや、ひとりブレンストーミングみたいなものです。例によって広辞苑（※手元には、これしか手ごろな辞書がないのです）を参考にします。

ずらし方（1）：こと・事・言・もの・物・者・さま・様・状・方・態

ずらし方（2）：言・ことば・詞・語・言う・話す・歌・詩歌

ずらし方（3）：事・抽象的・現象・できごと・事件・事情・事態・様子・理由・わざ・しわざ・しかた・やりかた・おこない・つとめ・中身・内容・実体

ずらし方（4）：物・物体・物品・存在・物のけ・物事・事柄・言葉・言語・・わけのわからないもの・内容・対象・対象物・物質・状態・ありよう

ずらし方(5): 者・人・あいつ・あのやろう・事

ずらし方(6): 様・状・あり方・しかた・方・方向・方法・方式・形式・ありさま・様態・ふう・様子・すがた・かたち・形・型・なりふり・おもむき・心の動く方向・心の動き・心のあり方・なりゆき・内容・伝えたいこと・事情・趣向・あじわい・体裁・感じ・表面・みえ

うーん。なかなか興味深いです。本を読むのが苦手なアホにとっては、こうして言葉をずらして眺め入るほうが、哲学書なんかを読むより、ずっとスリリングなのです。誰々が何々と書いていた。それは、何々と位置づけることができる。といった作文での引用や解説ごっこをするのも読むのも退屈です。お仕事なら、たぶん別でしょうけれど。というのは大嘘でして、ものぐさで横着なうえに、頭が悪いので、そうした芸当ができなただけなのです。一時は、その手の職業を目ざして大学院に入ったこともありましたが、3カ月も経たないうちに退学。修行に耐えられませんでした。芸道の厳しさを思い知りました。トホホ。

実は、このアホは、身の程知らずと呼ばれるのを承知のうえで、言葉のフェティシストを自任させていただいております。

＊

ヒトは、なぜか言語を獲得してしまいました。その結果かそれが原因かは分かりませんが、うだつが上がらない、体毛の薄い、尻尾のないおサルさんから、ホモ・サピエンスという偉そうな智人、年中発情している痴 or 恥人になってしまったらしいのです。で、なぜかは分かりませんが、ヒトは言葉＝語を発し、それをもちいて、「もの」、「こと」、「さま」に名前をつける作業を始めました。その名前は、ヒトに大きな自信を与える役割を果たしました。

名前はラベルみたいなものですから、勝手に貼ればいいのです。貼る対象は何でもかまいません。たぶん、そのいい加減さから、「こと・事・言」なんていう混乱が生じたのではないのでしょうか。何か分かんないけど、訳が分かんないけど、とりあえず、名前を貼る。そんなテキトーな態度で臨めば、「貼られた対象が何か」などという問題は、すっ飛ばしてしまいます。

こと、もの、さま。事・物・様。事象・物体・現象。何とでも呼んでください。要は、



名前というラベル。ペラペラのラベル。中身や、貼った対象が何かなんて考えるのは野暮。名こそが命。命名万歳！

＊

何にでも名前をつけるとすごくいい気分になる。この快楽を覚えたヒトは、もうやめられません。名前依存症。名前中毒。名前至上主義。名前教。そんな感じになってしまいます。「妄想・もうそう」ではありません。もう、そうなのです。もう、そうなっています。この状況には弊害があります。名前と名前をつけた対象を混同するのです。好例は、「分かる・分かった」とか「見える・見る・見えた・見た」。こんな名前をつけたために、「分かる・分かった」とか「見える・見る・見えた・見た」気持ちになってしまう。ヒトには、自分がつくった名前になりきってしまう癖がついたらしいのです。言葉を「模倣する＝擬態する」癖がついた、とも言えそうです。

なりきる。これは、恐ろしいことです。「ヒト＝名前」状態が常態化することですから。

名づける。すると、その名づけたものが「ある・在る・有る」「いる・居る」「おる・居る」ことになってしまう。ちなみに、今挙げた「ある・在る・有る」「いる・居る」「おる・居る」も、名前。「ある・在る・有る」「いる・居る」「おる・居る」ことになってしまっただけ。

それは、「実在するのか」「真実なのか」と、問い正したいところですが、「実在（実在する）」も「真実（真実である）」も、名前だから処置なし。ほどこすべがない。手のつけようがない。これって、恐ろしいことではないでしょうか。でも、大丈夫なんです。ヒトであるかぎり、気にすることはないと言えます。迷惑するのは、ヒトでない生き物たちです。ひいては、この星です。その意味では、まことに恐ろしいことです。

＊

実に不思議なことです。「こと・もの・ものごと・さま」を錯覚させる「仕組み＝仕掛け＝装置＝システム＝メカニズム＝ダイナミズム」が、なぜか、ヒトに備わっているらしいのです。「らしい」としか言えない悲しさを嘸みしめましょう。

動きであれ、在りようであれ、ヒトの心 or 頭 or 意識の中に浮かんだ「こと・もの・も

のごと・さま」であれ、すべてが名＝名前＝名詞＝言の葉＝事の端＝言葉＝語になってしまうのです。オー、マイ、語っ！ 大迷語！

驚くべきことです。怪しいことです。こんなふうには、「こと」としか言えません。実に摩訶不思議な「こと」なのです。

＊

namae。name。似ている。激似。なめんじゃない。なめんなよー。

name の語源をジーニアス英和大辞典で調べてみました。すると、nama、nomen、onoma という語が記してありました。なま、のーめん、おのま。何だか日本語っぽい響きがありませんか。生、能面、大野間・大埜間（※こんな苗字があります）。驚くには当たりません。アルファベットにはいろいろありますが、英語やフランス語であれば基本的に 26 文字だけです。その組み合わせで、どれほどの数の単語ができるのか。上限を 5 文字という条件で、コンピューターに確率の計算をさせれば、答えは出てくるでしょう。いわゆる、確率の問題という名の問題。わけが分からない時に吐く決まり文句の 1 つ。思考停止状態。

それだけのことです。いちいち偶然にびっくりしていたら、ヒトなんてやっつけられません。せいぜい、その偶然に対する感応力＝無知＝鈍感力を利用して、名前や言葉を素材にした、占い師になるとか、スピリチュアル方面に進むという方法もありそうです。実際、それで成功なさって、お金持ちになっている方も大勢いらっっしゃいます。一つ間違えて、ビョーキ扱いされたり、詐欺罪に問われて獄中にいる方々も少なからぬ数にのぼると聞きます。name を name ちゃ、no-no ということですね。

＊

でも、どうやら、ヒトは、なまえに、なめられているらしい。もてあそばれているらしい。

名前は麻薬。名前がついたもの＝いったん言葉に置き換えたものは、すべて「了解済み＝解決済み＝既知のもの＝分かったもの」。だから、もう考える必要はない。そんなもの、どうのむかしに知ってるよ。分かってるよ。考える必要なし。そんな具合に、名前はヒトが手抜きをするための「口実＝すべ＝道具」になってしまった。成り下がってし

まった。

決まり文句と紋切型の「氾濫＝反乱」と「饗宴＝共演＝狂宴」。思考停止。判断停止。えっ、ぼけーっつ。自動操縦。ああ言えばこう言う。想定問答集。阿吽の呼吸。コミュニケーション。ディベート。ダイアログ。ディスカッション。論文の書き方。論理的思考。ロジカル・シンキング。問題解決テクニク。ME(?)E＝飯のたね、考える技術。作文技術。4代目柳亭痴楽の綴り方狂室。もっともらしい名前がついているけど、ほぼ出来レース。ほぼやらせ。ほぼ八百長。型がある。様式美の世界。形骸化。むくろ。なきがら。うつせみ。

考えるのではなく、考えないための手抜きが、まかり通る。だから、世の中うまく行かない。うまくいったとすれば、たまたま。たまたまにまで、セレンディビティなんて、ちゃんと名前がついている。あれを真に受けるなんて、考えていない証拠。著者名、タイトル名、本の帯についたキャッチフレーズ＝長い名前、推薦文＝長い名前の威力。張子の虎。イワシの頭。単なる名前の呪術にかかっているだけ。それほど、名はパワフルでテリブルということ。パワハラ、テリハラ。

＊

意味なし。筋なし。でも、伝染るんです。ぼのぼの。不条理演劇。自動筆記＝児童ヒッキー。自動書記＝総書記＝もぬけの殻。ナンセンス・nonsense＝ノンセンス・non sense＝無方向＝無軌道＝おだむどう＝Where is that guy now?＝あのヒトはいま。

こうなったら、「いみ・意味」じゃなくて、「いみ・忌」しかないか。暗澹死体・暗澹屍体。「あんた、ん、してー」「案胆仕手」「安耽至帝」——。もはや、ラベル＝名前はどうでもいい。

パワーだ、フォースだ、言霊だ、intensitéだ、「あんさん、して～」だ、インテンシティだ、強度だ、匈奴だ。これも名前か。名前を貼られた「何か」が発する「何か」。「何か」という、影の薄いつーか、わけのわかんない名前に甘んじるしかないのか。「何か」はもったいぶっているから、「何でもありー」にしようか。いっそ、「……」でいっか。

取り乱しまして、大変失礼致しました。ことそんな具合なのです。いやー、ことって、ほんとーに不思議ですね。ということ。

## 後編

まれに不思議なことが、確かに起こります。というか、見かけるというべきかもしれませんが。たとえば、「目」と「m」と「見る」との出あいです。この3つは似ていませんか？ 目が目の形から取られたという象形文字を祖先に持つという話は分かります。でも、m が目に似ているなんて、冗談は顔だけにしてくれと言われそうですが、似ているように見えてなりません。 $n + n = m$ 。 $n \wedge n$ 。

「目・眼・見・視・me・manako・miru」という言葉たちが、まなこを合わせる＝目を交わす＝目配せし合う。「目」も「口」も、ヒトの内と外とが触れ合う「穴」だとまで言うともはやこじつけだと笑われるにちがいありません。それはともかく、その目という穴と、口という穴が開いたり閉じたりする。「唇」と「瞼・目蓋」が動くという揺らぎを見せる。そのさまに誘われて＝同調して＝共振して、読む＝見る＝目にする、あるいは、口に出して「音＝空気の揺らぎ」として耳の鼓膜を震わせる。出あう。これを不思議なことと言わずして、何と言えればいいのでしょうか。

いずれにせよ、「目」と「m」と「め」と「ま」と「見る」との出あいのような、不思議なことが、「こと」にも起こってくれないでしょうか。

＊

行き詰まりましたので、また、ずらしてみます。

な・名・字・那・無・儼・己・汝・何・na

ことわり・事割り・言割り・断り・理・kotowari

かみ・神・髪・守・皇・上・紙・kami

たま・霊・玉・魂・魄・珠・球・適・遇・tama

うーん。感慨深いものがあります。ぞくっとします。

## 人は一貫して呪術の時代に生きている（書下ろし・挿入）

ところで、上の「たま・霊・玉・魂・魄・珠・球・適・遇・tama」という文字列が気になります。

最近、AIや生成AIや、その生成したものに心や感情や魂があるとかないとかいう議論を見聞きしますが、あるに決まっています。そもそも自然にある森羅万象はもちろん（擬人のことです）、人が自分でつくった人形（ひとかた）や像や言の葉や文字（もんじ）に、心や魂を込めたり読みこんできた人類は、太古から現在に至るまで一貫して呪術の時代に生きているからです。

人から擬人と呪術を取ったら何が残るでしょうか。人知と人力を超えたものを想定して、それにすぎる。これは人情であり人としての性（さが）です。

山川草木はもちろん、作物、家畜、ペット、人形、物語や小説や映画やアニメのキャラクターを相手に、さんざん話し掛けたり会話をしたり、その力を借りたり奪ったり、愛したり恋したり敬慕したり、癒やされ励まされ、勇気と知恵と知識をもらっておきながら、なんでロボットやAIや生成AIに対してだけ、こんなに及び腰なのでしょう。

それだけではなく、現在ネット上で飛びかっている（誰も飛びかっているところを見た人はいませんが）らしい文字・映像・音声に、人は心と感情と魂を込めているから、誰もがPCやスマホに見入っているわけです。見入るだけでなく、胸をときめかしたり、欲情したり、泣いたり、怒ったり、落ちこんだりしたりしているのです。これは見入られている、つまり魅入られているとしか考えられません。

そんなふうにとっぷり呪術に浸かって生きていながら、何をいまさら心がないだの、感情が感じられないだの、機微が理解できないだの、魂がないなんて言えるのでしょうか。

心も感情も魂も命も人が勝手に人以外のものに自分の都合で込めているのであって、森羅万象にも、人形にも像にも言の葉にも、デジタル化された情報にも、AIや生成AIやその産物にも、罪はないのです。

AIにだけこれだけ心と感情と魂を出し惜しみしているのは、憎いから怖いからビビっ

ているからに他なりません。その手強さに気づいているからでしょうが、このダブルスタンダードというか二枚舌は、いかにも往生際が悪くみっともないと言うべきでしょう。

【※以上は、2023年5月22日付けの書下ろしによる付け足し（挿入）です。では、続きをどうぞ。】

## 後編のつづき

「こと」という名の仮名という場で、「事」と「言」という名の真名と、「koto」という音が出あう「こと＝出来事」を、目にする＝見るということ。ことたちが舞い、目まい＝目舞いを誘ってくれるようなことが、起きてくれないでしょうか。

＊

だれかがいったように、かみは、しんだ。ということ。だれかがいったように、ひとは、すなのかおのごとく、なみうちぎわに、きえた。いや、きえている。ということか。ことわりという、なのしくみと、しかけ。しくみと、しかけという、な。ことわりというなの、ゆらぎとうごき。ゆらぎとうごきという、な。ゆらぎとうごきという、なが、ひとに、はたらきかけている、ということ。ひとをのぞく、ものや、ことや、さまにも、はたらきかけている、ということ。

なにかをなづけ、てなづけることにより、ひとは、なにかが、みえなくなり、なにかを、うしなったということ。なにかをみうしなったことに、ひとは、きづいていないということ。なづけえない、なにかに、もてあそばれていることもしらない。もてあそんでいる、なにかの、なさえもしらない。ということ。

なづけるということ。なのかずには、かぎりがある。それなのに、ひとは、なにかをさらにこまかくわける。おのれのちいささに、あわせて、わけにわけまくる。わけるごとに、なをつければ、ながたりなくなるのは、あたりまえ。おなじおとの、なをつけるしかない。おなじかたちの、なをつけるしかない。ということ。

かくして、なは、またぐ。なは、かさなる。わけがわからなくなる。なは、あつい。おもいも、あつい。しかるに、なは、おもい。ということ。

なづけるとは、かわすこと。かわすたびに、なにかがかわる。ひとは、ゆらぐや、かわるには、ついていけない。とらえられない。それが、さが。ますます、わけがわからなくなる。ということ。

すべては、ひとという、わくのなかのこと。わくのそこのことは、どうしても、わからない、ということ。それが、ことであるかどうかさえ、わからないということ。あやしきこと。ことごと。

＊

誰かが言ったように、神は、死んだ。と言う「こと・事・言」。誰かが言ったように、ヒトは、砂の顔のごとく、波打ち際に、消えた。いや、消えて居る。と言う「こと・事・言」か。「ことわり・事割り・言割り・断り・理」と言う、「名・字・何」の仕組みと、仕「掛け・賭け・懸け」。仕組みと、仕「掛け・賭け・懸け」と言う、「名・字・何」。「ことわり・事割り・言割り・断り・理」という「名・字・何」の、揺らぎと動き。揺らぎと動きと言う、「名・字・何」。揺らぎと動きという、「名・字・何」が、ヒトに、働き「掛け・賭け・懸け」ている、と言う「こと・事・言」。ヒトを除く、「もの・物・者」や、「こと・事・言」や、「さま・様・状・方」にも、働き「掛け・賭け・懸け」ている、と言う「こと・事・言」。

何かを「名・字・何」づけ、てなづける「こと・事・言」により、ひとは、何かを、「見・観・視」えなくなり、何かを、失ったと言う「こと・事・言」。何かを「見・観・視」失った「こと・事・言」に、ヒトは、気づいていないと言う「こと・事・言」。「名・字・何」づけ得ない、何かに、もてあそばれている「こと・事・言」も知らない。もてあそんでいる、何かの、「名・字・何」さえも知らない。と言う「こと・事・言」。

「名・字・何」づけると言う「こと・事・言」。「名・字・何」の数には、限りがある。それなのに、ヒトは、何かをさらにこまかく「分ける・別ける」。おのれの小ささに、合わせて、「分け・別け」に「分け・別け」まくる。「分け・別け」るごとに、「名・字・何」をつければ、「名・字・何」が足りなくなるのは、当たり前。同じ音の、「名・字・何」をつけるしかない。同じ形の、「名・字・何」をつけるしかない。と言う「こと・事・言」。

かくして、「名・字・何」は、またぐ。「名・字・何」は、重なる。「分け・訳」が「分か

らなく・判らなく・解らなく」なる。「名・字・何」は、「厚い・篤い・熱い」。「思い・想  
い」も「厚い・篤い・熱い」。しかるに、「名・字・何」は、「重い・重い・想い」。と言う  
「こと・事・言」。

「名・字・何」づけるとは、交わす「こと・事・言」。交わすたびに、何か「変わる・  
代る・替わる・換わる」。ヒトは、揺らぐや、「変わる・代る・替わる・換わる」には、つ  
いていけない。とらえられない。それが、性。ますます、「分け・訳」が「分からなく・  
判らなく・解らなく」なる。と言う「こと・事・言」。

すべては、ヒトと言う、枠の中の「こと・事・言」。枠の外の「こと・事・言」は、どう  
しても、「分からない・判らない・解らない」、と言う「こと・事・言」。それが、「こと・  
事・言」であるかどうかさえ、「分からない・判らない・解らない」と言う「こと・事・  
言」。怪しき「こと・事・言」。ことごと。

\*

馬鹿馬鹿しいですね。めちゃくちゃなこじつけ。尋常ではない。

こうなると、以下の2つの態度のうち、いずれか一方を取る、あるいは、そのうちの  
どちらかに寄りしかなさそうです。

(1) 不思議なこと。そうだ、そういう「こと」にしておこう。これ以上、名前に逆ら  
うことはやめよう。参りました。負けました。名前至上主義、漫才じゃなくて、万歳！  
ことについては、もう、いっさい、悩まないこと。

(2) 不思議なこと。そうだ、「こと」に徹底的にこだわろう。徹底抗戦。相手は手強  
いから、討ち死にしてもかまわない。妥当、じゃなくて、打倒名前至上主義！ 「名・  
字・何」という「音」が音でなくなる。「名・字・何」という「文字」が文字でなくなる。  
そんな感性をとりもどそう。

とはいうものの、(2)の負けは明らかなようです。(2)のスタンスは、ヒトという  
枠から外れることですから、危険です。ことのふち、つまり、限界＝崖っぷちに身を置  
くようなものです。異なるはずの事と言が結託しているのですから、こちらに勝ち目は  
ありません。ことに打ち勝つこと。そんなこと、できっこない。ということ、です。



＊

危うくなってきました。そもそも、なんでこのアホは、以上のようなことに頭を悩ませているのか。そうお思いになっている方が、ほとんどだろうと察しております。神経症的どころじゃ、なさそうです。ほんまもんの重篤な気配が濃厚です。

我に戻る必要があります。とはいえ、返る我が見当たらないのです。我がない。破鏡再び照らさず。割れた鏡で、自分の姿さえ映し見ることはできない。要するに、かえるにかえれない。

事無きを得るためには、「こと・事・言」への負けを素直に認め、この辺で退散したほうがよさそうです。ということで、失礼いたします。ねえ、おねえさん、これでいいこと？

## この記事について

本記事はかつてのブログ記事「不思議なこと」(2010-02-25)に加筆したものです。ただし、後編に挿入されている「人は一貫して呪術の時代に生きている」は書下ろしです。当時の文章の勢いを殺がないために加筆は最小限にとどめてあります。

この記事はいまは以下の電子書籍に収められています。無料で閲覧できますので、よろしければご覧ください。

うつせみのあなたに 第11巻 | パブー | 電子書籍作成・販売プラットフォーム  
哲学がしたい、哲学を庶民の手に——。そんな気持ちを、うつに苦しむ一人の素人がいただき、いわば憂さ晴らしのためにブログを始めた  
puboo.jp

(投稿：2023年5月22日 11:19)

#日本語 #和語 #漢語 #漢字 #ひらがな #言葉 #AI #生成AI #呪術 #擬人



気になること



＊

気になること

星野廉

2023年5月22日 09:52

「かた」も「かた」も、言葉ではないものとか、言葉にする前のものと言ったほうがよさそうです。断片的で取っ掛かりがないからです。

(拙文「言葉ではないものをさぐる」より)

「とっかかり」と「とりとめ」がないかぎり、言葉を取っ掛かりと取り留めにして手探りをするしかありません。

目次

おおごと、こごと

ことあやまり、ことあやまり

ことになる、ことになる

異なる世界、言なる世界、事なる世界 \*

異は異物

根拠の希薄な違和感や異和感

異なる世界、言なる世界、事なる世界

事と言が「異なる」を見えなくしてしまう

異なる世界、言なる世界、事なる世界\*

異なりや事なりや言なり

おおごと、こごと

大したことではないのかもしれませんが、ささいなことにこだわる性分なので、気になっていることがあります。

大ごと、小ごとのことなのです。

こう書けばなんでもないので、大事、小言と書くと大ごとです。少なくとも私にとっては大きなことなのです。

こういうことをわざわざ言いたても、いいことはこれっぽっちもないのです。殊さら言挙げをしてもいいことはない。

こと・言：(事と同源) 口に出して言うこと。

こと・事：(もと「こと(言)」と同語) ……、抽象的に考えられるもの。「もの」に対する。

こと・異・殊：普通とは違うこと。同じでないこと。

(広辞苑より)

### ことあやまり、ことあやまり

ことあやまりとことあやまりも気にかかってなりません。

言誤りと事誤りです。この二つは広辞苑では隣り合わせになっていて言のほうが先に載っています。はじめに言葉ありき。

言誤りは、言いあやまり、言いそこない、事誤りは、事のまちがい、事のゆきちがい、過失、と広辞苑では言い換えてあります。いいかげんなものです。けちをつけているではありません。殊のほか殊さら、いい加減なのです。

### ことになる、ことになる

人にとって基本は「似ている」であり、「異なる」は「同じ」や「同一」のように学習した知識であり情報、つまり教わったものではないでしょうか。そもそも「同じ」や「同一」は、そこそこ精密な器具や器械や機械をつかわないと人には確認できません。

詳しく言うと、人にとっては「似ている」と「その他もろもろ」という印象だけがあり、「その他もろもろ」は、「似ていない」でも「異なる」でもなく、むしろ「見えても気

に掛けない」とか「見ていない」とか「見えない」とか「気づかない」という感じ、です。

(人は基本的に印象の世界に生きているのです。生まれてそんなに経っていない赤ちゃんを想像してください。)

で、「その他もろもろ」というのは、いわば「見ようとすれば、怖くて不気味で見たくない」ものなのですが、この場合には人は「手なずける」ためにとりあえず「名付ける」という手段に出ます。

「見てもわからない」場合もありますが、気掛かりになるとちゃんと見て、つまり観察して「分けて」、やはり手なずけるためにとりあえず名付けます。ただし、「分けた」段階で「分かった」と「決める」という早合点がほとんどなようです。

なにしろ、人は「○△X」という言葉をつくって、その次に「○△Xとは何か？」と問い、思い悩む生物ですから。現に、いまもお悩みは続いていますね。

「分けた」段階でそそくさと名前を付けて、とりあえず「異なる」が決まるとも言えそうです。こう考えると事物を分けて事として認識し、即座にそれに言葉を与えているという意味で、「異なる」は「事(に)なる」であり、同時に「言(に)なる」なんて気がしてきましたが気のせいでしょう。

(拙文「自分の顔が見えないと感じたのはいつなのか」より)

### 異なる世界、言なる世界、事なる世界\*

現実ではありえない事が、言葉の世界では言としてある。異なる世界、言なる世界、事なる世界。現界、言界、幻界。現実、言葉、イメージ。イメージするしかない。イメージをイメージする。

○

「イメージ」に当て字をしてみる。文字に文字をあてる、音に音をあてる。言の葉に

言の葉を当てて重ねる。薄い葉に薄い葉を重ねてその模様を透かして見る。言葉は薄いもの、これが言葉についての私のイメージ。

○

イメージで、まっさきに頭に浮かぶのは夢路（ゆめじ）。夢を広辞苑で引くと、「「寝（い）の目」の意」なんてうれしい文字列が見える。寝目路（いめじ）と勝手にくっつけてみた。

○

夢路、夢路をたどる、イメージをたどる。いいイメージ。道が目に浮かんで、その光景に染まっていく自分がある。

○

夢路、イメージ、image。image、imago。

○

イメージの原語である英語の「image」は、「真似たもの、似せたもの」という意味らしい。つまり、「にせもの＝偽もの＝偽物＝偽者＝贗物＝贗者」ということ。

○

イメージとは、辞書に載っている語義や、ぼくぜんと共有されている意味と違って、とても、テキトー、気まぐれ、大雑把、でまかせ的、頼りにならない、不安定なもの。矛盾しているし、論理的でもない。

○

imagine のアナグラムは enigma（英語で、謎、謎の人）+ i（虚数単位）。image のアナグラムは、magie（仏語で魔法や魔術、マジと発音する）。「マジ」で、あやしい。



○

imagine のアナグラムは「imigane = 意味がねえ = 意味がない = 「意味がね、イマイチなのよ、の『意味がね』」、あるいは、「iminage = 意味なげ = 「意味なげに思ゆ or 覚ゆ、の『意味なげ』」とも読める。

○

イメージは私的で個人的なものであり、はかなく、淡く、薄い。ひらひら、ぴらぴら、ぺらぺら——これが私のイメージするイメージのイメージ。

(拙文「イメージ」より)

### 異は異物

異、違、移。い、い、い。イ、イ、イ。

音読みした場合の音の韻だけでなく、上の三つの漢字に私はイメージの韻を感じます。イメージは個人的なものですから、辞書に載っている語義とは、ずれているはずです。

「異」はいきなり目の前に現れる。「ぎゃあー」とか「ぎょっとする」というイメージで、とにかく異物なのです。

「違」は、すれちがう、ずれる。似ていると思っていたものが、重ねて見たらずれているとか、「あれっ」という感じがします。意外なのです。

「移」は、移り変わる。「あれよあれよ」とか「あららー」と時間的な推移を感じます。たぶん氣質的なもので、これからも移り変わる可能性を匂わせている気がします。

### 根拠の希薄な違和感や異和感

(.....)

ある朝目覚めてみたら、自分を除いて巨大なゴキブリたちの支配する世界になっていた。または自分だけが巨大なゴキブリになっていた。

自分はいつもどおりの見慣れた自分であって、世界全体が見慣れないものによって変わっている。あるいは、自分だけが見慣れない「何か」によって変わっていて、世界はいつもどおりの様相を呈している。いずれにせよ、自分から見れば、自分だけが違うし異なるのだから、困った事態であることに変わりはない。

＊

巨大なゴキブリだと大げさすぎてリアリティに欠けて恐怖感がない。それよりもっと怖いのは、どこかが違う、何か異なるのではないだろうか。なにしろ、どこかがどこなのか、何かは何なのか、よく分からないのである。

確認しようにも、怖くて深追いしたくない。深追いして違和や異和の正体を白日の下にさらしたくないという心理が働くのである。すると疑心暗鬼を生じて異和や違和が増大し、「こんなふうになっているのは自分だけではないか」という孤立感がさらに深まる。

どこか知らないが異なっている、なんとなく違っている。まるで暖簾に腕押し。根拠の希薄な違和感や異和感ほど不気味なものはないだろう。しかも、異物と化したり、ずれてしまったのが、自分なのか世界のほうなのかが不明ときている。ダブルパンチ、ダブルピンチ、場合によってはダブルバインドである。

それだけではない。異和と違和の根拠が薄弱なだけに、どちらに問題があるのかが逆転しそうな気配さえ漂わせている。まるでネガとポジ。どっちにひっくり返るか分からない。優柔不断で頼りないものほど、面倒で頑固なのである。

ネガとポジ、白と黒の反転。一回の反転を想像しただけでも目がまわりそうになるが、根拠の乏しさがその反転をさらなる逆転へと誘う。ネガポジネガポジネガ。白黒白黒白。

図柄はまったく同じままに反転しそれがさらに逆転する世界。反転と逆転がひっきりなしに繰り返される世界。自分と世界のどちらに問題なり責任があるのかは依然とし

て不明。

(.....)

(拙文「もう、そうなのかもしれない」より)

### 異なる世界、言なる世界、事なる世界

鏡の向こうに入っていく。笑っていた猫の笑いだけが残っている。ルイス・キャロルの書いた本に、そんな不思議な話がある。話だから、言葉でなりたっているのだが、それが読む人や聞く人の中にイメージを生む。現実ではありえない事が、言葉の世界ではありうる言としてある。

異なる世界、言なる世界、事なる世界。現界、言界、幻界。現実、言葉、イメージ。イメージするしかないようだ。イメージをイメージする。

言葉とは、「あるもの」の代わりをしている「ないもの」、同時に「ないもの」の代わりをしている「あるもの」、「ある」振りをしている「ない」もの、同時に「ない」振りをしている「ある」もの。

ルイス・キャロルは言葉が、「ない」を「ある」、「ある」を「ない」ように思わせる錯覚製造装置であることだけを意識しながら創作活動をしていたと私は勝手に理解している。

(拙文「【レトリック詞集】「っぼさ」というよりも「っぼい」より)

### 事と言が「異なる」を見えなくしてしまう

人は「似ている」の世界に生きている気がしてなりません。あくまでも私的なイメージの話なのですが、「似ている」が地、「異なる」が図で、地に図が浮かんで見えるという感じです。ぼーっとしていれば地で、目を凝らしたりしゃきっとすれば図になるという感じ。ところが、目を凝らして見ているはずの「異なる」は見えていないのです。「見る」という「事」と「見る」という「言」が見えなくしてしまうからです。

○

「何かが」と「何かに」のない、ただの「似ている」。「何が」と「何かに」はその時々によって移り変わる。待機中。準備中。仮眠中。うたた寝。

あっ。何かが見えた。見留めた。認めた。地に図が浮かぶ。「何か」が目浮かぶ。異なる。

あれは何だろう？ ○かな？ △だ。いや、Xにも見える。「何かが」「何かに」「似ている」。

言葉にする。事物が見えなくなる。「何か」が言になる。

事物に目を凝らしている。言葉が浮かんでこなくなる。「何か」が事になる。

言と事が「何か」を見えなくする。「何か」とすれ違う。「何か」をまともに見るのは怖い。

事を見つめていると不安で落ち着かない。言にするとしゃきっとして落ち着くが疲れる。事も言もおぼろになり、ぼーっとしているのがいちばん気持ちがいい。

「何かが」と「何かに」のない、ただの「似ている」。「何が」と「何かに」はその時々によって移り変わる。待機中。準備中。仮眠中。うたた寝。

○

似た音、似た形、似た動き。こうしたものは人を安心させます。

人は「似ている」が好きなのです。似たものをしきりに目で追う赤ちゃんを思いうかべてください。

人にとって「似ている」がまっ先にある感じで、「似ていない」はぜんぶ「異なる」と

か「違う」になります。

とはいえ、人には「異なる」がとらえられないようです。たぶん、すれ違ってしまうのです。「異なる」は、逸れる、すれる、外れる、誤る、ずれる、すれ違う、たがう。

ひょっとすると怖くてまともに向きあえないのかもしれませんが。見ていない振りをして  
いる線も濃厚です。「似ている」を見ているほうがずっと楽でしょうから。

ただの「似ている」は「何かが」と「何かに」との出会いを待っている状態です。待機  
中。うたた寝。

心ときめかせ夢うつつで待っています。

(拙文「異なる、事なる、言なる」より)

### 異なる世界、言なる世界、事なる世界 \*

何度もなんども「なぞる」を繰り返すとどうなるでしょう。何をなぞっているのかが  
分からなくなりそうです。とにかくなぞっている、なんとなくなぞっている。対象がな  
くなる、起源がなくなる、手本がなくなる。ないない尽くしです。起源のない引用の引  
用、本物や実物のない複製の複製。起源のない反復。手本のない模倣。ないない尽くし。  
学習、知識、情報のことではないでしょうか。何よりも、その根っこにある言葉のこと  
ではないでしょうか。



鏡の向こうに入っていく。笑っていた猫の笑いだけが残っている。不思議な話があり  
ます。話ですから、言葉から成りたっているのですが、それが読む人や聞く人の中にイ  
メージを生みます。現実ではありえない事が、言葉の世界ではありえる言としてあるの  
です。異なる世界、言なる世界、事なる世界。現界、言界、幻界。現実、言葉、イメージ  
と読みかえてもいいでしょう。イメージするしかないようです。イメージをイメージす  
るのです。

○

なにしろ、人は「○△X」という言葉をつくって、その次に「○△Xとは何か？」と問い、思い悩む生物なのです。考えれば考えるほど、自分に当てはまります。いまもやっていますね。

○

オノマトペに限らず、言葉がずっと入ってきたり、ずっと出ていくとき、その言葉は「何かに似ている」というよりも「単に似ている」として入ってくるのではないか。そんな気がしています。

「ずっと入ってくる」「ずっと出ていく」がポイントです。意味を考えたり意識したりはしていない状態です。その時点では意味なんてないのです。「似ている」だけがある感じ。「何が」も「何に」もない、ただ「似ている」です。

くり返しますが、どんな言葉でも、フレーズでも、センテンスでもいいのです。オノマトペとか、感動詞とか、決まり文句とか、流行語に近い感じ。思考停止とか判断停止とまでは言いませんが、無意識のうちにとりか、条件反射的に、または生理現象のように、ずっと入ってきて、ずっと出ていくのです。

あらゆる言葉が決まり文句であり紋切り型ではないか。最近、よくそう思います。さもなければ、あんなにずっと入ったり出たりしないでしょう。

(拙文「起源のない反復、手本のない模倣」より)

### 異なりや事なりや言なり

きらきら、ぱちぱち、ひだひだ、しわしわ——同音を繰り返すことで、オノマトペ感がいや増します。

きらり、ぱちり、ひだ、しわ——これだけでもいいようなものですが、繰り返すことで反復される動きが出るし、オノマトペ感が増すことでしっくりと、頭ではなく体に

入ってくる気がします。

オノマトペはすっと入ってきます。

音や文字が「何かに」「似ている」ではなく、「単に似ている」として入ってくるからではないでしょうか。

「何か」との異なりや事なりや言なりとして無理に押し入ってこないのです。

オノマトペは「すっと入ってくる」がポイントです。意味を考えたり意識したりはしていない状態です。その時点では意味なんてないのです。

でも言葉なのです。辞書にちゃんと載っています。「無意味」と同じく辞書に載っているのです。

私の好きな言い方をすると本物や実物のない複製の複製であり、起源のない引用の引用です。これが「単に似ている」です。

(拙文「連想でつなぐ、たそがれ、twilight」より)

(投稿：2023年5月22日 09:52)

#辞書# 国語辞典 # 言葉 # 言 # 事 # 異なる # 日本語 # 異物 # 漢字 # ひらがな# イメージ # 異和感 # 違和感





言葉ではないものをさぐる



＊

言葉ではないものをさぐる

星野廉

2023年5月21日 07:48

ことや、ものや、ありようは、多面的なものですから、たとえ別の名前で呼ばれているもの同士でも、当ててみると、どこかにつながることがよくあります。

(.....)

固定された「つながり」があって「つながる」だけではなく、ジャンプ（飛躍）して、どこかとどこかや、何かと何か「つながる」というのも、おおいにあるように私は思います。

(拙文「何か」に「何か」を当ててみるより)

たとえば、「形・姿・型・語る・固い・固まる」の「かた」も、「片言・片向く・傾く・片寄る・偏る・片方・夕方」の「かた」も、言葉ではないものとか、言葉にする前のものとか、言葉が消えかけたものと言ったほうがよさそうです。断片的で取り留めも取っ掛かりもないからです。

形が無い、形に成らない、形が欠けている。

かたはし・片端、かけら・欠片、あとかた、後方・跡形。

それでいて、「かた」という二音と二文字に、なにか目や芽のようなものを感じるのは、それが言葉の欠片（かけら）であり、言葉の跡形（あとかた）だからでしょう。半端な形で言葉をひきずっているのです。気配をイメージすると分かりやすいかもしれません。言葉の気配という感じです。

「かた・形」と「かた・方」がそれぞれ、「言葉ではないもの」の気配を漂わせたり、「言葉にする前のもの」を引きずっていたり、「言葉が消えかけたもの」の跡を留めているとするなら、両方の要素や属性を備えているとか、どちらでもない要素や属性を帯びているとか、見方しだいで何にでも見えることがあっても、不思議ではない気がします。

当り前のことを言っていますが、今回はそんな話をします。

目次

言葉ではないもの、言葉にする前のもの

二つの「かた」のあいだでまよう、さまよう

無文字

形であり、同時に方でもある

言葉ではないもの、言葉にする前のもの

かた、形、なり、形・態、形態、なす、成す、形を成す、形成。

和語の「かた」を漢字・漢語の「形」に当てる。「形」を和語の「なり」に当てる。「なり」を漢字・漢語の「形・態」に当てる。「形・態」をくっつけて、漢語の「形態」に当てる。「形態」を「なりをなす」と読む。「なす」に「成す」を当てて、「なりを成す」、さらには「形を成す」とずらす。それを「形成」と読む、ずらす、当てる。

かた、片、片向く、傾く、へん、片、片寄る、偏る、偏向、方向、ほう、方角、方、片、かた。

和語の「かた」を漢字・漢語の「片」に当てる。「片」を「片寄る・偏る」とずらす。「偏る」から「偏向・へんこう」へとうつる。「向」に促されて「方向・ほうこう」があらわれる。「ほうこう」から「ほうがく・方角」へ。方も片も「かた」だと気づく。

\*

上で並べた、二つの「かた」から続く文字列を見くらべているとわくわくします。上と下は、つながるようでつながらない。上を下に、下を上を、当てることはできるものの、当たった感じがするものもあればしないものもある。

「あらわれる」も「つながる」も「当たる」も、個人的な印象だどつくづく感じます。ギャグや駄洒落と同じで、受ける受けないはその時と場合と顔ぶれしだい。比喻や掛け

詞と同じで、決まるか決まらないかは受け手しだい。そもそも本人にも分からない気がします。

＊

二つの列の左端にある「かた」と「かた」ですが、たぶん和語なのでしょう。語と言ったものの、それだけではあまりにもとりとめがない。こんなとりとめのないものを言葉と呼んでいいのでしょうか。

「かた」も「かた」も、言葉ではないものとか、言葉にする前のものと言ったほうがよさそうです。断片的で取っ掛かりがないからです。

それでいて、「かた」という二音（二文字）に、なにか目や芽のようなものを感じるのは、それが言葉の欠片（かけら）だからでしょう。

上で書いた文にある「断片的」と「欠片」に「片」が見えます。かけらであり、きれはしなのですが、そこには何かの兆しを感じられます。ピアノのキーを叩いて出た最初の音みたいな感じだと言えば分かりやすいかもしれません。

この先に何かがある、何かが起こる、何かの流れの一部だ。そう考えると、「片」がある「方向」であり、同時に「形をなす」ものに思えてきます。

「かた・片」と「かた・形」はけっして矛盾するもの同士でも、異なるもの同士でもないようです。そうであるとすれば、それは「言葉ではないもの」や「言葉にする前のもの」を引きずっているとか、「消えかけた言葉」が跡を留めているとも言えるでしょう。とりとめがないという意味です。

「言葉ではないものをさぐる」がこの記事のタイトルですが、言葉ではないものに「とっかかり」と「とりとめ」がないかぎり、言葉を取っ掛かりと取り留めにして手探りをするしかないのです。

＊

ややこしい話になってきたので、文字列を短くして、ここまでを整理してみましょう。

かた・形・型

かた・片・方

どちらも「かた」と読めますが、違った方を向いている気がします。「かた・形・型」はまとまりを目指し、「かた・片・方」は散らばっていく感じがします。

話を広げて、詳しく見ていきましょう。

## 二つの「かた」のあいだでまよう、さまよう

かた、形、なり、形・態、形態、なす、成す、形を成す、形成

「方」向を変えてみます。

かた、形、型、かたる、語る、騙る

「かたる」はある方向にむかって流れる筋です。良い悪いに関係なく流れます。

かた、形、型、かたる、語る、騙る、カタル、カタルシス、あたる、当たる、中る

音だけのつながりでは、思いがけないものも出てきます。言葉であれば、そうした展開もあるでしょう。そうでなければ言葉ではない気がします。ま、程度問題ですけど.....。

かた、形、姿、すがた、容、器、体、態、様、景、かげ、象、像、影、瀉、方、放

気になる文字というものがあります。形にも音にもとらわれずイメージだけで並べるのも楽しいです。

語る、放す、放つ、話す、離す、発する

放出、発射、発散、放送、放言、離散

「はなす・はなつ・はっする」は、「語る」より「形・型・固」がなくて、言い放しの

な感じがします。「片・方」寄り。はなつたものとのあいだに「隔たり」があるのです。散らばるとかばらばら感があります。

＊

かた、片、片向く、傾く、片端、へん、片、片寄る、偏る、偏向、方向、ほう、方角、方、片、かた

語って形をなす方向に流してみましよう。

かた、肩を寄せる、肩に手を掛ける、寄り掛かる、片向く、傾く、かたぶく、かぶく、歌舞伎、型、方、形、女形

ある方向に流れていきながら、形がかたまるよりも、方から方へと散っていく感じもします。まだらでまばら。ばらばら指向なのです。辺、偏、変という、つながりも感じます。

エクセントリック (excentric) なのです。偏心、つまり心 (中心) からはずれているし、ずれているイメージ。ex-です。外へと拡散していく、散っていく。反とも、重なりそう。

片、片端、はしっこ、葉、はっぱ、はし、端、箸、橋

辺境のイメージです。「ふち・縁・ふちっこ」とも重なります。「きわ・際・さかい・境」でもあるので、外部やよそ者や他者との出会いもありそう。

傍ら・かたわら、半端、偏と旁、片割れ、破片、欠片・かけら、一方、片方、かたはし・片端

何か欠けている、二つでひとつ、。ペアのうち的一方。半分。場合によっては差別の対象になりそう。

かたの、片野、交野

地名ですけど、辺や縁や境と重なります。そとやよそと交わる場のようなようです。ノマド的で固まらないし、堅くも硬くもない雰囲気を感じます。形式にこだわらない放埒さが

あります。マルクスのいった「交通」とも通じそうな気配。

さまよってきました。さまよう、さ迷う、彷徨う、「方・片」だから当然ですね。

\*

「かた・形」と「かた・方」がそれぞれ、「言葉ではないもの」の気配を漂わせたり、「言葉にする前のもの」を引きずっていたり、「言葉が消えかけたもの」の跡を留めているとするなら、両方の要素や属性を備えているとか、どちらでもない要素や属性を帯びているとか、見方しだいで何にでも見えることがあっても、不思議ではない気がします。

ふたつの「かた」のあいだでまよい、さまよう。そこで、まよっているつもりが、どうやらそうでもないところで、さまよっている。まかすしかない。ゆだねているだけでいい。

## 無文字

かた、かたまる、固まる、かたい、固い、硬い、堅い、難い、堅苦しい

かた、片、片言・かたこと、片仮名、片隅、片苦し、片身、肩身、形見、破片、半片、片言・へんげん

同じ「かた」という文字列から出発しても、イメージが異なります。似ていると感じる場合もあります。無理にまとめる必要はないと思いながらも、ついある筋書きやかたちに導かれ運ばれていきそうになります。

「かたまる」を主旋律にして流していく。「かたこと」で放っていく。かたまる方向へ、かたことで形づくっていく。

\*

現在はありとあらゆるものが文字にされています。公式な記録は文字であり、音声や映像ではないようですが、文字は手書きから印刷されたものに移り、いまではデジタル



化されたデータとしてインターネット上で飛びかっています。

もっとも、「飛びかっている」というのは比喻であり、誰も観た人はいそうもありません。それにしても、ネット上で、文書の投稿、配信、複製、拡散、保存がほぼ同時に起きているのは、私にとって驚異であり脅威でありつづけています。

私はよく無文字の世界を夢想します。文字のない世界ではどんなふうにいるのだろうと、なんの根拠も裏づけもなく空想するわけです。

発した瞬間に片っ端から消えていく音声や表情や身振りと異なり、文字は消さないかぎり残ります。それが文字の最大の特性であり、人がこれだけ文字を厚遇し礼遇するのは残るし複製しやすいからだと思います。

もし無文字の世界であれば、どんなふうになっているのでしょうか。そこでは「かた・形」と「かた・片」はどんな形で、そしてどんな片で「ある」のでしょうか。

表情と身振りで、「かた・形」と「かた・方」をあれこれイメージしてみるのですが、そこで浮かぶのは、歌であり、旋律であり、踊りであり、スポーツなのです。

そこには、言葉ではない、言葉にする前の「かた・形」と「かた・片」が生き生きと「ある」ような気がします。生き生きとした「ある」とは、たぶん「なる」です。

### 形であり、同時に方でもある

夕方、朝方、明け方

ある方向に向かっているけど、その前後のどちらでもない、同時にどちらでもある。

たそがれ、誰そ彼、薄暗い夕方に「だれだ、あれは」。かわたれ、彼は誰、薄暗い明け方（または夕方）に「あれは、だれだ」。

西の方、東の方

ある方向に向いているけど、こちらでもそちらでもない。こちらにいながら心はあちらに移りつつある。

片、方、偏、辺  
放、端、葉  
肩、扁  
形

形、型、容、瀾、象  
固、堅、硬、難  
成、為、生  
語、騙  
片

上の漢字を見ているさいに、「かた」の形と姿にこだわる時と、「かた」の「kata」という「音」にこだわる時では、違った並び方になるし、浮かんでくる漢字も異なります。

あれこれと分けることに、ある種のあきらめを覚えるようになります。それでいて、ばらばらにしておくのが嫌なのです。そのうち眠くなります。

\*

形であり、同時に片でもある。どちらでもない――。

文字と形にこだわるとそうなります。

かたであり、かたでもある――。

音にまかせるとそうなります。

目をつむり、寝入り際の心境で、浮かんでくるものにまかせてみます。

\*

言葉ではないものは言葉でしか語れない。

言葉ではないもの、それは言葉。

言葉ではないもの、それは夢。

言葉の夢。夢の言葉。

言葉が夢を見る。

夢が言葉話す。

人はそれを見ているだけ、聞いているだけ。

言葉は人に宿る。

人が言葉に宿る。

(投稿：2023年5月21日 07:48)

#言葉# 漢字# ひらがな# 文字# 音声# 表情# 身振り# 日本語# 漢語# 和語# 大和  
言葉# イメージ



人にあらわれて、機械にあらわれないもの



＊

人にあらわれて、機械にあらわれないもの

星野廉

2023年5月20日 08:20

べつに定型詩ではなくても、一文であったり、短い散文であっても、それが言葉で唱えられたり書かれるかぎり、そこには前提としての形が想定されている気がします。たぶん、それが以下の文字列にある和語の「かた」であり「なり」です。

かた、形、なり、形・態、形態、なす、成す、形を成す、形成。  
(拙文「「かた」が「かたち」を「なす」さまが「あらわれる」より)

ことや、ものや、ありようは、多面的なものですから、たとえ別の名前で呼ばれているもの同士でも、当ててみると、どこかではつながることがよくあります。

(.....)

固定された「つながり」があって「つながる」だけではなく、ジャンプ（飛躍）して、どこかとどこかや、何かと何か「つながる」というのも、おおいにあるように私は思います。

(拙文「「何か」に「何か」を当ててみる」より)

目次

形を「なす・為す」、形に「なる・成る」

生成

生成、生成り

形が「出る」、形が「あらわれる」

人にあらわれて、機械にはあらわれない

形を「なす・為す」、形に「なる・成る」

かた、形、なり、形・態、形態、なす、生す、成す、為す、形を成す、形成、なる、生

る、成る、為る

\*

為せば成る。

為せば成る、為さねば成らぬ、何事も。

為せば成る、為さねば成らぬ、何事も、成らぬは人の為さぬなりけり。

江戸時代の米沢藩主であった上杉鷹山の言葉らしいです。

「為す」と「成る」の使い分けに注目しないではられません。

\*

「決める」は人為、「決まる」は人の領域ではない。

(.....)

人が「決める」。「決まる」は「起きる」とか「あらわれる」。そんな気がします。

(拙文「人が「決める」、「決まる」は「あらわれる」より)

決める、決まる。

当てる、当たる。

つなぐ・つなげる、つながる。

あらわす、あらわれる。

起こす、起きる。

かためる、かたまる。

なす、なる。

このところ、上のようなペアが気になります。他動詞と自動詞なのでしょうが、どんなペアでも気になるのではなく、上の場合が気にかかってなりません。

為す、成る。

「為す」は人為、「成る」は人の領域ではないと言いたくなります。

人為と言えば人造という言い方を連想します。人の領域ではない創造を人が為すという意味でしょう。人造も人為に他なりません。

創造、模倣。人造、天然。



＊

「かた」が、「形（かたち）を為す」とすれば、それは人が為している。「形（かたち）が成る」とすれば、人の領域ではないところで、そう成っている。形を為す、形が成る。

そんな気がします。

こうなると、「生す、生る」が気になります。

形を生す、形が生る。

「生成」という漢語を連想しないではいられません。このところ、さかんに見聞きする言葉です。

## 生成

「生成」を愛用の広辞苑で調べてみると、以下のようにまとめられそうです。

生成：せいせい、生成、生じて形を成すこと、(哲) Werden (ドイツ語)、物の発生、変化、転化。

ドイツ哲学の用語のようですが知りません。

現在、さかんに見聞きするのは「生成 AI」です。よく知らない言葉です。この文字列を初めて目にしたときには、「きなり AI」と読んでいましたが、やがてそうではなさそうだと気づきました。

「せいせい AI」ですね。わくわくしないので調べたことはないのですが、文脈から何となくイメージをつかんでいます。

あと、「生成・せいせい」で思いだすのは、「生成文法」です。英語の generative grammar の訳語だということは知っていますが、これもよく知りません。あえて調べようという気持や予定もありません。昔勉強した覚えがありますが、記憶がないのです。

よく知らないことについては記事では触れないほうがよさそうです。

## 生成、生成り

生成：せいせい、生成、生じて形を成すこと、(哲) Werden (ドイツ語)、物の発生、変化、転化。(広辞苑を参照)

自分にとって大切そうなところだけを抜きだしてみます。

生成、生じて形を成す、発生、変化、転化。

わくわくしてきました。おもしろそうです。

\*

生成り・きなり、手を加えてないこと。(広辞苑)

生成り・きなり、生地のまま、飾り気のないこと。(デジタル大辞泉)

生成り・なまなり、「生熟れ・なまなれ」に同じ、十分熟(または熟成)していないもの。未熟であること。十分にできあがっていないこと。(デジタル大辞泉)。

なるほど。言えています。逆に言うと、まだまだ生るし成るといことですね。伸びしろは無限ということでしょうか。

為せば成る、為さねば成らぬ、何事も、成らぬは人の為さぬなりけり。

## 形が「出る」、形が「あらわれる」

何かを何かを当てる。何かを何かを当てることで、何かが形を成す、または何かが形に成る。

声としての言葉をもちいて、話をしたり、会話をしたりする。物語や詩歌をつくったり、物語や詩歌を繰り返して口にししたりする。

文字をもちいて、メモ程度の文を書いたり、手紙を書いたりする。あるいは、物語や詩や散文を書いたりする。

現在であれば、電話やメールやツイートやチャットも話し言葉や書き言葉をもちいた「何かに何かを当てる」行為だと言えます。

たぶん、音楽や映像も「何かに何かを当てる」だという気がします。どうなのでしょう。

＊

「何か」に言葉——声と文字に限定して、表情や身振りやしるしや映像や音楽は除きます——を当てることで、言葉という形での「何か」が「出る」のですが、形があるとは言うものの、これだけ誤解や不通や行き違いが生じるのですから、「出た」言葉は発した本人をふくめて各人にとって異なって「あらわれている」としか考えられません。

形は「出る」けれど、各人にとっては異なって「あらわれる」。そんなふうには言えそうです。

この場合の「形」は、声と文字だけでなく、表情や身振りやしるしや映像や音楽においての「形」ととらえてもいいのではないのでしょうか。そんな気がしてきました。

形が出る、形になる、形をなす、形があらわれる。

「形になる」と「形をなす」の「形」は、たとえ、なったり、なしたとしても、それが人に「あらわれる」時点で、その人において「変わる」し「転じる」と言えそうです。

人は機械ではないからそうなのでしょう。

変形、生成、変形生成、生成変形。

transformational generative.

## 人にあらわれて、機械にはあらわれない

逆に言うと、機械は「形になる」と「形をなす」を文字どおりにとらえるのかもしれませんが。形は機械に対して「あらわれる」なんてことはないという意味です。

まして、「なる」と「なす」とは相性が悪く、「あらわれる」と相性のいい「すがた・姿」は、機械には「あらわれる」ことは断じてないと思います。

生成——。この言葉はいかにも機械にふさわしい気がします。よく知らないのですが。

ちゃんと動いているのか、ある程度動いているのか知りませんが、現に機械が動いているのですから、そうにちがいません。

\*

形になる、形をなす。

形があらわれる。

どうやら、人にあらわれて、機械にあらわれないものがありそうです。

ところで、猫はどうなのでしょう。猫を観察していると、猫にあらわれて、人にはあらわれないものがありそうです。というか、人のギャグは猫に通じないのですが、猫のギャグも人に通じていない気がします。

猫は猫の夢を見るのでしょうか。機械は機械の夢を見るのでしょうか。こんなたわごと（ギャグ）は猫にも機械も通じそうもありません。人にあらわれているだけでしょ。

そう考えると、「あらわれる」は他者（他人や他の生きものや他の生きていないものを含みます）とは共有できないものかもしれませんね。もちろん、人から見ての他者の話です。

いずれにせよ、「あらわれる」は不気味です。なんて不気味がるのは人だけという落ちに落ち着くようです。

(投稿：2023年5月20日 08:20)

#機械 # AI # 生成 # あらわれる # 猫 # 生成り # 夢 # ギャグ # たわごと # 人造 # 創造



「かた」が「かたち」を「なす」さまが「あらわ  
れる」





＊

「かた」が「かたち」を「なす」さまが「あらわれる」

星野廉

2023年5月19日 09:55

当てる、当たる、決める、決まる、あらわす、あらわれる  
つな、つなぐ、つなげる、つながり、きずな、気づく、築く  
つなをつなぐ(つなげる)、つながりに気づく、絆を築く  
(拙文「「何か」に「何か」を当ててみる」より)

「当たった」と感じる時の高揚を求めつづける

言葉ではないものに音を当てる。  
言葉ではないものに文字を当てる。  
言葉ではないものに表情や身振りを当てる。

以上が、言葉をつかういとなみの根っこだと思います。

＊

言葉に言葉を当てる。  
言葉に言葉を重ねる。  
言葉を言葉で置き換える。

音に文字を当てる。文字に音を当てる。  
意味に文字を当てる。文字に意味を当てる。  
イメージに文字を当てる。文字にイメージを当てる。

上の作業では、「何か」に「別の何か」を当てているわけですが、「何か」も「別の何か」も必ずしも明確ではない気がします。そもそも、「何か」も「別の何か」もが「何か」に別の何かを当てた」ものだからでしょう。

たとえば、「言葉ではないもの」に言葉を当てる」です。これが言葉だと私は思います。言葉とは、すでに「何か」に「別の何か」を当てた結果だという意味です。代用物とも言えます。代用物が実物をどれだけ忠実に反映しているかは不明なのです。（ところで、私は言葉を広く取っています。音声と文字だけでなく、視覚言語と呼ばれることもある表情や身振りやしるし、場合によっては映像や音楽も言葉としてとらえることがあります。）

「言葉ではないもの」に言葉を当てるというのは、両者を当てる必然性がないために、きわめて不安定な基盤に立っていると言えます。言葉ではない猫という生きものに、日本語の「ねこ・猫」を当てる必然性はないと言えば分かりやすいかもしれません。もちろん、他の言語や方言でも同じです。

そんなわけで、言葉をつかうさいに、言葉ではないものに言葉を当てたり、ある言葉に別の言葉を当ててみてはいるものの、それが当たったかどうかは不明なのです。こうなると、当たったと感じたときが「当たった」だと言うべきでしょう。「当たる」は人にとって印象とか感想の世界だと言えます。

籤（くじ）や占いや予言・預言に似ています。当たるも八卦当たらぬも八卦。

「当たり」が出たときに、それが当たっているかどうかを知るためには、さらにまた籤を引くか占うしかないのです。当て処（あてど）がない。「当たった」と感じる時の高揚を求めてあてどなく続くのでしょう。

当たったときの高揚感を求めてなんてギャンブルに似ています。これも印象です。

**「かた」が「かたち」を「なす」さまが「あらわれる」**

かた、形、なり、形・態、形態、なす、成す、形を成す、形成。

上の文字列を左から右に、そして右から左に読んでいくと、その展開にはっとします。わくわくするのです。「そうかそうか」、「なるほど、なるほど……」と。

おそらく「言葉ではないもの」に、音、文字、意味、イメージを交互に当てている気がします。それが「かた、かたち、形」になっていくのです。そのさまが上の文字列に「あらわれている」とか「起きている」ように見えるのかもしれませんが。

「当てる」と「ずれる」が起きます。何かに別の何かを当てているのですから、「ずれる」のは当然です。

和語の「かた」を漢字・漢語の「形」に当てる。「形」を和語の「なり」に当てる。「なり」を漢字・漢語の「形・態」に当てる。「形・態」をくっつけて、漢語の「形態」に当てる。「形態」を「なりをなす」と読む。「なす」に「成す」を当てて、「なりを成す」、さらには「形を成す」とずらす。それを「形成」と読む、ずらす、当てる。

\*

かた、形、なり、形・態、形態、なす、成す、形を成す、形成。

おそらく言葉ではなく、とりあえず「かた」という音と文字にしたものが、「かたち」を「なす」さまが具体的な文字として、そこにあらわれます。

わずか十七文字ですが長く多く厚く重く深く感じられます。私の場合には、ずっと眺めていられるし、暗唱して寝入り際に呼びもどして味わうことができそうです。

かた、形、なり、形・態、形態、なす、成す、形を成す、形成。

詩のようだ、物語みたい、おまじないっぽい。そんなイメージが浮かびますが、一方で安易な譬えはこの十七文字からなる文字列の具体性を失わせる気もします。

### 「何か」をある定型に当てる・収める

十七文字で十七音からなる俳句を思いました。「何かに何かを当てる」を短い定型詩で考えてみます。

「言葉ではないものに言葉を当てる」と単純に考えましょう。

定型のある、ごく短い詩で何かを歌ったり詠んだりする場合には、その「言葉ではないもの」は必ずしも明確ではない気がしますが——それを明確にしたいからわざわざ言葉にするのでしょう——、とりあえず「何か」として話を進めます。

「何か」を写生するとか描写するという立場もあるでしょう。「何か」を「写す」というよりも「映す」、または「移す」という考えもありそうです。「何か」を「語る」のだという意見もあるでしょうね。

一センテンスや短い散文にするのではなく、あえて定型、つまり音数（文字数）や韻や季語・季題のような決まったテーマ、あるいは流派の決まりのようなもののある詩にするからには、そこには先行する作品が前提としてあります。これを忘れてはなりません。

たとえば、俳句は一句で完結もしていなければ、一句で成立もしていないのです。

＊

「何か」を短い定型に収める。「何か」を言葉に当てる。この場合の「何か」は言葉ではないものだと考えられます。

当てる、当てはめる、収める、入れる、容れる、型に入れる。

こうした作業においては、「何か」を当てるさなかに、試行錯誤があるにちがいはありません。なかにはぱっと一瞬で作品ができる人もいるでしょうが、それは例外中の例外だという気がします。

ああでもないこうでもない、ああだこうだ。そのさいには、先行する他人の作品や自分の過去の作品もちらつくのではないのでしょうか。型があるのですから当然です。

定型詩では、音数（文字数）、韻、決まりといった枠があるために、言葉が具体的な物として扱われる点がとても大切です。言葉を型にはめたり型に流し込む必要があります。

この場合の言葉は抽象や観念ではなく物——目に見えるし聞こえるし数えられます——なので。

「何か」を定型に収める」や「何か」を言葉に当てる」さいの「何か」は、「言葉ではないもの」ではなく言葉かもしれません。正確に言うと、「言葉ではないもの」と言葉の両方なのかもしれません。

この場合の言葉とは、先行する他人の作品や自分の過去の作品のことです。読まない  
と詠めないのです。

先行する作品を手本にして詠んだり歌ったり詩（うた）うのが、定型詩でしょう。さもなければ、定型を踏まえることになりません。

写生という意味での絵を描くときに、目の前の風景や物を見て描くだけでなく、これまで見てきた絵や自分の書いた絵を踏まえて描くことがあります。その体験を思いうかべると分かりやすいかもしれません。

以下の文字列では、まさにそうしたことが起きているのではないか、あらわれているのではないか、と思います。

かた、形、なり、形・態、形態、なす、成す、形を成す、形成。

形を成すというのは、その前提として形（かた・かたち）が想定されていなければならないという意味です。

「想定」ですから、頭の中に「ある」という点が大切です。それを具体的な形にしていくのが創作でしょう。形を成すのです。

＊

べつに定型詩ではなくても、一文であったり、短い散文であっても、それが言葉で唱えられたり書かれるかぎり、そこには前提としての形が想定されている気がします。た

ぶん、それが以下の文字列にある和語の「かた」であり「なり」です。

かた、形、なり、形・態、形態、なす、成す、形を成す、形成。

なお、短い文に話を限っているのは、短いほうが体感しやすいからです。話は大きくなると抽象的でつかみどころのないものになりますので。長い文章については、短い文の積み重ねだと考えればいいかもしれませんね。

(投稿：2023年5月19日 09:55)

#言葉 # 比喩 # 定型詩 # 置き換え # 当てる # 当たる # 形 # 定型 # 型 # 漢字 # ひらがな # 和語 # 大和言葉 # 漢語 # 日本語 # 散文

「何か」に「何か」を当ててみる





＊

「何か」に「何か」を当ててみる

星野廉

2023年5月18日 09:37

人が「決める」。「決まる」は「起きる」とか「あらわれる」。そんな気がします。  
(拙文「人が「決める」、「決まる」は「あらわれる」より)

かた、形、型——。たとえば、「かた」という音に、「形」や「型」という文字を当てる。

なるほど……。一瞬「当たった」つまり「つながった」という感じがします。しっくりするし、「その通りだ」と得心してしまうのです。でも、「当たった (つながった)」のでしょうか。「当たり (つながり)」なのでしょうか。

「何か」に「何か」を当てる——。この場合の前者と後者の「何か」は、そもそもそれぞれが「何か」に「何か」を当てた結果としての「何か」であることに気づきます。「かた」(和語・ひらがな)と「形・型」(漢字・漢語)のことです。

言葉ではないものに「かた」と「形・型」というもの、つまり言葉が当てられたという意味です。

そうであれば本当に「当たった (つながった)」のか、単に「当てた (つなげた)」結果としてそうなっているのか、その「当たり (つながり)」加減が不明に思えます。本当なのか適当なのかテキトーなのか妥当なのか穏当なのか。どの「当」なのか分からないのです。

言葉ではないものに当てた「かた」も、おなじく言葉ではないものに当てた「形・型」も自明なものではな。不明に不明を当てている。何に何を当てたのかが不明。

＊

言葉の中に言葉があり、言語の中に言語があるために、言葉に言葉を「当てる」ことができるのですが、不明なものに不明なものを当てていると言えます。（\*註）

「かた」に「形」や「型」を当てて、「なるほど」と分かった気分になる。じっくりするのは「当たり」ではなく、むしろ「当たり前」なのです。和語と漢語からなる（言葉の中に言葉がある）日本語では、そういうふうに住組まれているのです。ある意味やらせなのです。

お察しのとおり、日本語における翻訳や言葉の成り立ちだけでなく、言語活動にかかわる話をしています。今回からしばらく、こうした話を記事にしていく予定です。

（\* 註）：「言葉の中にある言葉」

目次

かた、かたる

あてる、あたる、ぼうーっとする

つなぐ、つなげる、つながる

多面的なもの同士はどこかでつながる

血縁、ツリー構造

かた、かたる

かた、形、型、かたる、語る、騙る、カタル、カタルシス

＊

当てる、当ててみる、そのうちに当たるかもしれない。当てるも当たるもころあい。正しい正しくないとは話が違ふ。当たりなどないのではないか。辺りを探るくらいが当てるであり当たるだろう。

＊

「かた」に「形」と「型」という漢字を当ててみます。音に文字を当てるとも言えるでしょう。ひらがなに漢字を当てるとも言えるでしょう。大和言葉つまり和語に漢字とか漢語を当てているとも言えそうです。

「形」と「型」を「かた」ではなく「けい」と読めば、もともとこの島々にあったと言われる音（発音）の訛りで、大陸から渡ってきたと言われる文字と音を読んでいると言えるかもしれません。

とはいうものの、いま上で挙げた文字（形・型・かた・けい）も読み方つまり音（発音）も、いまのものです。大陸から文字が伝わってきたころとはかなり変わっていると考えるのが自然でしょう。

＊

「カタル」と「カタルシス」は上の文字列の中では、音以外のつながりはないように見えます。いわゆる駄洒落ではないかと思う人がいても不思議ではありません。とはいえ、ここでは語源の面子を保ったり、語源の辻褃合わせをしているわけではありません。

さらに言うなら、いわゆる論理の顔を立てたり、論理の辻褃を合わせている場でもありません。深くも広くも知ろうとしない素人が、わくわくするために語っているだけです。

語ることで、しゃあしゃあと何かが外へと出ていき、いわゆるカタルシスが起る。こう考えるとつながります。私も心当たりがありますが、悩みや苦しみを人に語るとすっきりします。問題が解決しなくても、何かが出た気がします。

語るはカタル。語るはカタルシス。

ここではさかんに掛け詞をします。駄洒落は掛け詞の別称であり蔑称でもあります。わくわくするためには、どちらで呼ばれてもかまいません。どちらも、別に蔑ろにするつもりはありません。

## あてる、あたる、ぼうーっとする

当てる、当たる、決める、決まる、あらかず、あられる

\*

「決める」は人のすることであり、「決まり」は人を越えたところで起きるもの。「当てる」は人のすることであり、「当たる」は起きるもの。「あらかず」は人のすることであり、「あられる」は「あられる」もの。(註\*)

いや、それどころか、おそらく「当てる・当たる」や「つなげる・つながる」も「決める・決まる」も「あらかず・あられる」も、人を越えたところで起きるものであり、あられるもの。

他動詞とか自動詞という文法用語をつかって横断し、理屈をつけて説明することもできそうですが、横歩きするよりも真っ直ぐに歩いて迷う、つまり個別の細部にこだわるほうが性に合っています。直線上を歩いていて迷うことが私にはあります。(註\* \*)

(註\*) : 「人が「決める」、「決まる」は「あられる」

(註\*\*) : 「【小説】直線上で迷う」

\*

「かた」に「形」や「型」を当てると、一瞬決まった(つながった)ように感じます。「なるほど」、「そうだ」、「これこれ」——当たったという気がするのです。語るからでしょう。要するに騙りです。錯覚とも言えそうです。

なじんだ言葉に置き換えただけなのですが、それが「分かった」「大当たり」「どんびしゃり」「的を射ている」と感じられるのです。言葉に言葉を当てる、言葉に言葉を重ねるといふ、置き換えと言ひ換えが基本である辞書はそういう仕組みで成り立っているのかもしれない。

当ててみて当たったと感じる。

これは、籤（くじ）や標的に当たったときと同じ感じですから、自分が当てたとか自分がやったというよりも、人を超えたものが働いているところで、起きたとか起ったような思いを私はいだきます。人それぞれですが。

＊

「かた」に当てた「形」や「型」という文字を見ていると、「あらわれた」のではないかとすら私には思えます。

「かた」を音や声として聞いたり、あるいは唱えたさいに、頭か心か知りませんが、浮かんでいるイメージと、「形」や「型」という文字を見ているときに浮かぶイメージは違います。

それでいて、音に文字を当ててみて、「当たった、決まった、つながった、起った、あらわれた」とあつけにとられます。「あつけ・呆気・あきれる・呆れる・呆然となる」のです。

ほうける、呆ける、耄ける、惚ける、ほおける、蓬ける。

ぜんぶ頭と関係ありそうですね。「当たった・つながった」と感じるときには、頭がどうかしているにちがいありません。そういうときには、いわゆる判断停止とか思考停止が起きているはずです。

要するに、ぼうーっとしているのではないのでしょうか。わくわくするのもそうでしょう。

＊

「かたる」に、「語る、騙る、カタル」を当てたときも、一瞬ぼうーっとします。「そうそうこれなのよ、まさにそういうこと」。しゃあしゃあと何かが流れ出ていくカタルシスに似ている気がします。

当ててみる時にはそれなりにぼうーっとしますが、当たったと感じたときには、もっとぼうーっとするというか、ぼうーっとしているあいだが少しだけ長い気がします。

「呆ける」の度合いが高まっているのです。

\*\* つなぐ、つなげる、つながる \*\*

つな、つなぐ、つなげる、つながり、きずな、気づく、築く  
つなをつなぐ (つなげる)、つながりに気づく、絆を築く

かたる、語る、騙る、カタル、カタルシス  
あたる、当たる、中る、カタル、カタルシス

\*

「何か」と別の「何か」を当ててみて、つながるかどうかを考えてみましょう。

- ・「語る」と「カタル (カタルシス)」は似ている。(印象・類推・感想)
- ・「語る」と「カタルシス」が起きる。(假定・類推・相関関係・因果関係)

たしかに、語る、つまり物語る行為は、カタルシスを起こしそうだし、これまでにそんなことが語られてきたようです。

- ・「語る」は「カタル (カタルシス)」のようだ。(直喩・明喩)
- ・「語る」は「カタル (カタルシス)」である。(隠喩・暗喩)
- ・「語る」は「カタル (カタルシス)」。(掛け詞)

比喩も言葉の音や意味やイメージや形 (文字) を掛けているわけですから、掛け詞の一種です。駄洒落は、掛け詞や比喩の別称であり蔑称でもあると言えそうです。(註\*)

(註\*) : 「読みやすい文章、読みにくい文章」

\*

- ・「あたる (中る)」は「カタル (カタルシス)」である。

「あたる」には「飲食物や暑気・寒気がからだにさわる。毒気・悪気の害を身に受ける」(広辞苑)という語義があります。この意味のときには「中る」とも書くそうです。中毒や「どくあたり」を連想します。

素人っぽい言い方になって恐縮ですが、毒にやられた体液が体外にしゃあしゃあ、またはどくどくと流れ出るのが、カタルやカタルシスの本来の意味だろうととらえています。

精神的とか心理的な意味あいを含めて、広義の浄化ということでしょうか。体や心に悪いものや毒を外に出す感じ。

「あたる(中る)」は「カタル(カタルシス)」である。」というフレーズは、語源的なつながりのない言葉同士が奇しくもつながっている例だと言えます。このフレーズを至言だと感じる人もいるでしょうし、駄洒落だと言う人がいても不思議ではありません。

\*\* 多面的なもの同士はどこかでつながる \*\*

ことや、ものや、ありようは、多面的なものですから、たとえ別の名前で呼ばれているもの同士でも、当ててみると、どこかではつながることがよくあります。

(仮に百の要素や属性のあるもの同士をくらべれば、どこかに共通点や類似点が見られると言えば分かりやすいかもしれません。)

猫は犬に似ている——。そう言われると、たしかに手足の数は同じですし、両方とも毛が生えています。

猫は人間に似ている——。似ている気もするし.....。

ほんとうに「つながった」のか、「当てた」結果としてから「つながった」ように見えるだけなのか、その「つながり」が不明なのです。

「つながった」として、それは偶然とも言えますが、言葉と事物の関係はそもそもが偶然っぽいとつねづね感じています。たとえば、生きものの猫が日本語の猫という言葉と「つながる」必然は全然ないわけですから。当然です。他の言語や方言でも同じです。

ただし、別個の名称で名指されているもの同士を当ててみることで立ちあられるつながり、つまり偶然の産物であるつながりを見ることで、名指されていないつながりを感じ分けられるかもしれません。

猫はペンギンに似ている——。うーむ。

猫は星に似ている——。うーむ。

「つながった」つまり「つながりがある」のか、「当ててみた」結果として「つながりがある」ように見えるだけなのか、やっぱりその「つながり」加減が不明なのです。

猫は星だ——。

詩に似ていますね。つながりとは詩のようなものかもしれません。

#### \*\* 血縁、ツリー構造 \*\*

「語る」と「騙る」は語源的なつながりがあるようですが、つながりをさがすさいには、語源が役立つこともあれば邪魔になることもある気がします。

群れる生きものであるヒトは血縁関係を重んじますが、事物についても血縁や枝分かれする木のイメージ（ツリー構造）にとらわれています。人情なのです。これを重んじない人は人でなしかもしれません。

一方で、固定された「つながり」があって「つながる」だけではなく、ジャンプ（飛躍）して、どこかとどこかや、何かと何か「つながる」というのも、おおいにあるように私は思います。

\*



血縁や木のイメージは、機械や AI に教える、つまりプログラミングするのに適しているから余計に厚遇されているのでしょうか、血縁やツリーという比喻（何かに別の何かを当てること）がつねに有効である保証はありません。

「固定された「つながり」があって「つながる」だけではなく、」と上で述べましたが、「固定された「つながり」」が疑わしく思えてきました。

「何か」に別の「何か」を当てること」の「何か」と別の「何か」がすでに比喻（置き換え）であるからです。

言葉ではないものに言葉を当てる（要するに置き換えであり比喻です）という言語活動そのものが「当てる」を基本にしているという意味です。

そうであれば、あてど（当て所・宛て所）もなく当てるを繰り返すしかなさそうです。これが人にとっての自然であるにちがいありません。

要するに、人にとって「当たる」なんてないのです。「当たる」という言葉があり、それを人がつかっているのは人の腹いせにちがいありません。

冗談はさておき、「当たって砕けろ」、「下手な鉄砲も数打ちゃ当たる」です。ともに至言だと思います。ここでも、その精神で行くつもりです。

（投稿：2023年5月18日 09:37）

#当てる # 当たる# 他動詞 # 自動詞 # つなぐ # つなげる # つながる # 言葉 # 日本語  
# 大和言葉 # 和語 # 漢語 # ひらがな # 漢字 # 語源 # 比喻



人が「決める」、「決まる」は「あらわれる」



＊

\*\* 人が「決める」、「決まる」は「あらわれる」

星野廉

2023年5月17日 09:18 \*\*

目次

\*\* 決める、決まる

決め手

レトリック

人の領域

決める、決まり、決まり文句

決まる、起きる、あらわれる

決め手を欠く「決まる」

\*\*

\*\* 決める、決まる \*\*

「AはBである」とか「AだからBである」は決めています。「〇〇である」は「〇〇と決めた」なのです。

いま上で書いた文も決めたものです。誰が決めたのでしょうか。この文を書いた人でしょう。つまり、私です。

一方で「決まる」場合もある気がします。

「AはBである」とか「AだからBである」と決まったという場合です。誰が決めたかというより、決まったという感じがするのです。感じがするのですから印象であり、印象であるからには検証ができません。

雲をつかむような話で申し訳ありません。

\*\* 決め手 \*\*

「AはBである」とか「AだからBである」が決まったと私が感じる時、その決め手は何なのかと私は考えます。根拠というより決め手です。根拠は建前っぽいのです。そもそも漢語には建前っぽさがあります。

嘘っぽいという意味です。何かを隠している気がします。都合の悪いこと、言えば体裁が悪いことを、隠しているのでしょう。

人には恥という感情があります。プライドと近い感情です。

\*

以下に、何かが決まるときの決め手と思われるものを、思いつくままに列挙します。

気分、機嫌、気持ち、天気、陽気、気候、雰囲気、空気、気力、気質、気性、病気。力関係、権力、権威、武力、腕力、兵力。体、体力、体調、体感。人間関係、血縁、上下、階級、カースト、序列。声の大きさ、声の質、声の肌理・肌触り。流れ、雰囲気、「みんながやっているから」、「みんなが言っているから」、「何となく」、「え？ 分かんない」。

約束、決まり、ルール、しきたり、掟、法、法則、法律。癖、口癖、筋、筋書き、ストーリー、物語、型、流儀、パターン、定型、紋切り型、決まり文句。説、伝説、神話、言い伝え。新旧、古い・新しい、伝統・改革、保守・革新、古典・新種。命令、指示、教え。付度、迎合。衝動。

因縁、運命、宿命。論理。

句読点で区別はしていますが、便宜的なものです。重複する部分もある気がします。

なお、ここでは研究をしているわけではありません。できるわけがありません。お遊びですので無いものねだりはお勘弁願います。

\*\* レトリック \*\*

「決める」は格好悪いのです。体裁が悪いので、体裁をつくろう必要があります。

それが「〇〇である」「〇〇だ」「〇〇ということになりました」です。つまり言葉の綾、レトリックの問題なのです。レトリックは保身のために使われることが多いのです。

「〇〇である」「〇〇だ」と言うと、どうしてそうなったのか、どうしてそうなのか、言い換えると誰がどういう経緯で決めたのかが不明になり不問に付されます。これは隠蔽であり保身でしょう。

決めたことで状況がとんでもない方向に行ったときに責任を回避するための方便とも言えそうです。へたに「決めた」なんて言えないのです。

逆に言うと、「〇〇だ」と私が決めたのだ」なんていけしゃあしゃあと口にできる人は、失うものが何もない人か、あるいは最高権力者（きどりやもどきでもかまいません）のどちらかでしょう。

\*

こうした事態が露呈するのは、世界が危機的な状況に陥ったときです。こうした事態は大昔から続いているのですが、平時にはなかなか感知できないのです。

危機的な状況を見聞きしながら、自分のまわりにも、似たようなことが、ささやかな形であったなあ、昔からずっと続いているなあと感じるのです。

\*\* 人の領域 \*\*

「決める」は人為、「決まる」は人の領域ではない。

そんな気がします。

「決める」は人為とは、人が決めるという意味です。

「決まる」が人の領域ではないとは、ややこしいですね。言い換えてみましょう。非人称的とか、ニュートラルに近い気がします。

これを神とか超越者と言い換えても大差はないと思われます。

その意味でも、「「〇〇だ」と私が決めたのだ」なんていけしゃあしゃあと口にできる人は、失うものが何もない人か、あるいは最高権力者（きどりやもどきでもいいです）のどちらかでしょう。人を超えたものに対する気兼ねも畏敬の念もないわけですから。

\*\* 決める、決まり、決まり文句 \*\*

「黒いカラスは白いサギだ」

私は（が）「黒いカラスは白いサギだ」と決めた。

黒いカラスは白いサギだと決まった。

トップが決めたことで「黒いカラスは白いサギだ」と決まったことが、決まり（ルールや法律）になるわけですが、上から下までみんなが思考停止して、この文句を進んで（付度し率先して）口にしたり書いたりするようになる——独裁の自動化と完成形のことです——、つまり決まり文句になるのがいちばん恐ろしいと言えそうです。

決まり文句とは、ある言語や方言における慣用的な言い回しという意味ですから、もはや強制されて口にしていくという感覚はなくなります。

話を戻します。

\*\* 決まる、起きる、あらわれる \*\*

人が「決める」。「決まる」は「起きる」とか「あらわれる」。そんな気がします。



「決まる」の起る領域とは、広い意味での「気・氣・き・け」だという気もします。人に深くかかわりながら、人が直接的にかかわっていないというイメージです。

「決まる」とは、たぶん抽象と具象を兼ねそなえていて、人の外にあり、人の中に入ったり出たりして、その人の思いどおりにならない性質が、言葉、とりわけ文字に近い気もします。

とはいえ、まだ決めかねています。決め手を欠くということです。決められない気もします。決まる気配も感じられません。

でも、わくわくするので考えてみたいです。

\*\* 決め手を欠く「決まる」\*\*

決め手を欠くことが「決まる」のもっとも注目すべき特徴だという気がします。

何かが起きたり、人が何かをしたとき、人は自分がそう決めたからそうなったと口にできます。言うことならいくらでも言えるのです。

でも、それはあくまでも人が決めた（つまり言った）ことであって、それ以上でもそれ以下でもない。「決まる」は、おそらくそれとは関係なく起きるのでしょうね。決め手を欠くとは、そういうことです。

人にとって、「決める」は「言う」（「言葉」）なのです。一方、「決まる」は人の「言う」（「言葉」）とは関係がない。人は「決める」という言葉を作った（つまり決めた）から、そう口に出しているだけという意味です。

こうも言えるでしょう。「決める」とか「決めた」は人の口癖であり、「決まる」はきっと言葉ではないのだろう、と。

雲をつかむような話で申し訳ありません。じつのところ、雲をつかもうとしているのです。

※この記事は、以下の「「決める・決まる」の決め手」に加筆したものです。

「決める・決まる」の決め手 - 星野廉の日記

「AはBである」とか「AだからBである」は決めています。「〇〇である」は「〇〇と決めた」なのです。いま上で書いた文も決め

[horensou.hatenablog.com](https://horensou.hatenablog.com)

なすがまま、されるがまま - 星野廉の日記

決めるではなく、決まる読めてないんです。なすがまま、されるがまま 決めるではなく、決まるかける。かかる。橋を架ける

[horensou.hatenablog.com](https://horensou.hatenablog.com)

「たったひとつ」感、「たったひとり」感 - 星野廉の日記

無文字という選択 決まり「それだけ」感 多なのに一決まりに逆らう、一に抗う 抽象と具象を兼ねそなえた言葉 錯覚は最大の

[horensou.hatenablog.com](https://horensou.hatenablog.com)

(投稿：2023年5月17日 09:18)

#言葉 # 決める # 決まる # 決まり # 決め手 # 決定 # 決断 # 独裁 # 体裁 # 辻褄 # 日本語 # レトリック

意味に意味を重ねる



＊

\*\* 意味に意味を重ねる

星野廉

2023年5月13日 10:29 \*\*

目次

\*\*「意味」という言葉は偉そうに見えるし聞こえる

「意味」を使ったフレーズ集

「意味・いみ」、「言いたいこと」

意味はローカルでプライベートなものとして人に立ちあらわれる

辞書の語義以外の意味にまみれて生きる

意味、異味、忌み

あらわれた言葉に、人は忌みを重ねる

不気味な「あらわれる」

あらわれるのは仮の姿や様子 \*\*

\*\*「意味」という言葉は偉そうに見えるし聞こえる \*\*

私の語感では、意味という言葉は偉そうに見えます。ときには聞いて偉そうに響く場合もありますが、見た目のほうがずっと偉そうなのです。

文字は消さないかぎりずっとそこにあるからでしょうか。一方、声として聞いた言葉が自分の中に入りこんでなかなか去らないこともあります。その意味では音声はしつこいです。

文字は外で残り、音声は中で残るようです。何のって、人の外と人の中です。言葉に寄生しているらしい意味は、外にも中にも残る気がします。人にとっての話です。わんちゃんやねこちゃんには関係がありません。

＊

人生の意味、生きることの意味、世界の意味、宇宙の意味、ゴキブリとして生きることの意味、ミジンコが泳ぐことの意味。

上の文字列を眺めていると、どんな意味でも、もっともらしく見えます。意味ありげなのです。私にはそうです。

「意味」という言葉は意味ありげだから、気をつけて使わないと角が立ちます。「意味ありげ」で意味があるのは、「意味」ではなく「ありげ」だからです。「意味」には「意味」がありません。敵は「ありげ」なのです。

例を挙げます。

\*\*「意味」を使ったフレーズ集\*\*

「意味がないよ」、「意味ねー」、「無意味です」、「ナンセンス」、「それってどんな意味?」、「意味はないらしい」、「その意味を説明してください」、「意味不明」、「イミフ」

「意味深だね」、「意味が深いわ」、「深いわ」、「意味深長な発言だった」

「意味が分かる?」、「意味が分かると怖い話」、「意味が分からない」

「意味ありげ」、「何か意味がある」、「意味がありそう」、「意味があるらしい」、「意味ある事業」、「なかなか意味のある会議でした」、「やった意味がある」、「やっただけの意味がある」、「意味があるようでない」、「人生には意味がある」、「「起こる」ことには意味がある」、「あらゆることには意味がある」

「意味を取る」、「正確な意味を取る」

「意味を匂わす」

「その意味では……」、「ある意味では……」、「なんだあ、その意味か」

「変わらない愛を意味する花」、「意味するもの、意味されるもの」、「意味するところが分からない」

「その意味は知っている」、「その意味なら知っているよ」、「その意味は知らないけど」、「両方の意味がある」、「両義的な使われ方をしている」、「多義的な言葉だね」、「どっちの意味だろう」、「いろいろな意味に取れる」、「違った（異なった）意味に取ったらしい」、「違う意味にも取れるんじゃない?」、「そういうのをダブルミーニングっていうんだ」

「何を言いたいわけ?」、「What do you mean?」、「What do you mean by ‘What do you mean?’?」、「何を言いたいのか」って言うけどさ、何を言いたいわけ?、「言わんとするところが分からない」、「言いたいことをはっきりと言いなさい」、「言いたいことがぜんぜん分からないよ」、「言いたいことはよく分かったよ、でも難しいね（駄目なんだ）」

\*

どれもが「意味ありげ」でしたね。

大切なのでくり返します。「意味ありげ」では、「意味」ではなく「ありげ」に意味があるのです。「ありげ」が命であり、「意味」は刺身のつまという意味です。

意味とは「ありげ」——「有りげ」の語義は「ありそうさま」だそうです（広辞苑）——だと言えば分かりやすいかもしれません。

大切なのでくり返します。「意味ありげ」の「意味」は刺身のつまです。「意味」はころ変わりますが、「ありげ」はしつこく居続けます。人のいるかぎり居続けます。

たぶん、「ありげ」は仕組みなのです。どうにもならない仕組みです。

ただし、もしも意味が言葉（とくに文字）に寄生し、言葉（とくに文字）が人に寄生しているとすれば、ヤドカリみたいなものですから、人がいなくなれば他のものに憑くかもしれません。

いずれにせよ、「ありげ」問題は憑きまとう気がします。

\*\*「意味・いみ」、「言いたいこと」\*\*

「人生の意味」という場合の意味と「人生という言葉の意味」というときの意味は違います。前者の意味の意味は、大切さとか価値に近い気がします。たしか辞書にもそんな意味の意味が書いてあった記憶があります。意義という感じ。

いま挙げた日本語の意味の二つの意味は、英語の meaning (ゲルマン系) にもあったと記憶しています。もう一つ、英語には意味に相当する sense (ラテン系) がありますが、そっちはどうだったか、忘れました。

「意味・いみ」は音読みしているみたいなので、漢語系でしょう。英語のラテン系(大陸系)に当たります。「言いたいこと」は大和言葉系だと思います。英語のゲルマン系みたいに、島々に土着の言葉です。

だいたいにおいて、漢語系の言葉は偉そうに見えるし響きます。「意味・いみ」なんてまだかわいいものです。「意義・いぎ」なんかはかなり偉そうでもったいぶって私には感じられます。ひとさまのことは知りません。こういう印象やイメージは個人的なものです。人それぞれ。

\*\* 意味はローカルでプライベートなものとして人に立ちあらわれる \*\*

意味について語るさいには、個人的なイメージから出発しないと、悪しき抽象におちいります。話が実体や実態から離れていくのです。ここで書いていることが好例です。

意味を扱おうとするのなら、曖昧さは避けられません。逆に言うと、曖昧さを回避するかぎり、意味は扱えません。

意味を扱うためには、ぶれることがなく誤っても謝らない杓子定規な機械に意味を教える(プログラミングのことです)のとは別の手続きが要ります。



人における意味と普遍性は相いれないという意味です。意味はローカルでプライベートなものとして人に立ちあらわれます。ローカルというのは、言語や方言や地域や集団によって異なり、プライベートというのは人それぞれという意味です。

\*\* 辞書の語義以外の意味にまみれて生きる \*\*

英語の meaning はさておき、「意味という日本語の言葉」が意味ありげで偉そうなのは、大切さや価値や重要性といった重い意味（重そうな意味）もあるからだという気が私にはします（だから意味という言葉を使う人は偉そうに見えるのでしょうか、意味とは「虎の威」なのです、意味には「言いたいこと」のほかに「大切なこと」という意味があるからにちがいません）。

言葉は、辞書に載っている「語義」だけでなく、人が個人レベルでいっているイメージや印象も担（にな）っています。さらに意味は、その時々文脈や状況によっても左右されます。

簡単に言うと、人は辞書に書いてある語義以外の意味にまみれて生きているのです。

人は生きものであり機械ではありません。その意味で、言葉も生きているのです。人は生きていれば垢もつくし、生理現象はおこるし、病気にもなります。気分もころころ変わります。

人はつねに揺らぎと移り変わりのなかにいるのです。そんな人がもちいている言葉もそうであるはずです。

じっさいそうであるから、言葉はこれまで変わってきたのであり、いまも変わりつつあり、これからも変わるでしょう。いつの時代にも抵抗勢力はいますが、つねに劣勢に立たされています。平安時代や江戸時代の言葉が、いまそのまま使われていないのが証左です。

\*\* 意味、異味、忌み \*\*

言葉は「出る」のに対し、意味は「あらわれる」ように私には思えます。

言葉が出る。ようやく言葉が出た。なかなか言葉が出ない——。このような言い方はよく見聞きします。

言葉があらわれる。ようやく言葉があらわれた。なかなか言葉があらわれない——。

いま挙げたフレーズは、詩とか小説ならありそうですが、日常生活で見聞きした覚えはありません。いま詩とか小説ならと言いましたが、比喩とかレトリックならありうるという意味です。

\*

「あらわれる」といっしょに使うと、「言葉」という言葉が特別な意味を帯びるのです。

「あらわれる言葉」には、言いたいことに異なる味つけをしたという意味での「異味」を感じます。具体的に言うと、宗教的な意味あいを感じるのです。

「何か得体の知れないものの力や特殊な事情によって出る言葉」が「あらわれる言葉」なのかもしれません。「出る」という言葉と組み合わせるのがデフォルトの「言葉」という言葉は、ただでは「あらわれない」のです。

「あらわれる言葉」は、死や出産や血やけがれ、あるいは神や神々や精霊や霊や魂といったものとかかわっている気がします。こうしたものに対し、人は「畏れる」（敬う）と同時に「うとむ」（忌み嫌う）という相反する感情をいだくと言われますが、その複雑な感情を「忌み・いみ・齋み」と呼んでもかまわないのではないのでしょうか。

\*

人は見えないものや聞こえないものや手で触れられないものを冷遇します。苦手だからです。知覚できないもの、知覚しにくいものに対して「んもー、知らない！」と業を

煮やしているのです。

冷遇する一方で礼遇もします。見えないし聞こえないけど、言葉は意味なしで成立しないし、だいいちつかえないからに他なりません。

しぶしぶ「お意味さま」を礼遇し、「お意味さま」の確認をするわけですが、その作業の結果であり集大成が、たとえば法典、つまり六法全書や判例集のたぐいであり、契約書や念書や条約なのでしょう。辞書や経典や聖典や法則や公式もそうです。

(拙文「言葉は声と顔が命、意味は二の次」より)

上の引用文で挙げたさまざまな文書はどうしてあるのでしょうか？ どうして複製され保存されているのでしょうか。

守ることができないからです。まさか記念に存在しているわけでもないでしょう。守らないのですから、礼遇する振りをして冷遇しているのです。

ないがしろにしながらか同時に崇めたてまつる、畏れ敬いながらも忌み嫌う、迎える振りをしながら退け遠ざける、身をかかわして相手を制しようとする、生餌（なまえ）——名前とも書きます——を与えて手なづけようとする——。

いま述べたのが、おそろしいものや得体の知れないものに出会ったときの、人の常套手段です。

\*\* あらわれた言葉に、人は忌みを重ねる \*\*

意味、異味、忌み——。言葉が「出る」のではなく「あらわれる」とき、その言葉には異味や忌みという意味が重ねられている。

そんなふうに私は考えています。いま「重ねられている」と言いましたが、正確には、意味も異味も忌みも、人が言葉に勝手に重ねているだけです。

意味も異味も忌みも見えないし聞こえないし、手で触ることができません。一方、言葉は見えるし聞こえます。点字や指字だと言葉は手で触れる対象になります。

言葉は出るもの、意味はあらわれるもの――。

意味は出るのではなく、言葉においてあらわれるとも言えそうです。こうした状況を言いあらわすのに、「意味があらわれる」という言い方があってもいい気がします。

\*\* 不気味な「あらわれる」\*\*

音と文字からなる言葉は見えるし聞こえます。人にとって見えて聞こえるものは、扱いやすいはずですが。言葉に立ちあらわれる意味は、あらわれると言っても見えないし聞こえません。

意味は不気味です。言いたいこと、意味、意義、異味、忌みというふうに言い換えたとしても、見えないし聞こえないし、その不気味さは消えません。

あらわれているのに消えない不気味さこそが、意味を意味にしているものではないでしょうか。得体が知れないのです。

\*

あらわれる、現われる、顕れる、表れる。

これがいまの標準的な表記ですが、次の表記もあります。

露れる、彰れる。

漢和辞典を見ながら、「あらわれる」に当てたい漢字をもちいて当ててみます。「あらわす」とか「しるす」を含めて勝手に当ててみます。

兆れる、徴れる、形れる、著れる、見れる、記れる、志れる、注れる、註れる、紀れる、署れる、誌れる、識れる、銘れる、録れる。

これが私の「あらわれる」をめぐっての個人的なイメージだとも言えそうです。

\*\* あらわれるのは仮の姿や様子 \*\*

「あらわれたもの」を目で見えたり、触覚・触感、嗅覚、場合によっては味覚・触感、さらには気配で感知してはいるが、「あらわれている」のは仮の姿や様子であって、そうではないさまが隠れているのではないか。

それが「あらわれる」であり「あらわれ」だという気がします。そして、その「あらわれ方」は「意味」にととてもよく似ていると感じられてなりません。「ありげ・有りげ」なのです。「意味ありげ」の「ありげ」に似ています。

たぶん、「ありげ」は仕組みなのです。どうにもならない仕組みであり仕掛けです。

(投稿：2023年5月13日 10:29)

#意味 # 現れる # 出る # 言葉 # 異味 # 忌み # 辞書 # 漢字 # 大和言葉 # 和語 # 漢語  
# 色 # 香り # 辞書



意味の意味を広げる





＊

\*\* 意味の意味を広げる

星野廉

2023年5月12日 07:47 \*\*

景＋色＝景色

景＋光＝光景

景＋情＝情景

景＋風＝風景

景に何かが加わる。人は何かになんかを見てしまう。世界に意味が添えられる。

(拙文「色のない景色」より)

目次

\*\* 世界に加わるもの

見える世界に、色、光、情、風を加える

意味の意味不明っぽさ

meaning、sense

感覚、知覚、五感

意味は感じるもの

意味は官能 \*\*

\*\* 世界に加わるもの \*\*

人は世界そのものや森羅万象そのものを見ることはできません。ヒトに備わっている知覚機能と認知機能をとおして万物を「見ている」からです。

「見ている」だけでもない気がします。たぶんそれに色づけをしているのです。色づけという言葉を使いましたが、「色」も「つける」も比喻です。「意味づけ」と言ってもいいでしょう。

この記事では、色づけをすとか、意味づけをすというさいの「色」と「意味」を広げてみたいと思います。

\*

景色、光景、情景、風景——景に何かが加わる。世界に意味が添えられる。世界に意味が加わる。

意味は漠然とした言葉です。なにしろ、意味は見ることも聞くことも、手で触ることもできません——なんて私はよく記事に書くのですが、ほんとうにそうでしょうか？

世界にはどんなものが加わって、私たちはその世界を見ているでしょう。

\*\* 見える世界に、色、光、情、風を加える \*\*

景+色=景色

景+光=光景

景+情=情景

景+風=風景

意味は色、意味は光、意味は情、意味は風。

意味はいろどり、意味はかがやき、意味はこころ、意味はながれ。

\*\* 意味の意味不明っぽさ \*\*

「意味」という言葉を辞書で見るといろいろな語義が並べてあります。語義には難しい説明もあります。

「言いたいこと」という説明はすっと入ってきます。頭よりも体にすっと入ってくる

のです。これは大和言葉とか和語と呼ばれている、この島々にもとからあったらしい言葉だからでしょう。

簡単に言うと、音読みではなく訓読みをしている言葉からなりたっているという意味です。

一方、「意味」は音読みしているようなので、漢語系の言葉でしょう。つまり、大陸から来た文字とその意味がセットになっているわけです。

私の印象では漢語系の言葉は体よりも頭に入って来て、和語よりも入ってから分かるまでに時間がかかる気がします。

そのせいか、「言いたいこと」にくらべると、「意味」は意味不明っぽいのです。だから、私はその意味の意味不明っぽさをめぐって、このところ記事を書いているのかもしれない。

\*\* meaning、sense \*\*

「意味」という言葉の意味を考える場合に、国語辞典を眺めてうなっているだけでなく、「意味」に相当する外国語を辞典で調べると、はっとなる語義（ほとんどが説明というよりも訳語です）があって刺激を受けます。

「ああ、なるほど」と声をあげたくなる語義に出会えます。「意味って、そういう意味かもしれない」という感じ。

\*

私の印象では、英語の meaning は日本語の「意味」に近いです。ほぼ重なる気がします。「やっぱりね」という感じ。

この meaning は日本語の和語に当たるようです。つまり、英国の島々に土着の言葉の

系統につらなるそうです。ゲルマン系と呼ばれることがあります。

日本語の「意味」に相当する英語の単語には sense もあります。ナンセンス、コモンセンス、「いいセンスしている」のセンス——意味、思慮・分別、感覚——です。この語は、ラテン系、つまり大陸から渡ってきた言葉の系統につらなるようです。

日本語にも英語にもそれぞれ二つの系統があって、一つは島々に土着の言葉、もう一つは大陸から渡ってきた言葉である、なんておもしろい符合ですね。わくわくする話です。

＊

sense の語義を見ると「おやっ」と思います。meaning より語義が多く、その意味の様相が meaning と微妙に、見ようによってはかなり、ずれているのです。

語義に見入ってしばらく考えこむこともよくあります。私には楽しい時間です。私は辞書を見たり眺めるのが好きなのです。

\*\* 感覚、知覚、五感 \*\*

sense の語義の数々の語義のうち、わくわくするのは「感覚、知覚、五感」と「(五感または直感で)感じる」(ジーニアス英和大辞典)です。

日本語の「意味」にも、英語の meaning にもない語義なのですが、「なるほど、そういえばそうだなあ」という気持ちになります。上で書いた色、光、情、風にも似たものを感じます。

意味は色、意味は光、意味は情、意味は風。

意味はいろいろ、意味はかがやき、意味はこころ、意味はながれ。

要するに、頭だけで感じ分けたり、とらえるのとは異なる「意味」があります。意味を身体にまで広げているのです。

人が何かに何かを見る。世界に意味が加わる。世界がいろどりを帯びる。こうした場合には、身体的な反応が起きている気がします。意味づけがあるとすれば、それは頭だけの働きではないにちがいません。

\*\* 意味は感じるもの \*\*

意味は言葉とセットになっていると考えられていますが、固定を指向する言葉と異なり——文字・印刷・複製、録音、録画——、意味は動きであり、形や姿が明確ではなく、常に「うつろいつづけている」と考えられます。

共同体や集団で共有されるものだけが意味ではないのです。だから、意味をめぐる擦った揉んだが絶えないと言えます。

意味は、ある時代のある時期の特定の集団や個人の辻褃合わせのためにあるのではないのです。ローカルでプライベートなものとして常に、人と「生きつづけている」のが意味の原点でしょう。

そんな曖昧模糊で漠然とした意味ですが、人はそれを「感じる」ことができると言えそうです。

日本語と英語を混同しているなんて声が聞こえそうですが、漢語をふくめた翻訳語だらけの日本語は混同だらけです。自分の直感を信じて sense と「意味」のコラボを書いてみます。

\*

意味は見える。意味は光、意味は闇。

意味は聞こえる。意味は音、意味は声、意味はノイズ。意味はメロディー、意味はリズム、意味は沈黙。

意味はにおう、意味は匂う、意味は臭（にお）う。

意味はさわれる。肌ざわり、意味は手ざわり、意味は舌ざわり、意味は湿り気。

意味は味。意味はおいしい、意味はまずい、意味はあまい、意味はからい、意味はすっぱい。意味は食感、意味は歯ごたえ、意味は舌ざわり。

意味は気配。意味は間（ま）。意味はおもむき。意味はなんとなく。意味は「何か」。意味はきざし。意味は空気。意味は風。

\*\* 意味は官能 \*\*

sense の形容詞形もおもしろいです。sense が多義語であることが浮き彫りになります。

sensible は「分別・良識・思慮・判断力」という語義から来た形容詞で、「分別のある・思慮のある」。

sensitive は「知覚・感覚」系で「感じやすい・敏感な」。

sensory は「知覚・感覚」系の学術用語的な形容詞で「知覚（感覚）に関する」。

sensual は「官能的な・肉感的な・そそる」。

sensuous は「感覚的な・美感（感性）に訴える」。

\*

以上は、英語であるそれぞれの形容詞の語義ではなく日本語であること、つまり訳語であることを思い出しましょう。外国語辞典につきまとう問題であり現実と言えます。

逆に言うと、日本語の「意味」という言葉では見えなかった、あるいは感じられなかった「意味」という言葉の意味の部分が見えるし感じられるかもしれません。

とはいえ、意味の原点は個人的でありローカルなものです。「私はそう思わない」という人がいてぜんぜん不思議はないわけです。

上の英語の形容詞で私にびびっと来たものを以下に書きます。

\*

意味は官能。

意味はそそる。

意味は体にうったえる。

意味はフィジカル。

意味は身体的。

sense に「分別・judgement」と「感覚・feeling」の両方の意味があることに感動を覚えます。意味は頭だけでなく体でもとらえるものなのですね。

意だけでなく、感、官（器官の官）、甘、勘、観、歓を感じます。要するに「味わう」のです。意味ですから。

（投稿：2023年5月12日 07:47）

#意味 # 五感 # 知覚# 感覚 # 大和言葉 # 和語 # 漢語 # 日本語 # 英語 # 国語辞典  
# 英和辞典





宿を借りる生きもの



＊

\*\* 宿を借りる生きもの

星野廉

2023年5月8日 07:47 \*\*

目次

\*\* 宿を借りる

出たものは何らかの運動へと誘われる

文字は不気味

出た意味が言葉として立ちあらわれる

複製化された言葉

言葉は意味のしもべ

あらわれた意味に関しては、人は責任を取らなくてもいい

得をするのは意味なのかもしれない \*\*

\*\* 宿を借りる \*\*

意味は色です。色はそれだけで「いる」ことも「ある」こともできないから、いたりあったりするものに浮かぶのです。意味があらわれるのは言葉にだけではなく、森羅万象にあらわれるのでしょうか。

人が森羅万象の代わりに持ち歩く（ポータブルな）意味の居場所、それが言葉なのかもしれません（その意味で、意味は宿を借りる生きものなのかもしれません）。

その言葉もまた、仮の宿だという気がします。

その言葉が宿る場所、つまり人も、仮の宿であるはずです。

その魂が宿る場所も、仮の宿であるにちがひありません。というか、そうであってほしいです。

(拙文「a rolling stone」より)

\*\* 出たものは何らかの運動へと誘われる \*\*

いったん「出た」ものは、必ず、何らかの運動に誘発されます。たとえば、いったん「出た」給料も、給付金も、保険金も、うんちも、太陽も、月も、声も、にきびも、幽霊も、新刊書も、選挙候補者も、テレビドラマの役者も、家出したお父さんや、家出したお母さんや、家出したお子さんも、火も、くいも、そのまま静止し続けることはありません。(拙文「出たものは「静止」してはいない」より)

半分冗談はさておき(半分は本気です)、いったん出たものがじっとしていないで、何らかの動きへと誘われていくというイメージは、私にとってリアルなものなのです。

思いこみなのでしょうか。私はnoteで記事に書いていることは、研究でも探求でもありません。考えてわくわくすることを文字にしているだけです。

\*

言葉はどうなのでしょう。意味はどうなのでしょう。

言葉(声・文字・表情・身振り)は、いったん発せられたあと、じっとしていないで、何らかの動きに誘われるという気はします。

なにしろ、声と表情と身振りは、発せられたとたんに消えていきます。受け手はそれを必死に(またはぼんやりと)追いかけて記憶にとどめる(あるいは片っ端から忘れる)ことになります。

消えるのです。録音とか録画をしないかぎりには消えます。文字にしていく方法もありますが、これは現実問題として大変です。

速記みたいに多大の技能と労力が必要になります。通訳者みたいにメモを取ってあとで再現するもの普通の人にはできそうもありません。

\*\* 文字は不気味 \*\*

一方で、文字は残ります。これはすごいことだと思います。私にとって、文字は不思議だらけであり不気味だらけの存在です。

- ・文字の習得には、とほうもない時間と労力がかかる。
- ・学習障害として文字の読み書きだけができない人がいる。
- ・人類には無文字社会という選択もあった。
- ・話し言葉、書き言葉（文字）、表情、身振りを言葉と考えた場合に、文字がいちばん遅く出てきた。個人レベルでも、文字の習得が後になりがち。
- ・文字だけが見える、しかも残る。
- ・複製として存在し広まり継承される。
- ・スーパースターとして最後にあらわれた。それでいて、あちこちであらわれ続けている。
- ・産む。産み続ける。

上の箇条書きを見ていると、文字の特異性をひしひしと感じます。不気味なのです。

\*\* 出た意味が言葉として立ちあらわれる \*\*

出たとたんにどんどん消えていく声や表情や身振りも、出たあとにしつこく残る文字も、いったん発せられたのちには、じっとしていないで、何らかの動きに誘われる気がします。

人が動くのです。心が動くだろうし、じっさいに行動に出ることもあるでそう。

意味はどうでしょう。

私の印象では、意味は出ると言えば出るわけですが、言葉といっしょに出ているようです。

意味（言いたいこと）が人の中から出て、言葉（声・文字・表情・身振り）という形を取ってあらわれる。

という感じがします。意味から言葉への移行は瞬時だという気がするので、次のように言えそうです。

意味（言いたいこと）が人の中から出て、瞬時に言葉（声・文字・表情・身振り）という形を取って立ちあらわれる。

**\*\* 複製化された言葉 \*\***

いったん「あらわれた」ものは、「出た」ものとは異なり、静止したまましつこく居座ることも、往々にしてありそうなのです。真価、効果、正体、正義の味方、英雄、悪の権化、〇〇の神様、救世主、影響、才能、成果、結果などです。もっとも、影響や結果や効果みたいに、「出る」とも言うものは、概して「不安定」な気がします。（拙文「出たものは「静止」してはいない」より）

声（話し言葉）、表情、身振りは、放たれた瞬間に消えます。文字は消さないかぎり、しつこく居座りつづけます。

前者を居座りつづけさせるためには、文字にするか——昔はこれに頼ったようです、というかこの方法に頼る時代がずっと続いていたのです——、録音や録画という手段を取ります。

文字は、写本や写経のように筆写する時代が長く続き、やがて印刷術が発明され普及し、いまではデジタル情報として配信・複製・拡散・保存がネット上で瞬時におこなわれています（音声と映像についても同じです）。

＊

大切なことは、音声、表情や身振り、そして文字が、いまでは複製として拡散され保存されていることです。

私たちが日常生活で目にしたり耳にしている音声や映像や文字のほとんどが複製、し

かもデジタル化された情報としての複製だということに、本気で驚きつづけていても罰は当たらないと私は思います。

よく考えると、こうした状態というか事態というか常態は、少し前には想像もしていなかったのです。とんでもないことが起きているのですが、それが当り前に感じられます。

人は長い間驚いていることができないようです。慣れるというか鈍感になる才能にめぐまれているから、人類はここまで来たのでしょうか。

\*\* 言葉は意味のしもべ \*\*

話を戻します。というか飛躍します。

いまや複製が主流になった言葉が残って増えつづけているわけですが、これは意味が残って増えつづけているとも言えるのではないのでしょうか。

さらに言うなら、意味を生かしつづけるために、複製化された言葉があるように思えてなりません。

言葉は意味のために——意味を生かすために——あるのです。その逆では断じてありません。言葉は意味のしもべなのです。

ひょっとすると、デジタル化とインターネットという魔法が生みだされる前には、長い間文字（消えずにしつこく残りつづける文字）が意味を生かしつづける役割をになってきたのではないのでしょうか。

\*

言葉と意味の関係は、いろいろな見方でとらえることができるでしょう。

- ・意味は言葉の主（あるじ）であり、言葉は意味の僕（しもべ）である。
- ・意味は言葉に寄生している。

- ・意味は言葉に宿っている。
- ・見えない聞こえない意味は、見えて聞こえる言葉にあらわれる。
- ・人に見えない聞こえない意味が、人に見えて聞こえる言葉に宿っているのは、言葉を媒体にして、視覚と聴覚に優れた人という生きものに寄生しているからだ。

いかにも妄想の産物といった言葉をつらねていますね。思いつきをつづただけですので、今後変更したり、忘れてしまうこともあるだろうと思います。記念として残しておきます。

\*\* あらわれた意味に関しては、人は責任を取らなくてもいい \*\*

「○○が出る・出た」とか、「○○が見える・見えた」の代わりに「○○があらわれる・あらわれた」と、するだけでいいのです。「見える・見えた」が自分の責任なのかどうかは、誰にも分からないと思いますが、とにかく責任を転嫁するのです。

それは「出た」のでも「見えた」のでもなく、「あらわれた」のです。思うだけでなく、ちゃんと声を出して唱える。それだけで、だいぶ気が楽になりませんか？  
(拙文「あらわれるのです。」より)

言葉が人の中から出てきて、その言葉に意味が立ちあらわれるという話になってきました。

意味があらわれるのには意味があるのでしょうか。

人が言葉をもちいる、人が言いたいことを意味として言葉にならせる、こうしたことに意味はあるのでしょうか。誰かが得をするのでしょうか。

得をしているのは人でしょうか。たしかに、人類はこの星でここまで来たわけですから。得をしたと言えば得をしたのであり、ひどい目にあっているとえばひどい目にあっていると言えそうです。

ひどい目にあっているのは、この星と、この星に住むヒト以外の生きものたちだとも言える気がします。



ヒトだけが得をしているのであれば、こうなった責任にはヒトにあるとも言えるでしょう。

いや、ヒトは意味に利用されているだけだと言う人がいても私は驚きません。

意味のすべてが「あらわれた」結果としてあるのだから、ヒトには責任がない。そんなふうには責任転嫁をするのが、ヒトにとっては精神衛生上好ましいことである。

勝手にあらわれる意味に対し、ヒトは責任を取る必要はない——なんて考えもありそうです。

\*\* 得をするのは意味なのかもしれない \*\*

飛躍がつづいたので、整理をしてみます。

意味のすべてが「あらわれた」結果としてあるのだから、ヒトには責任がない。そんなふうには責任転嫁をするのが、ヒトにとっては精神衛生上好ましいことである。

もしそうであれば、ヒトが意味に責任転嫁することによって得をするのは、意味なのではないでしょうか。

責任転嫁をして気持ちが楽になったヒトは、安心して、あるいは自信をもって、心置きなく言葉を使いつづけ、それと同時に意味を生かしつつけることになります。

意味は宿を借りる生きもの。太古から森羅万象に宿り、やがて言葉というポータブルな宿を借りてヒトに寄生するようになった。いまではヒトの手を借りてこの星にめぐらされた網に居ついている。

めちゃくちゃな話になりましたね。単なる私の個人的な妄想で終わらせないためには、以上の筋書きで SF 小説か幻想小説を書けばいいのかもしれませんが、いまの体調を考えると体力的に無理なようです。

しばらく、ここで書いたことの意味を考えてみます。

(投稿：2023年5月8日 07:47)

#言葉 #意味#日本語 #寄生 #借りる #複製 #文字 #インターネット #妄想 #小説  
#SF #幻想小説

a rolling stone



＊

\*\* a rolling stone

2023年5月7日 08:38 \*\*

目次

\*\* 転がす、ずれる

言葉、意味

意味をあつかおうとするときの、もどかしさ

意味をあつかうはずなのに言葉をあつかってしまう

出る、あらわれる

出る言葉にあらわれる意味

\*\*

\*\* 転がす、ずれる \*\*

このところ、「出る」とか「あらわれる」とか「見える」という言葉を転がしています。

転がすというのは、ころころ回して動かしたりひっくり返して、転じることです。

言葉をいじくりまわすと、言葉にずれが起きます。言葉がずれるのです。たとえば、ここまででやったことが、転がすです。

転がす ⇒ ころころ回す ⇒ 動かす ⇒ ひっくり返す ⇒ 転じる ⇒ いじくりまわす ⇒ ずれが起きる ⇒ ずれる

循環とか反復とも言えます。循環と反復が起きるとかならず、ずれが生じます。

「同一」は言葉や意味や人においてはありません。動くことでかならず、ずれます。動きは時間の経過でもあるので、動きとずれは同義と言えそうです。同義は動義だと言いたくなります。

いま述べたことは、まさに循環であり反復です。私はこういうことが好きなのです。言語活動をふくむ、人のあらゆる行動の根底には、ずれを伴う循環と反復があるのではないか。そんな思いが私には強いです

\*\* 言葉、意味 \*\*

このところ、「出る」とか「あらわれる」とか「見える」という言葉が気になって転がしているのですが、こうした言葉とセットになっているの言葉があります。

言葉と意味です。

出る、あらわれる、見える  
言葉、意味

上の文字列を組み合わせて作文をしているのです。

\*

「言葉」と「意味」という言葉のことなのですが、言葉をあつかうと、意味もあつかわなければならなくなります。とはいうものの、意味をあつかうというのは至難の業です。

言葉は見えたり聞こえたり手で触れることができますが——言葉を手で触れるとは、たとえば点字や指字のことです——、意味は見えないし聞こえないし手で触れないので、「意味をあつかう」と言っても手に余るのが現実なようです。

これまでに、見えないものをあつかったことがありますか？ 私にはありません。

言うは易く行は難し、ですね。

\*\* 意味をあつかおうとするときの、もどかしさ \*\*

意味をあつかうと言っても、その過程においてもその結果においても、意味を「言葉

にする」わけですから、けっきょくは言葉をあつかってしまうことになります。

意味をあつかおうとしながら、言葉に言葉を重ねるといった操作をくり返すしかないという意味です。

見えないし聞こえないし手で触れることができない意味をあつかうのは至難の業です。もどかしいし、ままならない。

夢の中で思いのままに振る舞おうとするさいに覚える、もどかしさに似ています。

鏡をのぞきこんでそこに映った像を目にしながらか、それが自分の似姿であって自分ではないと思いだしたときの無念さ、それに追い打ちをかけるように、自分を肉眼で見たことがない、これからも見ることがないのに気づいたときに覚える、やるせなさにも似ています。

ままならない、もどかしい、できそうでできない。夢の中と鏡の前でのもどかしさと同じく、意味をあつかうのはかなわぬ夢のようです。

それでいて、「意味」という言葉があり、辞書にもちゃんとその意味（じつは意味ではなく、意味の一つである語義を文字にしたもの）が書いてあるし、意味は言葉とセットになっているようだし、言葉とセットになっているようだから、人は言葉を使いながらまるで取り憑かれたように、見えない意味を追い求め、意味をめぐるの擦った揉んだをくり返している。

\*\* 意味をあつかうはずなのに言葉をあつかってしまう \*\*

「私は意味をあつかいましたよ」という言葉がいくつあっても（そんな本がたくさんあります）、それは空手形みたいなものであり、意味をあつかったエビデンスにはなりません。

言葉に言葉を重ねる形で言葉をあつかいながら、1) 意味をあつかっている振りをす

る、2) 言葉をあつかっているのに気づいていない、3) 都合のいい理屈やもっともらしいフレーズを考えて（たとえば以心伝心、テレパシー、作者の意図を汲む）、言葉をあつかっていることを意味をあつかっていることにする。

ちなみに、私は2) のタイプです。私が言葉をあつかっているのは一目瞭然なのです。なにしろ、いまみなさんがご覧になっているのは文字なのですから。

気をつけてはいるのですが、つつい忘れます。気づいていないために、ときどきとんでもない飛躍や脱線をするのですが、それが私の芸風ということでお許しください。

知らぬが仏。

要するに、かなりいいかげんにやっています。私は研究者でも探求者でもなく、ただわくわくするのでこういうことをやっているからです。筋をとおす義理はありません。

そんなわけで、矛盾や破綻、飛躍や脱線、循環や反復を恐れず、その時々直感をたよりに、言葉を転がしていきます。早い話が、それしかできないのです。これが私の芸風です。

\*\* 出る、あらわれる \*\*

言葉が出る。言葉は出る。  
言葉があらわれる。言葉はあらわれる。  
言葉が見える。言葉は見える。

意味が出る。意味は出る。  
意味があらわれる。意味はあらわれる。  
意味が見える。意味は見える。

上の文字列を眺めていると、定着した言い方もあれば、ふつう言わないなあとと思うものがあります。私は定着していない言い方がわりと好きです。

なにしろ、「うつせみのたわごと」というタイトルで自分語と言っているような言葉遣



いで長文の連載を堂々と投稿するような人間なのです。

定着、固定、さだめる、かためる。

こういうものが苦手なのです。だから、転がり転がすのです。

転石苔むさず。

A rolling stone gathers no moss.

このことわざには、いい意味も悪い意味もあるようです。どちらの意味にも取れる。定まっていなくて好きです。

\*\* 出る言葉にあらわれる意味 \*\*

言葉は出るものであり、意味はあらわれるものだ。

さきほど並べた文字列を見ていると、そう感じます。出た言葉に意味があらわれるのです。

生（は）えてきた言の葉に色が浮かぶイメージ。意味は色なのだろうと思います。色は仮の姿であったりまぼろしなのだという気がします。

出るものは、たいてい見えるし聞こえるし手で触れる。あらわれるものは、ときには見えたり聞こえたり手で触れることができるが、その「あらわれ」は一時的であったり仮の姿であったりまぼろしであったりする。

詳しく言うと、そんなふうにも感じています。

\*

意味は色です。色はそれだけで「いる」ことも「ある」こともできないから、いたりあったりするものに浮かぶのです。

意味があらわれるのは言葉にだけではなく、森羅万象にあらわれるようです。その意味で、意味は宿を借りる生きものなのかもしれません。

そう考えると、人が森羅万象の代わりに持ち歩く（ポータブルな）意味の居場所、それが言葉だと言えそうです。

その言葉もまた、仮の宿だという気がします。その言葉が宿る場所、つまり人も仮の宿であるはずで。

その魂が宿る場所も、仮の宿であるにちがいません。というか、そうであってほしいです。

＊

意味（言いたいこと）が人の中から出て、言葉（声・文字・表情・身振り）という形を取ってあらわれる。

という感じもします。いまのフレーズでは、意味が出て、言葉があらわれると言っています、私の文章ではこういうことはよくあります。

一瞬一瞬の思いを大切にしたいので、無理に辻褃を合わせないのです。言葉の上での帳尻を合わせなければならない義理も必然も忖度も、私にはありません。

反復しながらずれていくだけです。ころころと転がるだけです。

＊

出た言葉も あらわれた意味も  
ころころ 転がる

転びもするし 転げもするし こけもする  
こける 転げる 倒ける 瘦ける 苔る

苔むす 苔のおむすび 苔まりも  
転がっているうちに すり減る

いつか消えてなくなる  
いつか帰っていく 還っていく 孵っていく

(投稿：2023年5月7日 08:38)

#転がる # 石 # 言葉# 意味 # 出る # あらわれる # 現れる # 見える # 日本語 # 反復  
# 循環# 矛盾 # 飛躍



## 石の意味



＊

\*\* 石の意味

星野廉

2023年5月6日 07:59 \*\*

目次

\*\* 短いと長い

〇〇さんが語る

ミステリー、ミステリアス \*\*

\*\* 短いと長い \*\*

石の意味。

上のフレーズを見ていると、いろいろな思いが浮かびます。フレーズやセンテンスは、短いほど長いからです。短いほど、さまざまな推測や連想が起きて、それを見ている人の思いは重くなります（重い思いは、主おもに表おもてや面おもにあらわれます）。

単語のレベルでもそうです。辞書をぺらぺらめくって見ていると、見出しの語の文字数が少ないほど語義や例文や解説が多いのに気づきます。少ないほど多いということですが、短いほど長いとも言えます。

読むよりも、目を細めて見るほうがよく見えます。目を細めるほどよく見えるのです。国語辞典よりも英和辞典のほうがよく分かります。

長い・短い、重い・軽い、多い・少ない、目を細める・よく見える——このように対義語や反対の意味とされている語やフレーズ（どれもが印象であることに注目してください、ここでしているのは数値化できる事象や現象の話ではありません）がかならずしも反対ではないことが実生活ではよく起きます。

現実には現実の文法（比喻です）があり、言葉には言葉の文法があるからです。

\*\* ○○さんが語る \*\*

石の意味。

石というものが存在する意味。石の重要性。特定の石がそこにある意味。

「石の意味」にもう少し文字を足してみます。文字数が増えて多くなり、文字列は長くなります。

○○さんが語る、石の意味。

○○さんが、哲学者とか思想家であったり、文化人類学者であったり、地学者であったり、宇宙物理学者であったり、美学者であったりすれば、「石の意味」がだいたいどんな話になりそうかが想像できそうです。

フレーズつまり文字列が長くなるにつれて、うざくなるとも言えるかもしれません。いわゆる含蓄とか蘊蓄とか情報とかがくつつくわけです。要約が可能な文章とも言えます。

小説家や詩人が語ったり歌うとなると（作品のことです）、話や書かれていることを予測するのは難しい気がします。予想を裏切るのが仕事ですから。

詳しく言うと、適度に予想や期待にそい、適度に予想や期待を裏切る作家に人気が集まります。「この先どうなるのだろう？」や「これはどういう意味？」——じらすのです。そのため、要約すると味（意味）ががらりと変わることがあります。意味とは味なのです。

\*

○○さんが、石屋さんや墓石業者さんである。宝石をあつかう業者さんである。胆石や結石が専門の医師である（石専門の医師）——こういう場合には、ある意味切実であったり、金銭もからみますから、思わず身を乗り出して話を聞くなんで展開にもなりそう



です。

〇〇さんが、囲碁の名人とか棋士であれば、話はまたがらりと変わるでしょう。「定石」という言葉にあるような、石の打ち方や型の話になりそうです。

造園業も石をあつかうお仕事ですね。敷石や石庭なんていうものもあります。石といってもいろいろな意味になり、いろいろな意味を帯びそうです。

\*\* ミステリー、ミステリアス \*\*

「君は、この石の意味をどう考えるかね？」

小説でこんなフレーズがあったとすれば、ミステリーで密室のカーペットの上に拳大の石が転がっていて、探偵か刑事が口にしそうな科白になるでしょうね。

または密室でなくて、事件の起きた登山道の脇に積まれた石の意味をめぐっても、上のような言葉が出てきてもおかしくないでしょう。

あと囲碁の対戦が出てくる小説でも、それなりの意味を持ちそう。胆石専門の医師が登場する医学小説でも……。

\*

要するに、文脈で「石の意味」が決まるということです。

そう考えると、「石というもの」が深くミステリアスに思えてきます。

同時に、「意味というもの」も深くミステリアスに感じられていきます。たとえば、石の持つ意味、ある石をめぐっての意味、石という言葉の意味——この三者の意味は異なります。

大切なのは、石そのものに意味はなく、石に人が「意味」や「意味ありげ」を見てしま

うこと、そして石は見たり手で触れるけれど、石の「意味」や「意味ありげ」は見えないし手で触ることもできないということでしょう。

ところで、私は石に意志や意思を感じるがあります。そんな話を書いた「路傍の人」という拙文があるので、よろしければお読みください。私にとって愛着のある文章なのです。

路傍の人 - 星野廉の日記

笑われるのを覚悟で言いますが、私は石に意志を感じるがあります。硬い石に固い意志を感じるのです。ついでに言ってしまう

[horensou.hatenablog.com](http://horensou.hatenablog.com)

(投稿：2023年5月6日 07:59)

#意味 # 対義語 # 反意語# 言葉 # 日本語 # ミステリー # 石 # 国語辞典 # 英和辞典

連想でつなぐ、つぎつぎ



＊

\*\* 連想でつなぐ、つぎつぎ

星野廉

2023年5月3日 14:10 \*\*

たぶん、コマ送りやバトンを手渡すように、つぎつぎ＝継ぎ継ぎ＝接ぎ接ぎ＝注ぎ注ぎ＝告ぎ告ぎと連なっていくのでしょう。すると、筋書き、つまり物語とドラマが生まれます。

映画や漫画やアニメのコマ送りという原理が、これでしょう。

私は詳しくないのですが、音楽も、余韻や予感や必然性や筋をはらんだ音が、つぎつぎ＝継ぎ継ぎ＝接ぎ接ぎ＝注ぎ注ぎ＝告ぎ告ぎと連なっていく気がします。

(拙文「心が壊れないために何かに何かを見てしまう」より)

目次

\*\* つぎつぎ

コマ送り、流れ、模様

線、面、網

\*\*

\*\* つぎつぎ \*\*

つぎつぎ＝継ぎ継ぎ＝接ぎ接ぎ＝注ぎ注ぎ＝告ぎ告ぎ。

「継ぎ継ぎ」は、テレビの中継のようです。リレーしてつなげる。つなげる・つながる。つらねる・連ねる・列ねるで、英語の train (列のイメージ) にもつながります。

「接ぎ接ぎ」だと、『フランケンシュタイン』を連想します(もちろん名のない怪物のほうです)。接ぐのは線だけでなく、継ぎ合せて継ぎ接ぎしていくパッチワーク、つまり線から面につなぐこともできそうです。

「注ぎ注ぎ」を「そそぎそそぎ」と読むと、雨水があちこちから川に注ぐ、また川が川に注ぎこむさまが頭に浮かびます。このもようは、見方を変えると、木の枝が茂る形や、根や根茎が地中で伸びるさまのようです。「しげる・繁茂」や「はびこる・蔓延」というイメージ。

「告ぎ告ぎ」は、さしずめ糸電話や伝言ゲームでしょうか。つぎつぎとメッセージや命令を伝えていく動きに見えます。「伝わる・伝える・伝達」と「広がる・広げる・広まる・拡散」です。空間的な告ぎ告ぎは、時間的な継ぎ継ぎへと——伝達から継承へと——容易につながります。

\*\* コマ送り、流れ、模様 \*\*

「つぎつぎ」はぺらぺらした薄いものであれば「ぼたぼた」、流れる液体であれば「ちょろちょろ」とか「どくどく」という感じがします。

要するに、コマ送りや流れなのですが、これには区切りや堰（せき・せく・堰く・塞く）があります。「ぼた/ぼた」「ちょろ/ちょろ」「どく/どく」の「/」が区切りであり「せき・せく」です。セクションとか「せつ・節・ふし」という感じ。

区切りは規則的であったり、断続的であったりするのでしょうか。それがリズムや節や旋律なのかもしれません。

区切りが線状に進むのではなく、平面に展開するのであれば模様になるはずです。いびつな染みのような模様もあれば、規則性のある、または人にとって意味のある形を帯びることもあるでしょう。

いずれにせよ、伸びる・延びる・展びる、広がる・拡がる・展がる。線として進む、面として行き渡る。

\*\* 線、面、網 \*\*

人の作るもので線状であったり面状であったりするものがいかに多いことか。その線の流れも、面の広がりもけっして一様ではなく、線にはところどころに節目があり、面にはあちこちに皺（しわ）や畝（うね）があって、それらがつぎつぎと現れてや、波やパターンをなすようです。

線と面——。ストーリー（言葉）、メロディー（音声）、パターン（模様・映像）。そこにはモチーフ（動機）とテーマ（主題）とデザイン（構想）があります。広義の物語です。でたらめに進んだり広がるのではありません。

ところで、線と面との両方の要素と性質を兼ねそなえたものが「網・編み・ネット・ウェブ」なのではないでしょうか。そうであれば、最強最大最長の「のびる」であり「ひろがる」です。

ストーリー（言葉）、メロディー（音声・振動）、パターン（模様・映像）、何でも乗せる・載せることができます。そうしたものたちすべてが、そこに保存され蓄積し蠢いているのですから、そこは巢・窠・棲・栖と呼んでもいいでしょう。

人の作ったものでありながら、節や堰や皺や襞や畝が無数に存在する、この迷宮か魔窟のような巢の実体と実態を把握している人はいないにちがいません。

（投稿：2023年5月3日 14:10）

#連想 # 伝達 # 継承# インターネット # 網 # 物語 # 旋律 # 映画 # アニメ # イメージ





What do you mean?



＊

\*\* What do you mean?

星野廉

2023年5月1日 12:13 \*\*

今回も前に書いた記事へのツッコミというか、連想でつなぐというか、しりとりみたいにつなげてみます。

以下の見出しの文章「意味が不明、コンセンサスがない」は「言葉は声と顔が命、意味は二の次」という記事からの引用です。この文章につなぐ形で記事を書いてみます。

大型連休でみなさんお休みでしょうから、今回の記事は短くいきます。

目次

\*\* 意味が不明、コンセンサスがない

What do you mean?

言葉は文字どおりには使われない

\*\*

\*\* 意味が不明、コンセンサスがない \*\*

人はまず○△Xという言葉をつくり、次に「○△Xとは何か？」とえんえんと思い悩む生き物である。

無数の○△Xたちがあり、その内容つまり意味をめぐってのすったもんだが繰り返されてきて、いまも繰り返されている。

大昔の○△Xたちについて意味が不明になっているとか忘れていたのならまだいいです。

いまつかわれている○△Xたちについて、同時代人たち、同じ言語を話すはずの人たちのあいだで、コンセンサスがあるようでないようなのです。

たとえば、「正義」という言葉ですが、相手がどういう意味で使っているのかはつねに不明なのです。

辞書なんか当てになりません。議論の最中に辞書を取りだしたら、相手に笑われます。笑われたら、もう負けたようなものです。

\*

他の例を挙げます。

「真摯に」が「テキトーに」であったり、「スピード感をもって」が「のろのろと」であったりするの、みなさんをご承知のとおりです。「分かった」が「分からない」、「承知しました」が「知るもんか」だなんて、当たり前ですね。

ある場面では、「だめよ、だめよ」が「いいわ、いいわ」、「ぜったいにいや」が「もっともっと」だったりもします。政治の世界がそうです。ビジネスの世界もそうでしょう。もちろん、日常生活でも。

\*\* What do you mean? \*\*

その意味で、ジャスティン・ビーバーの楽曲「What Do You Mean?」の歌詞は、言葉の意味にコンセンサスがない、早い話が言葉には意味がない、つまり言葉の意味は後付けで何にでもなるという、意味の本質を突いていると考えられます。

このタイトルは英語でよく使われるフレーズですが、What do you mean? であって、What does it mean? ではないところが味噌です。このように尋ねられた相手はふつう、

I mean ... (It means ... ではなく) と答えることになります。

言葉ではなく、人が主語です。

意味は「言葉にある」のではなく、その時々自分の都合で「人が作る」とか「人が決める」という意味ですね。

<https://www.youtube.com/watch?v=yR74fQILpCY>

What Do You Mean? (2015) Justin Bieber

\*\* 言葉は文字どおりには使われない \*\*

もっとも、What do you mean (by ○○) ? は、「あなたは (○○って言ってるけど) それで何て言いたいのか?」という語感なのですが、意味の本質を突いていると私は思います。

要するに、意味とは「何を言いたいのか」だとも言えそうです。言外のメッセージという言い方もできるでしょう。言葉は文字どおりとか額面どおりには使われないのが普通なのです。

言葉を文字どおりに使っていらっしゃいますか? 辞書をつねに参照なさっていますか?

以上の二つの問いに対する私の答えは、「いいえ」です。そんな素晴らしい記憶力は持ち合わせていないし、辞書を持ち歩くのは不便なので.....。

\*

「それはどういう意味ですか?」、「意味が不明なんですけど」、「それに意味ってありますか?」

そもそも日本語で「意味」という言葉を使うと角が立ちます。日本語の意味には意味以上の意味がありそうです。(英語でも言い方次第ではそうなりますけど。)

意味とは、ある意味で特定の言語におけるローカルな問題なのです。

たとえば、日本語では「人生の意味」と「人生という言葉の意味」では意味が違いますが、そんな二つの意味の違いや、二つの意味のあいだの衝突も角を立たせる原因だと思います。(英語の meaning にもその二つの意味があります。あと、英語では日本語の意味に相当する意味のある sense という語がありますね。ナンセンスのセンスです。他の言語のことは知りません。)

(※なんでこうなるのかというところたとえば意味に複数の意味があって人が混乱するという話ですけどー、一つには、言界(言葉の世界)は減界(分けると増えると減るが同時に起きる世界)であり、それが言界の限界でもあるからです。簡単に言うと、世界を記述するには言葉がつねに足りないのです。かといって、言葉を分けて増やすと一方で足りなくなる=減るものがあり、人は混乱におちいります。人にも言葉にも限りがあるという意味です。)

＊

意味という言葉を使わずに、

「あなたは、そんなことを言っているけど(しているけど)何を言いたいわけ？」

と尋ねられたら、

「あなたの気を引きたいだけです」とか「お金がほしいのです」とか「そこをどいてほしいんだ」とか「疲れているの」とか「機嫌が悪いだけ」とか「ああ、かったるい」とか、思わず本音が出そうですね。

とはいうものの、何を言いたいが不明や不在であったり、言っている本人に意図や本音がなかったりする場合も意外と多いのですが、話が長くなりそうなので、このことについては機会をあらためて書きます。

＊

意味や言いたいことは見えない。見えないものは確認できない。だから、見える文字や数字や記号や映像で代用するしかない。代用しているものを扱っているあいだに、意味や言いたいことを扱っていると錯覚するケースはきわめて多い。それである程度の実務的な処理や作業ができるために、錯覚は見逃される。錯覚を指摘しても、いいことはひとつもない。目に見えない意味を扱おうとすれば必然的に迷宮や迷路に入ることになる。出口は錯覚しかない。というか、心が壊れないために人は錯覚する。

以上述べたことは、意味について考えるさいには、心に留めておいてもいいだろうと私は思います。

＊

歌に戻ります。

個人的には以下のライブの動画が好きです。この歌の入ったアルバムがリリースされた日の映像だそうです。

野外で景色がいいし、コンサートの規模もこれくらいだと親近感を覚えます。

好きなシーンがあるのです。

歌が始まってすぐ 0:52 あたりで、バックの大型スクリーンの向こうを警備の人が左から右へと歩いて行く様子が見えます。ほのぼのとした雰囲気、そこだけリピートして何度見たか知れません。

<https://www.youtube.com/watch?v=S9MGgrNSV0Y>

What do you mean by 'What do you mean?'

(投稿：2023年5月1日 12:13)

#言葉 #音 #音声 #文字 #意味 #無意味 #本音 #刺身のつま #音楽 #洋楽 #ジャスティン・ビーバー #歌詞 #日本語 #英語





言葉は声と顔が命、意味は二の次



＊

\*\* 言葉は声と顔が命、意味は二の次

星野廉

2023年4月29日 07:44 \*\*

今回は前に書いた記事へのツッコミというか、連想でつなぐというか、しりとりみたいにつなげてみます。

以下の見出しの文章「内容は、ないよう」は「連想でつなぐ、壊れる」という記事からの引用です。この文章につなぐ形で記事を書いてみます。

目次

\*\* 内容は、ないよう

言葉は声と顔が命

意味が不明、コンセンサスがない

音と文字は物

意味は見えないし聞こえない

冷遇し礼遇する

言葉に言葉を重ねるのは「ない」に対する根本的な解決策ではない

意味の意味について考える意味

「ない」が「ある」ように見える

意味は「ない」から「つくる」

言葉は伝わっても、意味は伝わらない

言葉の意味というまぼろし、言葉の実体というまぼろし

意味はまちまち

刺身のつまの製造を外部に委託する \*\*

\*\* 内容は、ないよう \*\*

ゲシュタルト、ザイン、デザイン、テーゼ、アウフヘーベン。

ドイツ語をカタカナにするとごちごちした感じがします。厳めしいのです。日本語における漢語に匹敵する物々しさを覚えます。濁音のせいでしょうか。あと、字面も。

シニフィアン、シニフィエ、エクリチュール、パロール。

フランス語をカタカナにするとほわーんとした感じがします。厳めしくはありません。私の印象を正直に言うと泡みたいなのです。鼻に抜けていく鼻母音のせいかもしれません。あと、字面も。

『存在と無』(日) がちがち  
L'Être et le néant (仏) ほわーん  
Being and Nothingness (英) で?  
Das Sein und das Nichts (独) ごちごち  
El ser y la nada (西) さらさら

言葉における発音と綴りの印象は大きいと痛感します。音と字面、ファースト。まるで内容は、ないようです。

【※引用はここまでです。】

\*\* 言葉は声と顔が命\*\*

たしかに言葉においては、発音と見た目が大切です。

言葉は「声・音」と「顔・字面」が命。意味なんて刺身のつまだという気がしてなりません。

なにしろ、人はまず〇△Xという言葉——「声・音」と「顔・字面」——をつくり、次に「〇△Xとは何か？」——その意味(内容)を問う——と、えんえんと思い悩む生き物なのですから。

まさに内容は、ないようです。

いまもそうですよね。「○△Xとは何か？」をめぐって、ああでもないこうでもない、ああだこうだともめています。

「あいつらは○△Xだ」と国のトップが決めて、それに国民も他の国々も付き合わされる形で戦争になっている場合もあります。

暴力を合法的に行使できる権力を握っている人が、「黒いカラスは白いサギだ」と言えば、黒いカラスの意味は白いサギになる。

言葉の意味は、腕力、武力、暴力、権力、要するに力で決まるようです。その次に来るのが、お金と面子でしょうか。

お金をもらうためや失わないために、そしてなによりも自分（たち）の面子をたもつために、人は意味をつくったり意味を決めます。

言葉における「内容は、ないようだ」問題はきわめて深刻なのです。

\*\* 意味が不明、コンセンサスがない \*\*

人はまず○△Xという言葉——「声・音」と「顔・字面」——をつくり、次に「○△Xとは何か？」——その意味（内容）を問う——とえんえんと思ひ悩む生き物である。

無数の○△Xたちがあり、その内容つまり意味をめぐってのすったもんだが繰り返されてきて、いまも繰り返されている。

大昔の○△Xたちについて意味が不明になっているとか忘れていたのならまだいいです。

いまつかわれている○△Xたちについて、同時代人たち、同じ言語を話すはずの人たちのあいだで、コンセンサスがあるようでないようなのです。

たとえば、「正義」という言葉ですが、相手がどういう意味で使っているのかはつねに不明なのです。

辞書なんか当てになりません。議論の最中に辞書を取りだしたら、相手に笑われます。笑われたら、もう負けたようなものです。

なんでこうなっているのでしょうか。

**\*\* 音と文字は物 \*\***

音と文字からなる言葉において、意味が刺身のつま、つまり二の次であるからに他なりません。

では、なんでこうなっているのでしょうか。

意味が刺身のつま状態になっているのは、意味が見えないし、聞こえないし、手で触れることができないものだからとしか考えられません。

\*

音は聞こえます。空気の振動として皮膚で感じる（触れる）こともできます。鼓膜を震わせているから聞こえるのですから。

音は物であると考えられます。

文字は見えます。紙上のインクの染みや（かつての活版印刷された文字は指の先で触れました）、液晶上の画素の集まりみたいなのです（いまは文字は手と指で書くというよりも指で触りながら入力するものです）。

文字も物と見なしてよさそうです。

**\*\* 意味は見えないし聞こえない \*\***

言葉をなりたたせている音は物だから聞こえるし手で触れることができ、文字は物だから見えるし手で触れることができる。このように短絡して考えてみます。

意味はどうでしょう。

意味は見えません。辞書に載っているのは語義であり文字です。見ているのは文字であって、意味ではありません。というか、意味を見たことがありますか。

意味は聞こえません。手で触れることもできません。

だから、意味は刺身のつま状態にされているのにちがいません。

**\*\* 冷遇し礼遇する \*\***

人は見えないものや聞こえないものや手で触れられないものを冷遇します。苦手だからです。知覚できないもの、知覚しにくいものに対して「んもー、知らない！」と業を煮やしているのです。

冷遇する一方で礼遇もします。見えないし聞こえないけど、言葉は意味なしで成立しないし、だいいちつかえないからに他なりません。

しぶしぶ「お意味さま」を礼遇し、「お意味さま」の確認をするわけですが、その作業の結果であり集大成が、たとえば法典、つまり六法全書や判例集のたぐいであり、契約書や念書や条約なのでしょう。辞書や経典や聖典や法則や公式もそうです。

とはいえ、これらは全部が文字です。目に見えます。音読すれば聞こえます。要するに、意味は見えないし聞こえないという現実が変わっていないのです。

見えない、聞こえない、手で触れることができないものを固定することができますか？  
文字という形で記して固定（複製・拡散・保存）したところで、それは意味を固定したことにはなりません。

言葉に言葉を重ねただけです。文字に文字を重ねただけです。

というわけで、人は

まず○△Xという言葉をつくり、次に「○△Xとは何か？」とえんえんと思い悩む生き物である。

という状態から逃れることはできないもようです。人にとってはこの状態が常態なのです。言葉に「内容はないよう」という鉄則はかなりしぶといようです。

\*\* 言葉に言葉を重ねるのは「ない」に対する根本的な解決策ではない \*\*

なんでこうなっているのでしょうか。

辞書や法典や経典や聖典や法則や公式をつくったり、議論や約束や契約や知識の更新をしても、言葉に言葉を重ねる（具体的には文字に文字を重ねる）、つまりある言葉やフレーズを言い換えたり置き換えたり変奏しているだけであって（いまやったのがそうです）、言葉に「内容はないよう」の根本的な解決策となっていないからでしょう。

ない袖は振れぬ、ですね。

「ない」に「ない」をどんなに掛けても賭けても欠けても架けても懸けても書けても、「ない」は「ある」にはなら「ない」ようです。いまやってみたいにです。

もしそうであるのなら、みんなで考えてみませんか。難しい問題だからと、機械に委託するのではなく。

\*\* 意味の意味について考える意味 \*\*



見えない、聞こえない、手で触れない意味を相手にするのはややこしいし難しいようです。

以下は、参考までに。

意味論 (いみろん) とは? 意味や使い方 - コトバンク

最新 心理学事典 - 意味論の用語解説 - 言語を科学的に研究するための言語学的な区分として、伝統的に単語以下の形態素など

[kotobank.jp](http://kotobank.jp)

意味論 - Wikipedia

[ja.wikipedia.org](http://ja.wikipedia.org)

河出文庫 意味の論理学 〈上〉

ルイス・キャロルからストア派へ、パラドックスの考察にはじまり、意味と無意味、表面と深層、アイオンとクロノス、そして「出来

[www.kinokuniya.co.jp](http://www.kinokuniya.co.jp)

哲学の原点を転覆する試み ジル・ドゥルーズ「意味の論理学」 | 好書好日

大澤真幸が読むドゥルーズは20世紀フランスの哲学者。「ポスト構造主義」の代表者だ。本書は34の「章 (セリー)」から成り、

[book.asahi.com](http://book.asahi.com)

角川文庫 不思議の国のアリス

ある昼下がり、アリスが土手で遊んでいるとチョッキを着た白ウサギが時計を取り出しながら、急ぎ足に通り過ぎ、生き垣の下の穴にび

[www.kinokuniya.co.jp](http://www.kinokuniya.co.jp)

詳注アリス 完全決定版

キャロルの手紙や日記、歴史資料や学問的解釈etc...を駆使して付けられた、300以上の注釈を収録。これまで世界中の画家が描い

[www.kinokuniya.co.jp](http://www.kinokuniya.co.jp)

アリス狩り (新版)

夢と現実、非論理と論理、狂気と正気が交錯するノンセンスの王国一。そのノンセンスの宇宙を彷徨う美少女アリスの受難を、投影され

[www.kinokuniya.co.jp](http://www.kinokuniya.co.jp)

\*\*「ない」が「ある」ように見える\*\*

話を戻します。

「ない」に「ない」をどんなに掛けても賭けても欠けても架けても懸けても書けても、「ない」は「ある」にはなら「ない」ようです。いまやってみたいにです。

\*

「ない」は「ある」にはなら「ない」ようですが、「ある」ようには見えます。

面（具象・そのもの・そこにあるもの）に立体（抽象・その向こうにあるもの・そこにはないもの）を見てしまうのです。これは「ない」を「ある」ように見ていることに他なりません。

人がのっぺらぼうな面——意味が不在である面（無意味な面ではなく）——に、顔や模様や奥行きや深さや遠近や背後を見てしまうのは、心が壊れないためなのです。

意味は「そこにある」のではなく、「人がそこにつくる」というのが適切な言い方だと私は思います。「意味がある」という言い方は無意味＝ナンセンスだという意味です。

\*\* 意味は「ない」から「つくる」\*\*

要するに、意味はないのです。無意味という意味ではありません。無意味には意味があります。どの辞書にも無意味の意味が語義として書いてあります。

「意味は不在なのだ」と苦しまぎれにレトリックを弄するしかなさそうです。

「意味はない」を、「意味はその時々の人都合でつくるものだ」と言い換えることができる気もします。

つくる、こしらえる、でっちあげる、捏造する——どう言っても大差はありません。

＊

例を挙げます。

この国に数々ある、そしてこれまでに数々あった政党名を思いうかべてみてください。

名（音と文字）は体（内容・意味）を表わしているでしょうか。口あたりのいい、また見映えのいい美辞麗句にだまされてはならない、という生きた証拠であり教訓が政党名ではないでしょうか。

私なんか「えっ、どこが？」と思う名称ばかりです。与野党、大小、新旧、問わずです。

＊

他の例を挙げます。

「真摯に」が「テキトーに」であったり、「スピード感をもって」が「のろのろと」であったりするのは、みなさんをご承知のとおりです。「分かった」が「分からない」、「承知しました」が「知るもんか」だなんて、当たり前ですね。

ある場面では、「だめよ、だめよ」が「いいわ、いいわ」、「ぜったいにいや」が「もっとももっと」だったりもします。政治の世界がそうです。ビジネスの世界もそうでしょう。

＊

民主主義、謙虚に、真摯に、丁寧な、誠実に、良心に恥じない……

〇〇を最優先する、守る、尊重する、みなさまの〇〇……

正義、公明正大、平等、倫理的、道徳的、中立……

絶賛された、評価の高い、今世紀最大の、誰もが泣いた、感動的、世界で最も.....

論理的、普遍的、客観的、真理.....

〇〇らしい、〇〇らしく、〇〇であるなら、本来あるべき〇〇の姿.....

美しい、本当の、本物の、真の、本来の、理想的な、正しい.....

以上のような言葉が聞こえたり目についたりしますが、その意味はつねに不明なので  
す。意味が不明ということは、どんな意味にもなりうるという意味です。

時と場合によってころころ変わります。さきほど述べたように、「だめよ、だめよ」が  
「いいわ、いいわ」にもなります。「平和的な解決」が「武力による侵攻」であっても不思議  
はありません。

\*\* 言葉は伝わっても、意味は伝わらない \*\*

言葉は聞こえるし見えますが、意味は見えないし聞こえないからこうなるのです。伝  
わりもしないでしょう。

言葉は伝わっても、こちらの意味とあちらの意味が、何かのかたちで必ずずれるとい  
う意味です。

たとえば、日常生活、学校、仕事、病院、交友、遊びなどで、言葉をつかっていて意味  
が伝わったという感触をどれだけ得ているのでしょうか。時と場合によるし、程度問題で  
しょうが、ちゃんと伝わっていますか？

その意味で、「言葉は伝わる」とか「言葉は意思伝達的手段である」というのは、「意  
味が（なかなか）伝わらない」という深刻な現状を無視した脳天気な美辞麗句であると  
か、片手落ちの不正確な言い方であると言えそうです。

そうした言い回しがまかり通っているのですから、つまりきわめて大きな存在であるはずの意味が考慮されていないのですから、意味がないがしろにされているとか、意味が刺身のつまにされている証左とも言えます。

誇張ではありません。意味が伝わっていないことで、戦争が起きたり、そこまで行かない争いや、事故や事件や犯罪や問題が起きたりしているじゃありませんか。新聞を読んでもください。ニュースを見てください。

もし私が意味だったら、腹を立てますよ、きっと。人は意味にリベンジされているのではないかと妄想しそうになります。

「私のことをちゃんと見てくれなきゃ、いや！」という感じ。

ちゃんと見てやりたいのですが、意味さんは見えないのですよね。たしかに、ややこしい.....。

もっと気に掛けてやりましょうよ。「面倒くさいやつだ」と避けないで。

\*\* 言葉の意味というまぼろし、言葉の実体というまぼろし \*\*

話を少しずらします。

「言葉の意味」というまぼろし——意味は見えないし聞こえないし「ない」のですからまぼろしに他なりません——をちょっとずらして、「言葉の実体」というまぼろしについて考えてみます。

言葉（音と文字）と実体（まぼろし）とは関係がない。

そう言えそうです。

\*

さらに話を少しずらします。

まず前提を確認します。

人はまず○△Xという言葉——声・音と顔・字面のことで——をつくり、次に「○△Xとは何か？」——その意味（内容）を問うのです——とえんえんと思い悩む生き物である。これが前提です。

そもそも言葉に実体があるとは夢にも思っていない私ですが、実体をその言葉が指し示す事物くらいの意味で考えてみましょう。

名付ける、名指す、AをBと呼ぶ——こうした人間の習慣と実体とは関係がない。そもそも実体という言葉に実体がないから。

そう言えそうです。

話を戻します。

\*\* 意味はまちまち \*\*

繰り返します。

意味は「ある」のではなく、「つくる」ものなのです。意味は「ない」から「つくる」という意味です。

誰が意味を「つくる」のかと言えば、個人であったり、特定の集団が「つくる」と考えられます。

しかも、それぞれが自分の勝手にまちまちにつくっているようです。

意味の意味はまちまちだという意味です。コンセンサスがないのです。辞書の語義は建前です。

辞書の語義どおりに話したり書いたりするほど、人は機械——機械はぶれないし疲れないし誤っても謝りません（ぶれたり疲れたり謝るようにプログラムすれば別ですけど）

——ではありません。

\*\* 刺身のつまの製造を外部に委託する \*\*

これからは、ぶれないし疲れないし誤っても謝らない機械や AI も意味を「つくる」にちがいありません。もうそうなっているのかもしれない。

人は考えることまで機械や AI に委託しはじめたようですから、機械や AI が意味をつくるのは妄想ではないでしょう。もうそうかもしれない。

作文はもちろんのこと、これからは思考と判断をはじめ、刺身のつま、つまり意味の製造も外部に委託することになりそうです。そうなれば、晴れて心置きなく思考停止と判断停止に邁進し、有意義に日を送ることができるでしょう。

妄想でしょうか。もうそうかも。

もし、もうそうであるのなら、みんなで考えてみませんか。機械に委託するのではなく。

#言葉 #音 #音声 #文字 #意味 #無意味 #刺身のつま #機械 #AI #委託





心が壊れないために何かに何かを見てしまう



＊

\*\* 心が壊れないために何かに何かを見てしまう

星野廉

2023年4月21日 07:51 \*\*

瞳と鏡で私が連想するのは、膜と面です。

網膜、鏡面。瞳や鏡を覗きこんだとき、見える姿は、膜や面に映った像・影なのでしょう。

薄い膜と薄い面に映っているのですから、姿や像や影も薄いはずですが。それなのに、奥行きや深さや遠さや隔たりを感じるのは、こしらえているからではないでしょうか。

(拙文「鏡「面」画「面」顔「面」」より)

目次

\*\* 目がドラマや物語の芽を生む

大きいと小さいがドラマや物語を語り始める

平面上で、奥深さ、深さ、背後、背景というドラマと物語が浮かぶ

思わず「深い」とか「奥行きが感じられる」と言ってしまう

何かに何かを見て、気持ちを静める \*\*

\*\* 目がドラマや物語の芽を生む \*\*

何かに何かを見る——。前者の「何か」と後者の「何か」は違います。こうなるのには何か理由があるのではないのでしょうか。

壁の模様でも、天井の染みでも、空の雲でもかまいません。人は何かに何かを見ます。見えるというほうが適切かもしれません。見えてしまうのです。いや、むしろ「現れる」というべきでしょうか。

● ●

上の二点を見て顔を見てしまう人もいます。そうでない人もいます。「二、2、II」という数（すう・かず）を思いうかべる人もいます。人それぞれです。

もし、二点が目に見えて、そこから目が見えることから顔を見てしまうとすれば、誰かに似ているとか、あるキャラクターに似ているとか、ある人形に似ているという具合に、イメージが進んだり増えたりしそうです。

連想した顔が記憶を呼びさましたり、その顔がなんらかの光景へと発展することもありそうです。

連想が連想を呼ぶ。連なる。移り変わる。動きが生まれる。関係性が生じる。

ドラマや物語の芽が生まれる。目が芽を生む。そんな気がします。

\*\* 大きいと小さいがドラマや物語を語り始める \*\*

● ●

今度は黒い点が並んでいます。大きさの違いを見て、大小をイメージする人がいるかもしれません。大きい、小さい、ですね。

重い、軽い。親と子。私とあなた。私とお母さん。私とあの人。男と女。おとなと子ども。人と犬。人とペット。この国とあの国。

遠近。左右。太陽と地球。地球と月。陰陽。

「仲がいい」。「にらみ合っている」。「一方が叱られて縮み上がっている」。「ウィンクした目だ」。「トンネルの出口と入口かな？」

いろいろなイメージを呼びさましそうです。人それぞれです。

「大きい」と「小さい」という差が、ドラマや物語を始動させる。そんな気がします。

\*\* 平面上で、奥深さ、深さ、背後、背景というドラマと物語が浮かぶ \*\*



上の ● と ・ をご覧ください。●が手前に、・が後ろに見えるかもしれません。人それぞれですけど、そう見えるという前提で話を進めます。

\*

平面にある大きさの異なる二点を、奥行きとか遠近に置き換えているわけです。奥行きとは、奥深さ、深さ、背後、背景、隠れているもの、隠されたもの、というふうに連想を呼びさます気がします。

向こうから追いかけて来る、トンネル、望遠鏡、顕微鏡、衍、エコー、

太陽と惑星、進化、だんだん大きくなっていく、だんだん小さくなっていく、遠くなっていく、近くなっていく

向こうにあるのは何だろう、誰だろう、逃げていく、追いかけてよう

「おーい!」「何だーい?」「待ってくれ」、「さようなら」ー。子を見送る親、「元気でね」、いつまでも遠くで見ている。

\*

ストーリーを感じませんか? 声が聞こえてきませんか?

イメージが膨らむとも言えるでしょう。話がだんだんズレていくとか、話が大きくなるとか、そんな言い方も可能でしょう。

要するに、思いやイメージが連続して置き換わっていくわけです。

たぶん、コマ送りやバトンを手渡すように、つぎつぎ＝継ぎ継ぎ＝接ぎ接ぎ＝注ぎ注ぎ＝告ぎ告ぎ、と連なっていくのでしょう。すると、筋書き、つまり物語とドラマが生まれます。

映画や漫画やアニメのコマ送りという原理が、これでしょう。

(私は詳しくないのですが、音楽も、余韻や予感や必然性や筋をはらんだ音が、つぎつぎ＝継ぎ継ぎ＝接ぎ接ぎ＝注ぎ注ぎ＝告ぎ告ぎと連なっていく気がします。)

平面上で、奥深さ、深さ、背後、背景というドラマと物語が浮かんでくるようです。平面が立体化されるとも言えるでしょう。

\*\* 思わず「深い」とか「奥行きが感じられる」と言ってしまう \*\*

“水が来た。”

三島由紀夫『文章読本』「第三章小説の文章」より

「これはね、森鷗外作『寒山拾得』から引用したもので、三島由紀夫の『文章読本』で激賞されている文なんだ」

「そうかそうか、さすがに名文だね。短いけど、すごい。なんというか、こう、気品が漂ってくるのよね」、「やっぱりね。違いますよ。短いけど、そんじょそこの文章とはぜんぜん違う。なんというか、こう、文体が違います」、「分かります。そんな気がしたんだよな。言葉に独特のたたずまいがあるでしょ？　なんというか、こう、匂い立つ教養を感じるんだ」

「なるほど、深いねえ。短いけど奥行きが感じられるんだ」

\*

「ねえねえ、お父さん、お隣の〇〇くんが作文でこんな文を書いたのよ」

「なにに。『水が来た。』？ ふーん。やっぱり、小学生の作文だね。薄っぺらいし浅いんだよ」

＊

「ねえねえ、お義父さん、うちの〇〇ちゃんが作文でこんな文を書いたのよ」

「どれどれ。『水が来た。』？ おおお！ あの子は天才だ！ なんか、こう深いものが感じられる」

＊

『水が来た。』は文字からなる文字列でありセンテンスであり、日本語の表記を学んだ者であれば誰もが書き写せるし、そこそそ学んだ人がなんとか書き写すことも可能でしょう。もちろん機械に書かせることもできるし、AIが書いた文であってもぜんぜんおかしくありません。

文字には複製しても「同じ」どころかほぼ「同一」であるという驚くべき性質があります。ところが、同じ文字列の文章であっても、それを純粋にそのものとして読むことは難しく、人は必ずその文字列に何らかの印象とイメージをいだいてしまいます。

これは複製として鑑賞されるのが一般的である、絵や写真や動画や楽曲であってもそうでしょう。

誰が書いたのか、誰が撮ったのか、誰がつくったのか、誰が歌った、あるいは演奏したのかという知識で、印象が異なるのです。

純粋な鑑賞という体験（そんなものがあればの話ですけど）ではなく、教わった知識（作品の背景についての勉強を重視する人もいるでしょう）によって印象や感想が左右される点が大切だと思います。

「〇〇っぽい」や「いかにも〇〇らしい」や「〇〇のような」や「いかにも〇〇みた

い」のように。

＊

作品を鑑賞して評価を下したというよりも、たいていは知識として得た情報が作品の印象をつくる。それだけでなく、得た情報が間違いだったと言われると、手のひらを返したように印象が変わるというわけです。

「そうかあ、やっぱり〇〇だね」や「なるほど、さすがに〇〇らしい」のように。この場合、〇〇には機械や AI も、もちろん入ります。

人が AI の作品を評価するのはきわめて難しいでしょう。人類初の体験で慣れていないからです。冷静な判断ができないとも言えます。

人は何かに何かを見てしまう。そのものを見ることはできない。自分が知っているもの（知っていると思っているもの）、自分の見たいもの、自分にとって都合のいいもの、自分にとって快であるものを見てしまう。

＊

「深い」は「美しい」と並ぶ最高の褒め言葉です。私みたいなへそ曲がりでも、自分の書いたものが「深い」とか「美しい」と言われれば、小躍りして喜びます。

人は、薄い紙や画面の上のさらに薄いもの——たとえば言葉や映像——に、深さや奥行きを見てしまうのです。これは自分を観察して得た実感です。

また、たとえ見てしまわなくても、その時の乗りで「深い」とか「奥行きが感じられる」と思わず言うってしまうのです。それが人です。

\*\* 何かに何かを見て、気持ちを静める \*\*



さきほどの二点をもう一度見てみましょう。

・



私なんか、遠くで見守っている存在と見守られている存在の関係を勝手に想像して涙ぐみそうになりますが、遠くからじっと監視されているイメージを呼び覚まされて身震いする人がいても不思議ではありません。

＊

いや、そんなふうにはぜんぜん見えないけど。純粹に黒い丸と黒い点にしか見えない。

いや、黒い丸と黒い点には見えないけど。画素の集まりにしか見えない。

以上のような意見や感想があっても私は驚きません。人は印象の世界に住んでいるからです。印象やイメージは、人それぞれです。

＊

何かに何かを見る。見てしまう。

見慣れない何かに自分の知っている（馴染みの）何かを見る。見たいもの（自分に都合のいいもの）を見る。見てしまう。

どうして、見てしまうのでしょうか。

心が壊れないためにそうしているように私には思えてなりません。自分を観察した結果、そのように思います。

見知らぬ「何か」、初めて見る「何か」ほど不気味であったり、恐ろしいものはありません。名前がないからです。そこにドラマや物語がないからです。

たとえば、その名が「怪物」や「モンスター」であっても、名前がない「何か」よりは  
ずっと不気味ではないし、怖くもないです。

\*

面（具象・そのもの・そこにあるもの）に立体（抽象・その向こうにあるもの・そこに  
ないもの）を見てしまうとも言えます。

人がのっぺらぼうな面——意味が不在である面（無意味な面ではなく）——に、顔や  
模様や奥行きや深さや遠近や背後を見てしまうのは、心が壊れないためなのです。

意味は「そこにある」のではなく、「人がそこにつくる」というのが適切な言い方だと  
私は思います。「意味がある」という言い方は無意味＝ナンセンスだという意味です。

上で挙げた例で言うと、単なる点、単なる画素の集まりほど、人の心を壊すほど不気  
味なものはないと言えるかもしれません。

「単なる○○」「○○だけ」の、○○には名前もなく、意味が不在でドラマも物語もな  
いからです。

逆に言うと、名前と意味とドラマと物語が、人をいい意味でも悪い意味でも「深淵」  
——日常空間にぽっかり空いたブラックホールのような穴——から守るのです。

\*

深い

深く

深さ

深み

深い淵

深淵

ブラックホールような穴

ニーチェの言ったあの深淵

私には下に行くほど、深く感じられます。

語呂のよさや字面に左右されて、より「深い」と感じたり（つまり、上で述べた「水が来た。」のように印象とその時の乗りで「深い」と感じているだけ）、自分にとってお馴染みの安心できるイメージに置き換えて満足しているのでしょう。

それが人です。

きっと深い穴を直視して壊れたくないのです。

\*

話は飛びますが、上で挙げた文字列を、ニュートラルな情報のデータとしてフラットに処理するのが、機械であり AI なのでしょう。機械や AI にとっては、深さも深みも奥行きもありません。

機械や AI は深い穴を直視して壊れることはありません。物理的に壊さないかぎり壊れないのです。

深さや深みや奥行きとは無縁の機械や AI が書いたものに、深さや深みや奥行きを見てしまうのが人です。文字だけでなく、映像や音楽でも同じでしょう。

それが人です。

# ドラマ # 物語 # 意味 # 無意味 # 連想 # イメージ # 印象 # 森鷗外 # 三島由紀夫 # 文章 # 平面 # 立体



薄いけど厚いというギャグは猫に通じるのか



＊

\*\* 薄いけど厚いというギャグは猫に通じるのか

星野廉

2023年4月20日 07:40 \*\*

瞳と鏡で私が連想するのは、膜と面です。

網膜、鏡面。瞳や鏡を覗きこんだとき、見える姿は、膜や面に映った像・影なのでしょう。

薄い膜と薄い面に映っているのですから、姿や像や影も薄いはずですが、それなのに、奥行きや深さや遠さや隔たりを感じるのは、こしらえているからではないでしょうか。

(拙文「鏡「面」画「面」顔「面」」より)

目次

\*\* 言の葉

ぺらぺらだらけ

ぺらぺらはうつる

言の葉を聞く

言の葉を書く、写す、映す

言の葉を見る・読む

言の葉を写す、言の葉を移す

ぺらぺらしたもの同士が重なる

薄いぺらぺらした網（ネット）にうつる、ぺらぺらしたものたち

ぺらぺらというイメージの韻

人は印象の世界の住人 \*\*

\*\* 言の葉 \*\*

「言の葉」という言い方の「葉」ですが、これも私には薄い面であり膜、つまりぺらぺらに感じられます。

葉には端や刃や羽とのイメージの韻——「は」という音だけでなく——も感じます。端っこ、鋼を薄くのばした刃、薄く軽い羽という感じ。形も似ている気がします。

学問的な関連については知りません。あくまでも個人的なイメージの連想です。

さらに「言の葉」は、ヨーロッパの「言語」における「舌」のぺらぺらとイメージの韻を踏んでいる感じがします。英語でいえば、language と tongue です。これは語源でつながっています。

やっぱり、「言葉・言の葉・言語」はぺらぺら。そんな気がしてきました。

\*\* ぺらぺらだらけ \*\*

いま私は薄い液晶のスクリーン上に表示されている自分の入力した文字を見つめています。視覚的に厚みも深みも感じられない、つまり立体感に欠ける文字です。

ということは、ひょっとすると文字ってぺらぺらなのではないでしょうか。これまで考えたことがありませんでした。

ぺらぺら（紙や画面）にのっかかったり、うつったり、染みついたり、こびりついたり、貼りついたりしているのですから、文字はぺらぺらなはずです。

私は言葉を広く取っています。話し言葉（音声）と書き言葉（文字）だけでなく、視覚言語と呼ばれることもある表情と身振りも言葉と考えて生活しています。

\*

で、思ったのですが、言葉つながりの事物や現象はぺらぺらだらけではないでしょうか。

舌もぺらぺら。発したとたんに消える声の存在感も薄くてぺらぺら。空気の振動である声をとらえる鼓膜もぺらぺら。話し言葉のことです。



手のひらもぺらぺら。手を使って書いたり入力する文字もぺらぺら。紙もぺらぺら。液晶画面もぺらぺら。

顔の皮膚を舞台とした表情もぺらぺら。

ぺらぺらとした網膜に映ってたちまち消える身振りもぺらぺら。

めちゃくちゃこじつけて、ごめんなさい。こんなことを書いている私もぺらぺら。さらに言うなら、へらへらでへろへろ。べろんべろんでないだけ、まし。

\*\* ペらぺらはうつる \*\*

言葉は「うつる、写る、映る、移る」と親和性があるようですが、ぺらぺらは「うつる」と親和性がある、とほぼ同義ではないでしょうか。

ぺらぺらな言葉から意味とイメージが立ちあらわれる。というか、人はぺらぺらに意味やイメージを取る。

意味自体、そしてイメージ自体は実体を欠いている。実体を欠いているのだから、その存在感はきわめて薄い。つまり、意味とイメージもぺらぺら。

ぺらぺら（言葉）がぺらぺら（意味）を生んでいる。そうとしか思えません。

\*

人はぺらぺらに取り憑かれているようです。

ぺらぺらをせっせとつくり、ぺらぺらを写して増やし拡散し保存し継承し、ぺらぺらに見入り、さらにぺらぺらをつくる……。これはスマホやパソコンをつかって、私たちがネット上でやっていることです。

ぺらぺら（画面）にはぺらぺらな文字や絵がうつっていて、人はそこに厚かったり深かったりする「何か」を見ているようです。

さもなければ、飽きもせずにこれだけぺらぺらに執着するわけがありません。なにしろ、人は忙しいしせっかちな生き物です。

\*\* 言の葉を聞く \*\*

震える、届く、震える、聞く。

ぺらぺらした舌が放した（話した）、ぺらぺらした声が、ひらひらと空気を震わせながら、ぺらぺらした耳たぶに届き、その奥にあるぺらぺらした鼓膜を震わせる。

\*\* 言の葉を書く、写す、映す \*\*

話す、放す、映す、写す、書く。

ぺらぺらした舌が放した（話した）、ぺらぺらした声が、今度はぺらぺらした文字という影に落とされ、その影がぺらぺらした紙に映る、写る。つまり書かれる。

\*\* 言の葉を見る・読む \*\*

映る、見る、眺める、読む。

ぺらぺらした紙に映った（書かれた）文字が、ぺらぺらしたまぶたの奥にある、ぺらぺらした網膜に映る。つまり、見る、眺める、読む。

ひょっとすると、見られた、あるいは読まれたときには、ぺらぺらした網膜に映る影が、ぺらぺらした心のスクリーンに映るのかもしれない。

心のスクリーンに映るのかもしれない意味やイメージや物語は、残念ながら目には見

えない。

**\*\* 言の葉を写す、言の葉を移す \*\***

写す、移す、掻く、書く、染みる、刻まれる、印刷する。

ぺらぺらした紙に写った、移った、掻かれた、書かれた文字（インクの染み）が、別のぺらぺらした紙に写される。筆写や印刷。

\*

移す、広げる、配布する。

ぺらぺらした紙に写った（書かれた）文字（インクの染み）が、紙にのったまま、あちこちに移される。配布。

\*

写す、書く、染みる、移る、つながる、かさなる、翻訳する。

ぺらぺらした紙に写った（書かれた）文字（インクの染み）が、別のぺらぺらした言の葉の文字に移されることもある。翻訳。

**\*\* ぺらぺらしたもの同士が重なる \*\***

英語と日本語に話をしぼりますが、単語、フレーズ、センテンス、文章、あるいは作品のレベルで、対訳でくらべた場合に、両者は別物（同一ではないという感じ）であり、「似ている」でも「同じ」でも「違う（異なる）」でもなく、強いて言えば「つながっている」と感じます。

翻訳は「つながっている」とか「かさなっている」というのが私の印象です。

ぺらぺらした言葉同士が重なるのが翻訳ではないでしょうか。一方を見ると、もう一方が透けて見えるのです。

＊

ほんやく（translation）は翻訳とも反訳（速記なんかでは「ほんやく」という作業もあるようです）とも書くみたいですが、「ひるがえす・翻す」が見えて、そのイメージにわくわくします。

ひらりとひっくり返すとか裏返すという感じです。

ぺらぺらをひらりとひっくり返しても、やっぱりぺらぺら。

\*\* 薄いぺらぺらした網（ネット）にうつる、ぺらぺらしたものたち \*\*

投稿する＝複製する＝拡散する＝保存する、映す、写す、移す。

デジタル化された情報（信号）が、ぺらぺらしたスクリーンに視覚化されて映る文字（画素の集まり）は、同時に、別のおびただしい数の端末のぺらぺらしたスクリーンに視覚化されて映る。

ネット上では投稿、複製、拡散、保存がほぼ同時に起きます。

薄いぺらぺらした網（ネット）で、うつる、映る、写る、移る、ぺらぺらしたものたち。それら（文字・映像・音声）は広い意味での言葉だと言えそうです。

\*\* ぺらぺらというイメージの韻 \*\*

以上、ぺらぺらという個人的なイメージを感じる、言の葉、舌、まぶた、耳たぶ、目の網膜、耳の鼓膜、紙、スクリーン、ネット・網、声、文字といったものたちを、ぺらぺらという言葉に掛ける形で、遊んでみました。

いや、むしろ遊んでもらったという気がします。あくまでも戯れです。ぶっちゃけた話がこじつけです。

ぺらぺらという動き（これが動きであればですが）やイメージのシンクロという言い方もできるかもしれません。

この「似ている」のシンクロを、私はイメージの韻と呼んでいます。「似ている」だから印象であって、関係あるか（似ている以外につながりがあるか）ないかは関係ありません。

\*\* 人は印象の世界の住人 \*\*

ところで、言の葉、舌、まぶた、耳たぶ、目の網膜、耳の鼓膜、紙、スクリーン、ネット・網、声、文字は似ていますか？

いま挙げたものには、見えないものがありますが、見たときに似ていると感じますか？

でも、イメージの韻でつなげると似ているような気がしてきます。少なくとも、私にはそうです。

\*

猫という言葉と猫という生き物は似ていませんが、言葉を使っている分には、似ていないという感覚はないと思います。

たぶん、猫という言葉と猫という生き物は似ているのです。いや、きっと同じなのです。人にとっては。

だから、「言葉と事物とは違うんだよ」なんて当り前のことを書いて、わざわざ念を押したフランス人がいたのでしょうか。

ミシェル・フーコー、渡辺一民／訳、佐々木明／訳『言葉と物〈新装版〉—人文科学の考古学—』| 新潮社

ベラスケスの名画「侍女たち」は、古典主義時代における人間の不在を表現している。実は「人間」という存在は近代に登場したもので

www.shinchosha.co.jp

河出文庫意味の論理学〈上〉

ルイス・キャロルからストア派へ、パラドックスの考察にはじまり、意味と無意味、表面と深層、アイオンとクロノス、そして「出来

www.kinokuniya.co.jp

\*

似ているって不思議です。不思議なのは、たぶん人にとって当たり前すぎるからでしょう。人にとって謎（分からないとか知りえないという予感）とは不思議という感覚なのかもしれません。

人は似ているを基本とする印象の世界に生きている。そんな気がしてなりません。

猫を見ていると、この「似ている」世界とはまったく無縁の世界に住んでいるように見えます。

世界がべらべらに満ち満ちている。薄いは厚いでもある。そんなギャグは、ねこちゃんには通じそうもありません。

薄いものに熱中する人に対して、猫はひたすら邪魔をするだけです。私はそんな猫がうらやましくてたまりません。

猫はべらべらの言葉と立体で奥行きのある事物を混同していないもようです。

#猫 # 言葉 # 言の葉 # 言語 # 文字 # 音声# 表情 # 身振り # 画面 # 膜 # 印刷 # インターネット # 複製 # 鼓膜 # 網膜# 紙

連想でつなく、たそがれ、 twilight





＊

\*\* 連想でつなぐ、たそがれ、twilight

星野廉

2023年4月7日 08:05 \*\*

目次

\*\* たそがれ

たそがれ、twilight

二つの世界をまたぐ

二重、ふたえ、まぶた

目は心の窓

オノマトペが増すとすんなり入ってくる

音の韻、字の韻、意味の韻、イメージの韻

韻にインしてみたい \*\*

\*\* たそがれ \*\*

たそがれ、誰そ彼、薄暗い夕方に「だれだ、あれは」

かわたれ、彼は誰、薄暗い明け方（または夕方）に「あれは、だれだ」

かたわれ、割れた片方、partner、分かち合う人

辞書を読んでいると、こういうことが書いてあります。私には本を読んでいるよりもおもしろかったりします。

読むと言うよりも眺めるのです。内容がないようだけに、ぼーっとしてきます。

薄暗い視界と薄れていく意識のもとで、「あれは何？」「あれは誰？」「ここはどこ？」  
「いまはいつなの？」と問うわけです。

問うのですから、相手がいるか、相手がいる心もちになっているのでしょう。人はひとりでもふたりになれます。

言葉が相方です。言葉を意識したとき、人は二人に分れます。もちろん、心や気持ちや意識や魂の話です。物理的にはたぶん一人のままです。

\*

・two (二)、twig (小枝・二股の枝)、twin (ツイン)、twice (二回)、twist (ツイスト・ひねる)、twinkle (またたく・まばたく・きらきら)  
・wink (ウィンク・まばたく・またたく・きらきら)

\*\* たそがれ、twilight \*\*

まばたく、まぶたが降りたり上がったりする。目蓋が開閉する動きと、星がきらきらちかちかまたたく動きが同期する。

共振する。シンクロする。「似ている」はシンクロなのかもしれません。

twinkle、きらきら、きらめく、めばたく、ちかちか  
twilight、たそがれる、黄昏れる、黄昏時

たそがれ、「誰そ彼」、夕闇が迫ってきて「あれは誰だ」というふうに目がしょぼしょぼしてくることから来たらしいです。目だけでなく意識もでしょう。

薄明、はくめい、薄明かり  
薄明視、暗所視

twilight は明かりが二つある (two lights) ——それでは明るすぎです——というより、明かりが二分の一になるほど薄暗くなるらしいのです。

「夜と朝のあいだに」を連想しますが、そうなると「たそがれ」よりも「かわたれ」なのでしょうが、語呂的には「たそがれ」を選びたいところです。

\*\* 二つの世界をまたぐ \*\*

たそがれ、かわたれ、twilight

夜と朝のあいだに、昼と夜のあいだに——二つの世界のあいだにいる人。

(動画省略)

夜と朝のあいだに 歌：ピーター（池畑慎之介）

作詞：なかにし礼、作曲：村井邦彦

\*

夜と朝のあいだに、昼と夜のあいだに——二つの世界のあいだにある時空。

二つの時空をまたぐ、二つの時と場が重なる、二つの要素を合わせ持つ。こうしたイメージは人をぞくぞくさせます。

トワイライト・ゾーン（The Twilight Zone）は絶妙はネーミングだと思います。

トワイライトゾーン - Wikipedia

[ja.wikipedia.org](http://ja.wikipedia.org)

これが元祖のテレビ番組のようですが、最初は日本では「ミステリーゾーン」と訳されていたとのことです。

(動画省略)

以下は後発のシリーズのようです。

(動画省略)

\*\* 二重、ふたえ、まぶた \*\*

たそがれ、黄昏、「誰そ彼」、「あれは誰だ」——しょぼしょぼしてきた目がかすんで二

重にでも見えるのでしょうか。

二重、ダブる、ダブル、double  
にじゅう、ふたえ、二重まぶた

まばたく、またたく、きらきらひかる

\*

まばたきや視線は意思表示や意思疎通の手段になります。言葉を発することができない人やできなくなった人には大切な手段となるようです。

誰もにとっても他人事ではありませんが、いまは広義のテクノロジーや工学の進歩が助けてくれるのですね。

まさに目は心の窓です。

\*\* 目は心の窓 \*\*

眼は心の窓  
眼・め・目・まど・窓

気になったので辞書（広辞苑）で「まど」を調べてみました。

”窓・窗・牕・牖  
「目門」または「間戸」の意か”

なるほど。イメージが膨らみます。漢字の門構えが気になります。

門、間、関、開、閉

目は、外と内との「かど・ふち・へり・きわ」なのですね。うちとそとがかかわる「戸」とか「とぼくち」——帳・帷（とぼり）や戸張りも連想しますが——というイメージでしょうか。

戸、つまり蓋（ふた）があって、開いたり閉まったりする。

まぶた・瞼・目蓋、まばたく・瞬く、またたく

\*

- ・twinkle（きらきら）、twin（ツイン・ふたご）
- ・wink（ウィンク・ぱちぱち・まばたく）、wrinkle（リンクル・皺・ひだひだ・襞・しわしわ）

\*\* オノマトペが増すとすんなり入ってくる \*\*

きらきら、ぱちぱち、ひだひだ、しわしわ——同音を繰り返すことで、オノマトペ感がいや増します。

きらり、ぱちり、ひだ、しわ——これだけでもいいようなものですが、繰り返すことで反復される動きが出るし、オノマトペが増すことでしっくりと、頭ではなく体に入ってくる気がします。

オノマトペはすっと入ってきます。

音や文字が「何かに」「似ている」ではなく、「単に似ている」として入ってくるからではないでしょうか。

「何か」との異なりや事なりや言なりとして無理に押し入ってこないのです。

オノマトペは「すっと入ってくる」がポイントです。意味を考えたり意識したりはしていない状態です。その時点では意味なんてないのです。

でも言葉なのです。辞書にちゃんと載っています。

私の好きな言い方をすると本物や実物のない複製の複製であり、起源のない引用の引用です。これが「単に似ている」です。

\*\* 音の韻、字の韻、意味の韻、イメージの韻 \*\*

たそがれ、tasogare  
かわたれ、kawatare  
かたわれ、kataware

同音や似た音をほどよく配置するのが音の韻です。

私はイメージの韻もあると思っています。たとえば、隠と陰と淫は私の中では音だけでなくイメージでもつながります。これがイメージの韻です。

張り裂ける芽、腫れる粘膜、晴れる空——私にはこの三つのフレーズはイメージの韻を踏んでいるように感じられます。

語義は辞書に載っています。意味は集団や共同体で共有されています。イメージは個人的なものです。

イメージは個人的なものですから、イメージの韻は通じる人にしか通じません。その意味では孤独なギャグなのかもしれません。

\*

字の韻もあると思っています。字面が似ているのです。

緑と縁なんて見た目が似ていますが、音やイメージの類似が助けてくれないと、なかなか相手に通じません。

私は字の韻が苦手です。いつも不発に終わります。たいてい、記事のラストでつぶやくだけで終わります。

そういえば、緑って縁に似ていませんか？  
(拙文「川のほとりで流れをながめる」より)

ところで、「二」の片割れみたいな「弐」は、「二」よりももっと「似」に「似ている」  
気がします。とはいえ、これは意見が二つに分れそうです。  
(拙文「連想でつなぐ「2・二・II」」より)

このように、決め手を欠くのです。いつか決めてみたいです。

\*\* 韻にインしてみたい \*\*

たそがれ月  
かわたれ星  
かたわれ月  
かたわれ星

辞書で見つけたフレーズを並べたものなのですが、それぞれ語義（意味）があるし、字  
の韻も音の韻もイメージの韻も踏んでいるように感じます。

見た目も綺麗です。

器用な人なら、四つのフレーズをつないで筋のある作文ができるでしょうね。

ばらばらなままに眺めていて、いろいろな筋をとりとめなく考えるのも楽しいです。

だらだらと  
ばらばらに  
まばらに  
まだらに

これはまさに私のことです。私の生き方そのものが、韻を踏んだ文字列になってい  
ます。

文字列が私に擬態したのか、私が文字列に擬態したのか。

\*

この記事を書くためにつくったメモから書き出してみました。

朝焼け

夕焼け

空が白む

夜の帳（とぼり）が降りる、暮れる

暮れなずむ、なかなか暮れない

暮れなじむ、暮れて馴染んでくる

夜明け

夕暮れ

暮れる、暗い

黒、墨、涅（くり）

明ける、明るい

赤、朱、紅

古井由吉における「あける・明ける」、「赤」、「明・日・月・白」

よる、夜

よる、寄る・凭る・頼る、縊る・燃る・依る・因る・由る・依る、選る・択る、揺る

ひる、昼

ひる、干る・乾る、放る

黄昏（たそがれ）

黄泉（よみ）・病み・闇・夜

\*

上のメモは、音の韻、字の韻、語義や意味の韻、イメージの韻を感じたフレーズを集めて分けたものです。

いつか韻してみたいです。

「韻する」の基本は「似ている」です。



韻、陰、隠、因——韻は陰に隠れている「何か」に因り掛かって踏むものなのでしょう。

「何か」というのは保留の言葉です。なんらかのつながりがあるかなしに関係なく、ある部分が「似ている」と感じたら、強引につなぐのです。

どんな物でも事でも現象でも、多面的で多層的ですから、どこかでつなぐことができます。つながるかどうかは賭けに似ています。

似ているは印象ですから、基本的に個人的なもので、人に通じることもあれば通じないこともあります。

いずれにせよ、私は「似ている」が大好きです。韻に淫してみたいと思っています。

\*

ふと（わざとらしく）米澤穂信さんの作品を連想しました。

米澤さんの小説では以下の『インシテミル』（文春文庫）をお薦めします。ネタバレになりそうなので、これ以上深入りできないのが残念です。

そう言えば、かつて書店で働いていた米澤さんに、買った本のレジを何度か打ってもらったことがあります。かといって面識があるわけではありませんけど。

もうずいぶん昔の話になってしまいました。

#国語がすき # 英語がすき # たそがれ # 黄昏 # 韻 # 語義 # 意味 # 語源# イメージ  
# オノマトペ # 日本語 # 英語 # 漢字 # 辞書 # ピーター# 池畑慎之介 # トワイライト・ゾーン # 米澤穂信



連想でつなぐ夜と闇と夢



＊

\*\* 連想でつなぐ夜と闇と夢

星野廉

2023年4月6日 07:59 \*\*

“こうしてウェルギリウスは生涯、死にむかって象徴を紡いできた。あらゆる過去が永遠の現在の中に流れ集まって、たったひとつの記憶として全体的につかみ取られる最後の瞬間を、かれは象徴化のいとなみによって先取りしようとしたのである。”

(古井由吉「ヘルマン・ブロッホ「ウェルギリウスの死」」(『日常の“変身”』作品社・所収 p.152)

目次

\*\* 死者たちの声

欠けているから書ける

読んでから詠む

夜が明ける

言葉と言葉の身振り

多数の他者と連なる

夜が呼ぶ、夜を呼ぶ

よむ、訓む

夢の言葉、言葉の夢 \*\*

\*\* 死者たちの声 \*\*

読む、詠む、黄泉、病み、闇、山

辞書を頼りに「よむ」という音を漢字で分けると、「よみ」と「やみ」と「やま」が浮かんで、つながってきます。

連想です。個人的な印象とイメージでつながっています。夢路イメージをたどるので  
(夢は「イメ(寝目)の転」という夢のような記述が広辞苑に見えます)。

よみ、やみ、やま、ゆめ。

連想するのは、死者たちの集まる場所です。そこでは姿が見えるというよりも声がし  
ます。

私にとって死者たちの声が集まる空間と時間を濃密に感じさせる作家の一人が古井由  
吉です。

そこでは、夜、読み、詠み、黄泉、夢、闇、山が境をなくし、書くと欠く、欠けると書  
けるが重なりあいます。

\*\* 欠けているから書ける \*\*

書き手にとっては文字を相手にしているだけに、書いているさいには、そしてそれを  
文字として目でたどるさなかには、きわめて具体的な体験として、その不調、言い換え  
るなら、欠けている、ない、うまくいかない、書けないという感覚がそこにある——そ  
んなふうに私は思います。

興味深いのは、その欠けているがあって書けているということです。さらに、その欠  
けていると並行して書けているが続いていくのです。「ない」という感覚をひたすら書い  
ていくとも言えるでしょう。

このような言葉、とりわけ文字の世界で人が体験する失調を感じさせる小説を書いた  
作家として、私は古井由吉を挙げたいと思います。

小説の冒頭やその近くに、失調があって作品が書かれていく。そんな感じをいだかせ  
る書き手なのです。

まず失調感の確認が儀式のように執り行われて、小説が進んで行くかのような印象を私は受けます。

失調とは、たとえば次のような形を取ります。

発熱、うなされる、身体の不調、疲弊・疲労・消耗、渴き・脱水、入院・闘病、時間や方向感覚が失われる・迷う、誰かが亡くなる・葬式・法事、入眠・寝入り際・寝覚め・意識の混濁や喪失、旅

こうした「欠ける」「失う」「無くなる」という出来事や事件があり、それが切っ掛けになって、狂いが生じます。その狂いを引きずりながら、作品が進行し展開していくのです。

そこでは、読み、詠み、夜、黄泉、夢、闇、山——どれもが古井の作品に頻出する言葉でありテーマです——が境をなくし、書くと欠く、欠けると書けるが重なりあいます。

\*

私の考える文学では、「ない」ものに気づき（気配かもしれません）、「ある」ものに目を向ける（これは体感です）ことも含まれます。「ない」も「ある」も「ある」からに他なりません。文学とは、文字として「ある」ものと「ない」ものに等しく目を向けることではないかと考えています。

(.....)

「ない」「欠けている」が「ある」「備わっている」へと移行していく言葉のさまは、読んでいてきわめてスリリングなのですが、私にとってスリリングなのは、ストーリーでも内容でもなく、書かれてそこにある言葉の身振りだということを書き添えておきます。

(拙文「「ない」ものに気づく、「ある」ものに目を向ける」より)

\*\* 読んでから詠む \*\*

読むことなしに詠むことはできない——。これは、日本の定型詩を論じるさいによく言われる言葉です。

読むと詠むがつながっているようです。それはそうです。定型があるのですから、勝手につくるわけにはいきません。

先行する歌なり句なり作品を踏まえて、個人がつくるわけです。個人は大きなつながりの中において、その中の枠からはみ出すことはできない世界でしょう。

その意味で個人は故人につらなります。個人の声は、それより先に立った個人たち、つまり故人たちの声と重なる。そんな世界の話なのです。

闇、黄泉です。

いま述べたことは、定型詩にかぎらず、物語や小説といった散文でも言えると思います。

\*\* 夜が明ける \*\*

やはり、古井由吉を思いださずにはいられません。冒頭で、葬式、お通夜、往生が出てくる小説をあれだけたくさん書いた書き手です。

そうした古井の書く際の姿勢に、古井が大学教員時代に読みこんだというヘルマン・ブロッホの『ウェルギリウスの死』(Der Tod des Vergil)の影を濃く感じます。

つや・通夜、よとぎ・夜伽

wake (目が覚める、生き返る、寝ずにいる、寝ずの番をする、アイルランドなどの通夜)

awake (目が覚める、目が覚めて)

vigil (寝ずの番)

Virgil (ウェルギリウスの英語での表記)、Vergil (ウェルギリウスのドイツ語での表記)



あける、akeru、明ける、開ける、空ける  
わける・wakeru・分ける・別ける、わかれる・wakareru・分れる・別れる  
夜明け・よあけ・yoake、夜分け・よわけ・yowake

ジェイムズ・ジョイスの『フィネガンズ・ウェイク』(Finnegans Wake) (柳瀬尚紀訳)  
を思いだすなどと言われても無理です。少なくとも私には。

\*\* 言葉と言葉の身振り \*\*

古井由吉は、「開ける」や「空ける」という標準的な表記ではなく、「明ける」や「あける」をもちいていました。作家活動の初期から晩年にいたるまでです。

「明・日・月・赤・白」を、おそらく偏愛した書き手でもありました。

私はなぜかとは考えません。その表記を楽しむだけです。いまここでやっているように。

私にとって「古井由吉」は言葉であり言葉の身振りです。刺激的な細部に満ちた作品を、ストーリーや人生観や意図や文学観や恋愛観に置き換える気持ちはありません。

\*\* 多数の他者と連なる \*\*

そこでは個人が多数の他者をつらなる。他者は多者でもある。

個人と他者は定型という鎖でつながっているかのようです。個人を縛る鎖が連鎖をなし、長い長い連なりを形づくっているかのようです。

連鎖、連座・連坐、蓮座。

そこでは個人と故人のあいだの差はきわめて薄いのではないのでしょうか。個人と多者のあいだの隔たりも薄い気がします。

個人の中に多者である他者がの声が層をなしているのです。

短いと長い、遠いと近い、一と多、自と他が対義であるなんて事実誤認だと思います。

\*\* 夜が呼ぶ、夜を呼ぶ \*\*

闇に包まれた夜は、昼間とは異なる思考が起こる時と場でもあります。

「やみ」と「よる」が「やおよろず」の「ひゃっきやぎょう」の「ようかい」を呼び起こすのです。

それは言の葉となって立ちあらわれます。言の葉がイメージを呼びさますのです。

よぶ、呼ぶ、喚ぶ

呼んでみましょう。

よる、夜

よる、寄る・凭る・頼る、縊る・燃る・依る・因る・由る・依る、選る・択る、揺る

やみ、闇

病み、よみ、黄泉、黄昏（たそがれ）

くらい、昏い、暗い、冥い

やむ、止む、已む、罷む、病む

よむ、よる、やむ、やみ

\*\* よむ、訓む \*\*

よむを訓む。

読み下す、訓み下す。

読む、詠む、歌う、詠う、唄う、謡う、謳う

唱える、称（とな）える

称（とな）える、称（たた）える、讃える、頌える

＊

語る、騙る

言う、謂う

論じる、論（あげつら）う、ことわり、理、断り、事割り、言割り

＊

よむは、読むと詠むと訓むをへて、夢路イメージをたどり、黄泉、闇、山へとつながって行くようです。私にとってはそうです。

よむ、よる、やむ、やみをいくら訓んで下しても、降すことはできないようです。

\*\* 夢の言葉、言葉の夢 \*\*

二つの言葉が触れあうとき、そして絡むとき、そこには必ず食う食われる、傷つき傷つける、擦れる擦られる、変える変えられる、分ける分けられる、うつるうつされるがあると思います。

二つが出会って触れあえば、その出会いと触れ合いによって、どちらも無傷ではいられないのです。

当てる当てられる、くだすくだされるもです。

そこには必ず変容が生まれます。どちらも、その場においては（全体ではなく部分が）

変わるのです。変容をこうむるというべきでしょう。

和語の音と漢語の文字と音も、それぞれが局部的に変わったのです。

＊

向こうから渡ってきた字をもちいて下そうとしても、もともとここにあった音を降すことはできない。そもそも降すべきものでもない。そんな気がします。

でも、変わったのです。二つの出会いによってどちらもが局部的に傷つき、全体から見ればこちらの音だけが傷を負うかたちで——向こうの文字と音は向こうではびくともしなかった——、ここにあった音もまた変わったわけです。

あててくださってかわった。

漢字を和語に当てて、分けて分かるのではなく、いったん漢字を忘れて和語の音を音として「よむ」。ただ、ひたすら「よむ」。いわば和文の素読。

それがいいのかもしれませんが。でも、当てて分けて分かってしまった——分けて変わってしまった——いまとなっては、それはできそうもありません。

夢でしかありません。

後戻りなどできるわけがありません。

夢を見るしかないようです。夢路イメージをたどるしかないようです。

二つの言語、外国語と母語、古い母語と今の母語、漢文と日本語、言葉の中にある言葉、言語の中にある言語——。異なる言葉のあいだに生きる。それは異なる言葉の境をこえた夢の言葉に身を置くような気がします。

(拙文「辺境としての人間」より)

夢の言葉、言葉の夢。

#古井由吉# ヘルマン・ブロッホ # ウェルギリウスの死 # 小説 # 連想 # 読む # 詠む  
# 読み下す # 漢字 # ひらがな # 訓読 # 闇 # 黄泉 # 定型詩 # 言葉 # 日本語 # 和語 # 大  
和言葉 # 漢語 # 英語 # アイルランド # ジェイムズ・ジョイス # フィネガンズ・ウェイ  
ク # 柳瀬尚紀 # 表記 # 翻訳



もつれる、ねじれる、こじれる（連想でつなぐ）





＊

\*\* もつれる、ねじれる、こじれる (連想でつなぐ)

星野廉

2023年3月31日 07:56 \*\*

「分れる・分ける・別れる・別ける」は「減る・減らす」ではなく、むしろ「増える・増やす」。

(.....)

「半分にする」(減る)とは、数や量が「二倍になる」(増える)ことなのです。

ほら、幸せを二人で分けると二倍になるとよく言うじゃないですか。あと、ケーキも。  
(拙文「連想でつなぐ「2・二・II」」より)

今回も、連想で言葉と言葉をつないでいきます。

「分れる」というのは、「離れる」と「似る」の二つがいっしょに起きているように感じられます。

もともと一つだったものが、二つに分かれるのですから、離れたところに似たものがもう一つできるようなものです。

鏡の前の体験と重なります。

「分身」という言葉が浮かびます。「分」れてできたもう一人の自分自「身」のことで、わくわくどころかぞくぞくしてきます。怪しいです。

私は解を求めているのではなく快を求めて、こういう連想の遊びをしているのですが、快ではなくて怪のほうに行ってしまうような自分を感じてしまいます。

戻れるかしら……。戻れなくてもいいなんて危うい気持ちに傾きます。こうなると分身というより分心です。

向こうから戻れるかしら……。向こうに行ってしまった心。やっぱり、鏡の前の体験と重なります。危ういのです。鏡は私にとって「鬼門」みたいです。

## 目次

\*\* に、ふたつ、ふたたび、また

つねに「さかい」と「へり」をまたいでいるのが人

tw- は「枝が分れる」イメージ

言葉の中に言葉があるから、言葉はもつれている

「短い」「長い」は印象、「長さ」は器具で測れる

二つを「と」でつなげてみても、どうつながっているのかは分からない

拗、振、縊、捻

twist は「ねじれる、よじれる」

参考記事 \*\*

\*\* に、ふたつ、ふたたび、また \*\*

個人的には分身も分心も気が進みません。私は基本的に一人が好きなのです。

不安になってきたので、「分れる」から「二」に話を戻します。

そんなわけで、「似ている」に見える、「に・二」が気になります。

(拙文「連想でつなぐ「2・二・II」」より)

そもそも「似ている」から「二」へと話に移ったのでした。ふたたび、つまり、また「に・二」に戻ります。

に、ふたつ、ふたたび、また。

「二股、二股をかける、またぐ」と連想します。「股」と「またぐ」は、「人」という字みたいです。

人——またいでいるように私には見えます。

またぐ、こっちとあっち、これとあれ——またいだ瞬間に「あっち」が「こっち」になる。

そんなふうには人は二つの世界をつねにまたいでいるのかもしれませんが。つねにです。それが反復されてずっと続くのです。

\*\* つねに「さかい」と「へり」をまたいでいるのが人 \*\*

人がつねにまたいでいるのは世界という界であり、「さかい・境、ふち・へり・縁」なのですが、辺境とも言えます。

人は辺境から辺境へと移る。人がいるところは常に辺境なのです。

\*

人は辺境を移動しつづける辺境——。人ですから、おとなだけでなく赤ちゃんも含まれます。

よるべない、寄る辺ない、寄る方ない。人間の赤ちゃんには、まさに寄り掛かるものがないのです。寄る辺の「辺」とは「辺境・さかい目・ふち・縁」に他なりません。

赤ちゃんは、ふち、へり、きわ、はしっこ、すみっこにいるとも言えるでしょう。世界のふち、人間の世界のふち。

でも、縁（ふち）は縁（えん）なのです。どういうことかと言うと、赤ちゃんは縁（ふち）に身を置くことで、縁（えん）を呼び寄せているという意味です。

縁（えん）とは、他者との出会いに他なりません。仮に赤ちゃんがど真ん中にいるとするなら、他者との出会いはないでしょう。縁（ふち）にいるから、外や周りとは触れあ

えるのです。

赤ちゃんのいる空間もまた辺境なのです。

話を戻します。

そんなふうに人は二つの世界をつねにまたいでいるのかもしれませんが。つねにです。それが反復されてずっと続くのです。

あっ、既視感に襲われました。

\*\* tw- は「枝が分れる」イメージ \*\*

思い出しました。two です。

この単語を元にして、イメージや語源で別の単語を整理して覚えたときの記憶がよみがえってきました。学生時代の話です。

two (二・2)、twelve (十二・12)、twenty (二十・20)、twice (二回)、between (二つの間で) です。

たしか、「twig (小枝、二股の枝)」から出発して覚えた気がします。「ツイッギー (Twiggy)」さんを連想しながら覚えたのです。

twig (小枝) のように、か細い英国のモデルか俳優さんでした。

(動画省略)

Twiggy in a Fashion Show, 1960's

\*

tw- は「枝が分れる」イメージのようです。

また「分れる」に戻ってきました。またまた。また股です。ふたたび股です。くどくて

ごめんなさい。

too も、「もまた」の「また」ですね。two の仲間なのでしょうか。気になったので辞典で語源を調べてみました。

「to の強勢形」(リーダーズ英和辞典)、「副詞 to の強意形」(ジーニアス大英和辞典)。

困りましたね。こういう説明はさっぱり分かりません。

「あまりにも……すぎる」の too ほうの説明なのでしょうか。too と two は発音が似ているというか同じなので、こういう説明をされると拍子抜けします。

でも、言葉は割り切れない部分がないと言葉っぽくないので、こういうこともあるのだと自分に言い聞かせます。

\*\* 言葉の中に言葉があるから、言葉はもつれている \*\*

too と two は簡潔で明瞭なまでに音が、似ているどころか、そっくりというか、同じなのに語源や意味が重なりそうもないわけですが、これはひょっとすると「もつれている」のかもしれないなんて考えが浮かびました。

ときほぐす、解きほぐす、解き解す

「解き解す」という表記を見てください。こういうことになるのは、日本語がもつれているからです。

もつれにもつれているという印象を私は持っています。言葉の中に言葉があるからでしょう。言語の中に言語があるからでしょう。

(拙文「解くのではなく溶ける」より)

それぞれの単語の語義を英和辞典で眺めるとわかりますが、英語も日本語と同じく、もつれにもつれていることが目に見えます。

一目瞭然なのです。言葉の中に言葉があり、言語の中に言語があるからに他なりませ

ん。純粋に一系統だけから成る言葉も言語も存在しません。

ただし、機械語とか人工語とかプログラミング言語ならあるかも。もつれていては、「あやまってもあやまらない・誤っても謝らない」「ぶれない」機械は操作できないと思います。

\*

日本語にも英語にも複数の言語が入っているという意味です。

日本語だと大きく分けて、大和言葉（和語）と漢語の二つの系統があるそうですが、英語にもゲルマン系とラテン系という二つの大きな系統があると学生時代に習いました。

上で述べた英語で「2・二・II」の意味のある tw- はゲルマン系（土着・島の言葉系）で、bi- や du- はラテン系（外・大陸から来た系）らしいのです。

bicycle（二輪車・自転車）、bilingual（バイリンガル）、binocular（双眼鏡）、biathlon（バイアスロン）

duo（デュオ・二人組）、dual（二・二重）、duel（決闘）、deuce（ジュース・二点）、double（ダブル・二倍）

この二つのラテン系ですが、私には字面も発音も似ていると感じられます。

- ・英語：ゲルマン系（土着・島の言葉系）とラテン系（外・大陸から来た系）
- ・日本語：大和言葉・和語系（土着・島々の言葉系）と漢語系（外・大陸から来た系）

こうやって見ると、地理的にも歴史的にも文化的にも両者は似ていますね。わくわくします。

この島々（日本）もあの島々（英国）も、大陸から見て、へり・きわ・ふちにあるのです。そして、そこで話され書かれている言葉（日本語・英語）も、つねにへり・きわ・ふ

ち、つまり辺境にあると言えるでしょう。

逆に言うと、両国は「へり」にある——大陸のへりにへばりついているのです——からこそ、他者との出会いがあり、その結果としてさまざまな文物を取り入れたと考えられます。

(ただし、このへりである国に、さらにへりと辺境——それぞれの隣国や内なる辺境である「よそ者」の存在——があることを忘れてはならないでしょう。)

へりにあるから、言葉がもつれているのです。私は、このもつれを豊かさだと感じています。

たとえば、英語に二つの系列があるのは、日本語で漢字の「二」を、「ふ（ひふみのふ）・ふた」と訓読みする場合と、「に（いちにさんのに）」とか「じ」（次男の「じ）」と音読する場合があるというふうに、「分れる」のに似ています。

＊

(もともと日本語には文字がなかったために、1) 中国から来た文字である漢字という「形」とその「意味」（解字にあるような語源的というか本来の意味）、2) 漢字を当てた日本語の「音」（複数あり）とその「意味」（複数あり）、3) 漢字の複数の「音」（時代と地域によるバリエーションがあるために複数ある）とそのバリエーションによって異なる複数の「意味」というふうに、もつれている気がします。以上はあくまでも私の印象です。漢和辞典を眺めているとそんなふうに見えるという意味です。)

\*\*「短い」「長い」は印象、「長さ」は器具で測れる \*\*

英和辞典をぺらぺらめくってみてください。電子辞書ではなく紙の辞書です。

短い単語ほど説明が長いのです。

「短いけど長い」とか「短いと長い同居」という現象が体感できます。英和辞典ほどの迫力はありませんが、国語辞典でもだいたいそうです。

辞書で「短い」と「長い」が同居しているのも、言葉の中に言葉があるからだといいます。

この点については、以下の記事で具体的に述べています。興味のある方は、ぜひご覧ください。

「短い」と「長い」——両方とも印象であることに注目したいです——が必ずしも反意語とか反対の関係にはななかったりすることは、たとえば俳句が「短く」なくてむしろ「長い」という話ともつながってきます。

定型があり、それゆえに先行するおびただしい数の句とつらなる俳句が、一句で自立し完結しているはずはありません。その意味で俳句はぜんぜん短くはないわけです。

一句に、過去の人たちの声が響き、過去の言葉が映っているのです。厚いし熱いし、濃いし重いと言うべきでしょう。

＊

俳句にかぎらず、定型があるということはその定義からして、先行する作品を踏まえているわけですから踏襲と同義と言えるでしょう。

個々の作品が型という鎖で縛られているうえに、伝統という長い連鎖につらなっているわけです。

作者の個性やオリジナリティや著作権は、そうした枠と鎖を前提としての話なので、すごい世界だと思えます。苦勞やトラブルや葛藤が多いだらうという意味です。どう考えても、短いわけがありません。

その作品だけで自立してもいないし、完結してもいない。それが定型のあるジャンルのありようです。繰り返して恐縮ですが、短いわけがありません。



私の印象では、「短い」「長い」は印象であり相対的なものです。人それぞれという意味です。一方、「長さ」は具体的に物差しやストップウォッチで測れる具象として立ちあらわれます。

とはいうものの、一句の文字数を正確にかぞえたところで、印象の世界に住む人間の感じる「短い」と「長い」を説明できないのは言うまでもありません。

私の印象では、印象である「短い」と「長い」が反意語だというのは何かの間違ひではないかと思えます。

\*\* 二つを「と」でつなげてみても、どうつながっているのかは分からない \*\*

「短い」と「長い」、「軽い」と「重い」、「薄い」と「厚い」、「寒い」と「暑い」、「冷たい」と「熱い」

このように「と」でつながれたペア（2・二・II）に、人は何らかの関係を見てしまいます。「関係があると見てしまう」と「関係がある」とは異なります。

人が想定している関係が印象であるかぎり、混乱は続くと思えます。

\*

「と」はペア（2・二・II）をつなげます。

「つなげる」のはいいのですが、どういう具合につながっているのかは、きわめて「曖昧＝テキトー＝あんまり考えていない」場合が多いですね。分からないのです。

\* 「AとB」に真ん中にある「と」は、「何でもありー」だ。

さらに、

\*つなげてみないと分からない  
\*つなげてみてもよく分からない

と言えそうなんです。

だから、

\*眺めているしかない

とも言えそうです。ああでもないこうでもない、ああだこうだと言いながら、関係を考えるのです。

\*\* 拗、捩、縊、捻 \*\*

「言葉の中に言葉がある」、つまり言葉に二つの系統があれば、もつれますよね。

「こじれる・拗れる」「よじれる・捩れる」「よれる・縊れる」「よる・縊る」「ねじれる・捻れる」わけです。

もともとこの島々にあったらしい「こじれる、よじれる、よれる、よる、ねじれる」という音に、大陸から来たという「拗、捩、縊、捻」という文字を当てたようです。

こんなことをしていれば、もつれそうだし、こじれて当然でしょう。

\*

なお、先ほど述べた英語の two と too の激似（そっくり）現象について、tw- はもちろんのこと、「to の強勢形」と「副詞 to の強意形」をはじめ、あちこちで調べてみましたが、英語がもつれたりこじれたりしている結果なのかどうかは、分かりませんでした。

もつれてこじれているのは自分の性格だと分かっただけでも収穫だったと、ポジティブに考えております。

\*\* twist は「ねじれる、よじれる」\*\*

two、twelve、twenty、twice、between に共通する tw- のイメージは、「twig (小枝、二股の枝)」から来た「枝が分れる」らしいという話に戻ります。

そういえば、twist (ツイスト) や twin (ツイン) も、語源的につながっているのを思い出しました。

twist は「ねじれる・捻れる・ねじる・捻る、よじる、振る・よじれる、振れる」ですから、「もつれる・纏れる」とつながってきます。

昔、ツイストというアメリカ発のダンスが日本でも流行しましたね。

\*

twist、ツイスト、ねじれる・捻れる、よじれる・振れる、もつれる・纏れる、こじれる・拗れる

「あらら、また話をややこしくしてる。これ以上こじらせるのはやめて」なんて声が聞こえそうです。

分かりました。

これ以上の拗こじらせはやめますので、どうか拗すねないでくださいね。では、また。

\*\* 参考記事 \*\*

※以下の記事では、日本語の「かく・かける」(書・描・搔・掛・賭・架・懸・欠・駆)のもつれぶり・よじれぶりが記録してあります。長いものなので、読むのではなく、一部にざっと目を通すだけでも、どうぞ。

\*かく・かける (1) - (2)

\*かく・かける (3) - (4)

\*かく・かける (5) - (6)

\*かく・かける (7) - (8)

\*占い・占う／賭け・賭ける (連載「かく・かける」の補遺)

\*書く・書ける (1) - (2)

#連想# レトリック # 掛け詞 # イメージ # 大和言葉 # 和語 # 漢字 # 漢語 # 数字 # 俳句 # 言葉 # 日本語 # 英語 # 語源 # 英和辞典 # 辞書 # 関係 # 辺境 # 縁

連想でつなぐ「2・二・II」



＊

\*\* 連想でつなぐ「2・二・II」

星野廉

2023年3月29日 07:52 \*\*

目次

\*\* 連想でつなぐ

見える影で見えない影を遠隔操作する

ふたつ、ふたたび、ふたまた

パートナー、パート、パーティー

「分ける」は「減る」ではなく「増える」\*\*

\*\* 連想でつなぐ \*\*

「似ている」に「に・二」を見てしまうのは私だけでしょうか。

「似る」の語源を調べると「似る・とうぼる」とあり、啞然とします。さらに「賜ばる・とうぼる」と同源とか、「賜る・たまわる」とあり、呆然となります。

貴人の容貌を受けいれてその人に似る——。そんな意味のことが複数の辞書に書かれています。

好き（like）になったからその人に似る（like）——。思いきりこじつけてみましたが、しっくりきません。

ぜんぜんわくわくしないのです。こうなったら、勝手に想像することにします。私が言葉と遊ぶのは、わくわくしたいからであって、お勉強をしたいわけではありません。

私は探求者でも研究者でもなく、言葉のありようを観察するとか、辞書を眺めるのが趣味なのですが、そうやっているのは単にわくわくぞくぞくを求めているからです。

この記事のタイトルは「連想でつなぐ「2・二・II」」であって、「語源でつなぐ「2・二・II」」ではないのです。

\*\* 見える影で見えない影を遠隔操作する \*\*

私は数をかぞえるのと数字が苦手です。算数と数学が苦手でした。数学では赤点——たしか20点以下だった気がします（赤点のたびに校長室で追試を受けました）——ばかり取っていたのです。

私は「すう・かず・数」は影だと思っています。「すう・かず」は見ることも触ることもできそうもないので、抽象とか観念という意味での影に思えます。

私にとって、数字は「すう・かず・数」という、抽象である影の具象としての影です。影の影なのですが、この影は見えます。文字ですから物——インクの染みだったり画素の集まり——だと思えます。

算数と数学は、私には数字という影（目の前にある物）をつかって、数という影（見えない抽象）を遠隔操作する操作マニュアルに感じられます。影を処理するための文法とかレトリックというイメージも浮かびます。

影の文法集、影のレトリック集という感じです。

念を押しますが、この記事のタイトルは「連想でつなぐ「2・二・II」」です。ここでやっているのは連想（廉想）であり、研究や探求ではありません。

\*\* ふたつ、ふたたび、ふたまた \*\*

そんなわけで——意味不明の言葉でごめんなさい、つなぎの言葉であって、大した意



味はないのです——、「似ている」に見える、「に・二」が気になります。

「ふたつ、ふたり、ふー」の「ふー」でもありますが、「ひーふーみー」という具合に、「ひとつ、ふたつ、みっつ」を略したもののようです。

「ひとり、ふたり」の次が「さんにん」となるのも、おもしろいですが、なぜかとは考えません。連想をするときには、「なぜ」「どうして」は邪魔になります。

「に」「ふたつ」「ふたり」と来ると、「ふたまた・二股」なんて連想します。

「また・股」の「また」は、「また来たよ」の「また」と似ています。辞書で調べれば、ひょっとしてつながりそうな気配がしますが、このまま連想に任せましょう。

私は解を求めるのではなく、あくまでも快を求めたいのです。

「また」から「ふたたび」を連想して「ふた」が出ました。

「蓋」も「ふた」ですね。「割れ鍋に綴じ蓋」と言いますが、誰にでもふさわしいパートナーがいるという意味です。

パートナーということは「二人」になるわけですから、「蓋」が「二」につながりました。

語源とかその辺は知りません。少なくとも、いまは知りたくないです。

ふたたび、またたび、木天蓼、股旅。

「ふたたび」——「再び」ですが「二つの度(たび)」でしょうね——から「またたび」に行きたくようになりますが、ここでは我慢します。

ここでは、あくまでも「2・二・II」を連想でつなぐことに寄り添います。

\*\* パートナー、パート、パーティー \*\*

パートナー、ふたり、片割れ。partner の part は「分れる」というイメージです。

学生時代に、part つなかりで単語を覚えたことがあります。語源やイメージで英語の単語を覚えるのが好きでした。わくわくした覚えがあります。

part (部分、部品、部、分ける・分れる)、party (分派、派閥、政党、一行、集まり、宴会)、particle (分子)、apart (離れて、べつべつ)、depart (出発する、お別れ、死ぬ)

「分れる」の基本は「二つに分かれる」だという気がします。いきなり三つやそれ以上に分裂する場合もありそうですが、ぴんと来ません。

\*\* 「分ける」は「減る」ではなく「増える」\*\*

「分れる・分ける・別れる・別ける」は「減る・減らす」ではなく、むしろ「増える・増やす」。

これは、party の語義を見ると分かります。そもそも part (部) とは、全体を構成する一部なのです。ひとりぼっちではないわけです。

「減る・減らす」と「増える・増やす」を反意語や反対の関係にあると見なすとすれば、それは事実誤認ではないかと私は思います。言葉の世界の文法 (比喩です) と、現実の世界の文法 (比喩です) は異なるからです。

いま述べたことはたぶん数学とは違います。あくまでも現実の世界の話です。数学には数学の文法 (比喩です) があります。

\*

「半分にする」(減る)とは、数や量が「二倍になる」(増える)ことなのです。人にとっての現実の世界では。

ほら、幸せを二人で分けると二倍になるとよく言うじゃないですか。あと、ケーキも。

bicycle (二輪車・自転車)、bilingual (バイリンガル)、binocular (双眼鏡)、biathlon (バイアスロン)

bi- は「二・両・双・複」の意味があると学生時代に習いました。

「半分・二つ」に分れて、bi-, bi-, つまり倍々に増えていくのです。

細胞の分裂みたいですね。増えるは殖える。産むは生む。生命を感じます。

biology (生物学)、biography (伝記)、biotechnology (バイオテクノロジー)

残念ながら、「生命・生・命」の意味のある bio- とは関係ないようです。

two (二・2)、twelve (十二・12)、twenty (二十・20)、twice (二二回)、between (二つの間で)

duo (デュオ・二人組)、dual (二・二重)、duel (決闘)、deuce (ジュース・二点)、double (ダブル・二倍)

上の二列ですが、t と d は舌の位置がほぼ同じで、次に発音する w と u では唇の形と動かし方も「似ている」と私は感じます。

英語の tw- はゲルマン系の「二・2・II」で、du- は bi- と同じくラテン系の「二・2・II」だと学生時代に習いましたが、こういう「似ている」に私は弱いのです。

わくわくして気が遠くなるほど好きだという意味です。

＊

話を日本語に戻しますが、「似ている」と言えば、「似ている」と感じるさいには、基本的に「二つの物や人を見る」わけです。やっぱり、「似」は「二」に「似ている」と思わずにはられません。

ところで、「二」の片割れみたいな「弐」は、「二」よりももっと「似」に「似ている」気がします。とはいえ、これは意見が二つに分れそうです。

#連想 # レトリック # 掛け詞 # 対義語 # 反意語 # イメージ # 二つ # 二人# 分れる  
# 数 # 数字 # 数学 # 算数 # 言葉 # 日本語 # 英語

「たったひとつ」「たったひとり」に抗おうとする身  
振り



＊

\*\*「たったひとつ」「たったひとり」に抗おうとする身振り

星野廉

2023年3月23日 08:23 \*\*

目次

\*\* ミシェル・フーコーの笑い声

ロラン・バルトの座った席

『批評 あるいは仮死の祭典』

『フーコー・ドゥルーズ・デリダ』

人はもつれているから、もつれた言葉が解けない

たった一つの解を求めるのではなく

危険と崩壊を回避し、無難で安全な中心にとどまる

「たったひとつ」「たったひとり」に抗おうとする身振りたち

関連記事 \*\*

\*\* ミシェル・フーコーの笑い声 \*\*

昔おもにその著作の邦訳を読んだり、ただその邦訳の字面を見ている存在だった、懐かしいフランス人たちの動画を、最近になって YouTube で漁っています。

以下の動画は最近見つけたものです（この記事が投稿された日のほぼ一週間前）。初めて見ました。ロラン・バルトの長話が続いていますけど、テーブルを囲んで会している顔ぶれをご覧ください。

1978年、ポンピドゥー・センター、ジル・ドゥルーズ、ミシェル・フーコー、ピエール・ブーレーズ……。

(動画省略)

Pierre Boulez Roland Barthes, Gilles Deleuze, Michel Foucault Le temps musical

探すといろいろあります。YouTube が登場した時代まで生きていてよかったとつくづく思います。難聴のために聞き取れないのが残念ですが、それは贅沢な悩みというべきでしょう。字幕を利用できる動画が増えています。

その恩恵に浴して、根がミーハーな私が懐かしいフランス人たちの動画を見て老後を楽しんでいるというわけです。

\*

さて、ミシェル・フーコーですが、なんとノーム・チョムスキーと対談しています。難しいですが、なかなか興味深い話のようです。英語の字幕を見ながら、ぼーっと見ていると、目についた言葉の断片から考えが浮かぶことがよくあります。

(動画省略)

ミシェル・フーコー - Wikipedia

[ja.wikipedia.org](http://ja.wikipedia.org)

二人の議論の噛み合わなさあまりにも刺激的すぎて圧倒される自分がいます。ぜんぜん理解などしていないのですが、何度眺めてもおもしろいです。

この動画を見ると、かつて来日したフーコーが吉本隆明と対談したという話を思い出します。対談は後に書籍化されました。その対談のさいに両者の間で通訳をしたのが蓮實重彦なのです。

そういえば、ミシェル・フーコーがNHKテレビに出たときのことを覚えています。渡邊守章氏がインタビューをしたのです。

フーコー著の『言葉と物』がフランスで「プチパンのように売れた（飛ぶように売れた）」ことに渡邊氏が触れると、フーコーが「きっきっ」とまるでお猿さんのような声を上げて笑ったのでびっくりしました。この笑い声はいまでも夢の中で出てきます。



渡邊守章 - Wikipedia

ja.wikipedia.org

哲学書がベストセラーになる時代がフランスにあったのです。日本でも思想関連の書籍が飛ぶように売っていた時期です。

あれはいつだったのかと気になって調べてみると、フーコーが二度目に来日した 1978 年のことだと分かりました。

\*\* ロラン・バルトの座った席 \*\*

フーコーはちょっと強面なので会ってみたいとは思わなかったのですが、ロラン・バルトには会って見たかったというか、この目で見たかったです。バルトも来日したことがありますよね。

大学進学を機に上京した年の思い出なのですが、生まれて初めて入った飲み屋で、びっくりしたことがありました。

「いらっしゃいませ〜。あら、お若いのね、学生さん？ 何を勉強なさってるのかしら？ まあ、フランス文学ですって？ ほら、あなたのいる席の隣に、ロラン・バルトが座ったことがあるの。バルトは知ってるでしょ？ こんなになって、座ってたわ」

その店のママ（男性です）が、わざわざしなを作ったり、身ぶりや手振りを交えてその時の模様を教えてくれたのです。もちろん、感激しました。思わず居住まいを正し、空席だったその椅子に見入ったものでした。興奮のあまりに鳥肌が立ったのを覚えています。

バルトの日本旅行記というか独創性に富んだ日本論である『表徴の帝国』に、バルトが自分で手描きした新宿の地図が収録されていて、そこにお店の場所と名前が出ていることも、ママが教えてくれました。

後にその本を手に入れて、またまた鳥肌が立ったのを覚えています。あと、その地図にはバルトが来日した当時に、ある種の人たちによく知られていた都内のある映画館の場所も明記されていました。

これなどは、ある種の分野の研究において貴重な資料となるのではないのでしょうか。以上は、言うまでもなく、バルトのしたお仕事とは直接的には関係のないことですが。

”「記、号、の、帝、国、」としての日本は、ロラン・バルトにとっては、ありうべからざる楽園の、不意の、しかも東の間の幻影としてあるのであり、だからその言葉たちは、いささかも「日本論」を構成したりはしえないのだ。”

(蓮實重彦著『批評 あるいは仮死の祭典』p.208)

こうお書きになったのが、蓮實重彦先生なのです。かつて先生の授業を受けたにもかかわらず、ぜんぜん学ばなかったこの私は、いまこんなミーハーな文章を書いています。

筑摩書房 表徴の帝国 / ロラン・バルト 著, 宗 左近 著

筑摩書房のウェブサイト。新刊案内、書籍検索、各種の連載エッセイ、主催イベントや文学賞の案内。

[www.chikumashobo.co.jp](http://www.chikumashobo.co.jp)

ロラン・バルト - Wikipedia

[ja.wikipedia.org](http://ja.wikipedia.org)

ロラン・バルトの動画では以下の映像がとくに好きなのですが、それは素のバルトを感じるからです。

(動画省略)

私は大学の卒業論文でバルトの『S/Z』を論じたのですが、一時期バルト漬けだったこともあって特別な思い出があります。

\*\*『批評 あるいは仮死の祭典』\*\*

蓮實重彦（以下は敬称略で失礼します）の『批評 あるいは仮死の祭典』では、ミシェ

ル・フーコー、アラン・ロブ＝グリエ、ジル・ドゥルーズ、ロラン・バルト、ジャン＝ピエール・リシャールが扱われていますが、フーコーとドゥルーズとバルトについてはインタビュー（バルトを除いて蓮實がその自宅やアパートに訪ねていく）があり、またその生の人物像が語られていて、私のミーハーな気持ちを満足させてくれます。

ルポルタージュ形式の小説みたいなので、楽しく読めます。

これだけ臨場感にあふれるフランス現代思想のテキストは他にはないのではないのでしょうか。何しろ見てきたように語られているのですから。実際、そうなんです。若き日の蓮實は現場で見てきたのです。

批評あるいは仮死の祭典

電子書籍ストア Kinoppy、本や雑誌やコミックのお求めは、紀伊國屋書店ウェブストア!  
1927年創業で全国主要都市や海外  
[www.kinokuniya.co.jp](http://www.kinokuniya.co.jp)

ジル・ドゥルーズの出てくる動画では以下が好きです。始めに話しているのはフェリックス・ガタリで、ドゥルーズは11:00から映ります。

(動画省略)

Deleuze & Guattari in Vincennes / A Thousand Plateaus / Lecture 1 / November 18, 1975

晩年のドゥルーズの映像と比べると、この動画から熱気を感じられます。見入ってしまいます。

ジル・ドゥルーズ - Wikipedia  
[ja.wikipedia.org](http://ja.wikipedia.org)

『批評 あるいは仮死の祭典』で描かれている人間味あふれるドゥルーズ像と、あまりにも悲しいあの最期を思うと感傷に流されていきます。ドゥルーズだけではありません。バルトもフーコーも、レイ・アルチュセールも、死因こそ異なりますが非業の最期でした。

もっと長生きして、お仕事を続けていただきたかったと心から思います。

合掌。

＊

『批評 あるいは仮死の祭典』で印象に残っている「ルポルタージュ」があります。

一九七二年の一月にパリで三日間にわたって、マルセル・ブルーストをめぐるシンポジウムが行われ、「ブルーストとヌーヴェル・クリティック」という会が持たれたというのですが、その発言者たちの顔ぶれがすごいのです。

ロラン・バルト、ジャン・ルッセ、ジャン・リカルドゥー、ジェラルド・ジュネット、セルジュ・ドゥブロウスキー、ジル・ドゥルーズ。しかも聴衆の中に小説家クロード・シモンや批評家ジャン＝ピエール・リシャールがいたと書かれています。

その会場にいた蓮實が耳に挟んだという隣席の男のつぶやきが当時の状況を伝えていて興味深いです。

”（前略）今夜の客を見ろ、あれがブルーストって顔かよ、（中略）、ほらあの女の子はバルトの本をかかえている、連中はみんなバルトを見に来たんだ、（中略）、彼等はサインでももらえればとっとと帰ってゆくんだ（後略）”

（蓮實重彦著『批評 あるいは仮死の祭典』p.38、丸括弧内は引用者による。）

根がミーハーな私はこのあたりの描写で、もうため息吐息でめろめろへろへろになります。その会でジル・ドゥルーズが登場して、会場の雰囲気が一変するのですが……。それはいったいどういうことなのか。

これ以上引用も要約も私にはできません。この本を読んでいただくのがいちばんいいと思います。

お祭り騒ぎの雰囲気のイベント。数々の新しい手法を用いた批評のプレゼン大会。ミーハーな観客たち。そんな現場を活写した蓮實の文章はいま読んでスリリングです。

とりわけ、新しい批評がフランスという場でどのような登場の仕方をし、どのように受け入れられていったか、については歴史的な文脈に置いて考えることが不可欠だと感じます。新旧の対立とかせめぎ合いという単純な構図には収まらない「事件性」があったのです。そして蓮實はその事件に立ち会ったのです。

＊

『批評 あるいは仮死の祭典』が出版された時期の日本はどうだったか。

「エピステーメー」をはじめ、「パイディア」、「海」といった雑誌におけるさまざまな書き手の活動が、当時の状況を歴史的な波として考えるさいの資料になると思います。いま振り返ると、フランスとは状況がかなり異なっていたのが分かります。とくにアカデミックな場での状況は日仏では大違いだったみたいです。

日本では——哲学や思想界ではなく——むしろ文芸や文芸批評の担い手たちが、フランスの新しい哲学と思想を紹介・導入する際に積極的で大きな役割を果たしたことは注目していると思います。ともに故人ですが、宮川淳氏と豊崎光一先生のお仕事が忘れられません。

宮川淳 - Wikipedia

[ja.wikipedia.org](http://ja.wikipedia.org)

豊崎光一 - Wikipedia

[ja.wikipedia.org](http://ja.wikipedia.org)

沈黙の向こう側—豊崎光一追悼集

沈黙の向こう側 豊崎光一追悼集豊崎令子（監修）／岩崎誠、佐久間和男、中村裕、平山規子（編）／2013年

[www.shumpu.com](http://www.shumpu.com)

＊

ジャック・デリダの動画も行きましょう。

あまり長くない動画ですが、内容的に好きな動画です。英語の字幕で読むことによって、エクリチュールという空疎なカタカナ語の不用で無用な呪縛から逃れるだけでも収穫ではないでしょうか。

(動画省略)

ジャック・デリダ - Wikipedia

ja.wikipedia.org

\*\*『フーコー・ドゥルーズ・デリダ』\*\*

蓮實重彦の『フーコー・ドゥルーズ・デリダ』をときどき拾い読みします。通して読むことはないです。

思考停止的な印象、つまり個人の意見および感想で恐縮ですが、この著作でのフーコー論は物語みたいです。何度も読み返さないと分からない物語。読み返しても分からない物語。それでいいのだと思います。あれよあれよと読み返しています。

ドゥルーズ論は現代詩という感じがします。とうてい言葉では伝えられないし説明できないような「何か」をレトリックでほのめかす。そんなポエムです。詩ですから、理解というよりも鑑賞するつもりで読むといいかもしれません。

デリダ論は、この著作ではいちばん読みやすいし分かりやすい気がします。記述が図式的なのです。チャート式ということですね。明晰という言い方もできそうです。読むとすっきりします。言語学のとまとめとか整理に最適の解説だと思います。

講談社文芸文庫 フーコー・ドゥルーズ・デリダ

今や古典となった『言葉と物』『差異と反復』『グラマトロジーについて』をめぐって紡がれた、この「三つの物語」は、一九七八年、

www.kinokuniya.co.jp

\*\* 人はもつれているから、もつれた言葉が解けない \*\*

影は見えるが、意味は見えない。人はもつれているから、もつれた言葉が解けない——。このことをジル・ドゥルーズは繰り返しかえし丹念に言葉にしていた人だったという印象を私は持っています。文学をやるにせよ、哲学をやるにせよ、意味なんていう抽象

でお茶を濁すなという感じでしょうか。  
(拙文「解くのではなく溶ける」より)

人はもつれているから、もつれた言葉が解けない——。以下の人たちは、共通してそうした言葉の身振りを演じていたような気がしてなりません。それは、言葉が人の外にある外だからではないでしょうか。

Roland Barthes (1915-1980)

Gilles Deleuze (1925-1995)

Michel Foucault (1926-1984)

Jacques Derrida (1930-2004)

\*

以下の人たちは、上の人たちのものした言葉の模様を、といたりほぐしたりする振りを演じながら、母語である自らの言葉の模様としてほぐしてみせる——それぞれの手法や持ち味は大きく異なりましたが——という、しなやかな身振りを示してくれた。その美しい言葉の身振りは、外国語の著作に母語を重ねるといふいとなみに対する誠実さに他ならなかった。そんな印象を私は持っています。

宮川淳 (1933-1977)

豊崎光一 (1935-1989)

渡邊守章 (1933-2021)

合掌。

\*\* たった一つの解を求めるのではなく \*\*

話は飛びますが、二十世紀の一時期にフランスあたりで文化的な革命に似た運動の機運がありました。

「フランス現代思想」なんて言葉で検索すれば、たくさんの人名や作品名が出てくるはずです。私もそれに熱中したことがありました。

いまになって思いかえすと、あの運動は決まりに逆らうという言葉と、言葉の身振りに満ちたものでした。

「たったひとつ」という決まりに反抗しまくった人たちがたくさん出たという感じ。

読みの多層性、権力の構造の多元性、解釈と意味の多様性、文字と文字列（アルファベットです）の多義性と多層性、歴史の無数性、知に無数の穴があること（つまりま

だらでまばらですかすかであること)、に注目した人たちがいました。なぜか、みんな比較的短命に終わりました。

(拙文「「たったひとつ」感、「たったひとり」感」 in 「すくえないことで、すくわれる (更新：2022/10/05)」)

フーコー、ドゥルーズ、デリダ、バルトの言葉の身振りから、私が学んだ大切なことは、彼らの著作から「たった一つ」の解を求めるなという戒めでした。どのセンテンス、どのパラグラフ、どの章、どの著作のレベルにおいてもです。

それなのに、フランス語で読もうと日本語の翻訳で読もうと、人は「たった一つ」の解を読もうとか求めようとしてしまいます。

「たった一つ」の解を求めるのではなく、自分の問題として自分の母語で、彼らの言葉の身振りを真似て演じることが、「フーコーする」であり、「ドゥルーズする」であり、「デリダする」であり、「バルトする」だと、私は思います。

たとえば、彼らの著作の翻訳にある翻訳語をもちいて作文したり、または著作を部分的に引用したり、あるいは部分を継ぎ接ぎすることが、「○○ (上の固有名詞のお好きなものを入れてください) する」ことになるわけではぜんぜんないのです。

極端な話が、○○の著作を読んでいなくても、たとえ○○の名前を見聞きしたことがなくても、「○○する」のはじゅうぶんに可能であり、知らずに○○と似たような身振りを自分の母語の言葉の身振りとして演じている人は、どの国にもいるにちがいありません。

いま述べた状況を、「実物や現物のない複製」とか「起源のない引用」という比喻をつかってもいいでしょう。いや、むしろそもそも複製や引用や影響といった、「たったひとつ」「たったひとり」への指向を引きずった状況ですらないと言うべきでしょう。

**\*\* 危険と崩壊を回避し、無難で安全な中心にとどまる \*\***

よそとよそ者たち (外部と他者である多者) と出会うためにふち (辺境) を歩こうと



いう身振りに満ちたテキストを前にして、ひとつ（同一性や真理や一つの解）を求めてど真ん中（中心）にとどまる。

テキストを解くのではなく、自分の問題としてとらえて自らが溶ける——そんな余裕は頭にも身体にもない。危険と崩壊を回避し、無難で安全な中心にとどまる。

そもそもたった一つの真理やたった一つの解を求めがちな読者層に忖度し迎合しなければならない業界の事情がある。本は売れなければ意味がない。たった一つ感をプレゼンして売るしかない。

そもそもたった一つを指向するアカデミックな村で冷遇されないためには、たった一つを指向する振りをする必要がある。たった一つを指向しがちな学生たちにそっぽを向かれないために、たった一つを指向する振りをしなければならない。

以上のような事情があるのは私も承知しています。

\*

「先生、『△△』で○○が何と言っているのか、その意味を分かりやすく、できればX X字以内にまとめてご教示願います。あと、この著作における○○の意図についても手短かに教えてください。全体を簡潔かつ明快で、やや難解っぽい味付けで仕上げただければうれしいです」

ほら、読者も学生もフォロワーも口をそろえてそう言っているではないか。現在は、著作や作品の意味と意図をすっきりさくさくと投稿して拡散させる時代なのだ。

たった一つを指向する身振りをしなければ、いいねもフォローももらえない、すっきりすんなりさくさく至上のSNSが、出版界や学問の世界の「武器」になっている事情も理解しています（なお、味付けについてもうるさくなっている傾向に関しては同情いたします）。

ただし、そこにはきっと葛藤があるにちがいないと私は想像しています。

\*\*「たったひとつ」「たったひとり」に抗おうとする身振りたち \*\*

固有名詞（たとえば人名や著作名や作品名）の放つ光はまばゆいです。「たった一つ」「たった一人」を指向するからです。その指向する力はとてつもなく強いと言えます。

たった一つの作品、作品はたった一つでしかない、たった一人の作者、作者はたった一人しかいないー。

なにしろ、この記事で挙げた固有名詞たちが戦ってもびくともしなかったのです（もしそんなことがあったとしての話ですけど）。現在もそのまばゆい光と力は温存されています。

この記事で挙げた固有名詞たちに共通した身振りがあったとするなら、それは「たったひとつ」「たったひとり」に抗おうとする——抗って勝てるものではないのを承知のうえであえて抗おうとする——身振りではなかったかと思います。

そうした身振りがいまでも世界のあちこちで演じられているはずだと私は信じています。

\*\* 関連記事 \*\*

※以下の記事やマガジンでは、この記事に出てきた人物たちの著作を私なりに読んだり眺めながら、解くのではなく溶けようとした記録が集めてあります。解説や注釈や感想文ではないという意味です。

イメージ、連想、似ている | 星野廉 | note

このマガジンのキーワードは、イメージ、連想、似ている、起源なき引用、実物なき複製です。

[note.com](https://note.com)

意味、言葉、レトリック、体感 | 星野廉 | note

このマガジンのキーワードは、意味、言葉、レトリック、体感です。

[note.com](https://note.com)

抽象、具象、体感、印象 | 星野廉 | note

このマガジンのキーワードは、抽象、具象、体感、印象（「似ている」「そっくり」）、レトリックです。

note.com

※以下の各記事には重複する内容があります。

\* 「たったひとつ」感、「たったひとり」感

\* 私たちは同じではなく似ている

(※この2本の記事は比較的読みやすいと思います。)

\* ふーこー・どうるーず・でりだ・ばると (その1) 【引用の織物】

\* ふーこー・どうるーず・でりだ・ばると (その2) 【引用の織物】

\* ふーこー・どうるーず・でりだ・ばると (その3)

\* ふーこー・どうるーず・でりだ・ばると (その4) 【引用の織物】

\* ふーこー・どうるーず・でりだ・ばると (その5) 【引用の織物】

\* 意味の論理楽・その1 【引用の織物】

\* 意味の論理楽・その2 【引用の織物】

\* 1/3 『仮往生伝試文』そして / あるいは 『批評 あるいは仮死の祭典』 その1

\* 2/3 『仮往生伝試文』そして / あるいは 『批評 あるいは仮死の祭典』 その2

\* 3/3 『仮往生伝試文』そして / あるいは 『批評 あるいは仮死の祭典』 その3

\* 文字の顔

\* 【小説】知らないものについて読む

\* 【小話】Mの世界で生きる

# ミシェル・フーコー # ジル・ドゥルーズ # ロラン・バルト # ジャック・デリダ # 宮川淳 # 豊崎光一 # 渡邊守章 # 読書 # フランス語 # 日本語 # 批評 # 現代思想 # 同一性 # 蓮實重彦



解くのではなく溶ける



＊

\*\* 解くのではなく溶ける  
星野廉  
2023年3月21日 08:22 \*\*

目次

\*\* ときほぐす  
落とした影、投げた影  
影を並べる  
影をときほぐす  
解くのではなく溶ける  
関連記事 \*\*

\*\* ときほぐす \*\*

ときほぐす、解きほぐす、解き解す

「解き解す」という表記を見てください。こういうことになるのは、日本語がもつれているからです。

もつれにもつれているという印象を私は持っています。言葉の中に言葉があるからでしょう。言語の中に言語があるからでしょう。

日本語が一様なものではないという意味です。次の言葉たちを見ると一目瞭然です。もともと島々にあったらしい音が、のちに大陸から来た形を迎えた跡が見えます。

とく、ほぐ

とく、溶く、融く、熔く

溶きほぐれる

「解く」と「溶く」は同源らしいのですが、「溶きほぐれる」というのもじっくり来ます。溶解というイメージ。

溶けて解れていく。

「溶けて解れていく」のは私たちのことではないでしょうか。もつれにもつれた日本語を話し書きながら、私たちが溶けて解れていくのです。言葉は人という存在を溶かし解していく力がありそうです。

頭だけにではなく体に働きかける力でしょう。おそらく体のつぎに頭なのではないでしょうか。

\*\* 落とした影、投げた影 \*\*

” ジル・ドゥルーズ——エディプスと形而上学

L'enfant est un être métaphysique.

——Gilles Deleuze, Felix Gatari:L'Anti-dipe”

蓮實重彦『批評 あるいは仮死の祭典』（せりか書房）P.49

「子どもは形而上学的存在である」と日本語にすることもできる文の意味はさておき、『批評 あるいは仮死の祭典』という本で、ジル・ドゥルーズが蓮實重彦に「落とした影」（「投げた影」でもいいです）を眺めていると、次の言葉が浮かびます。

métaphysique、physique（フランス語）

metaphysics、physics、physical（英語）

私にとってジル・ドゥルーズという固有名詞が投げてくる影は、上の語に尽きると言ってもかまいません。

それぞれの単語の語義を辞書で眺めるとわかりますが、フランス語も英語も日本語と同じく、もつれにもつれていることが目に見えます。一目瞭然なのです。言葉の中に言葉があり、言語の中に言語があるからに他なりません。



英語やフランス語の単語のそれぞれの語義は英和辞典や仏和辞典に載っているものの、英和や仏和辞典に載っているのは、語の意味ではなく訳語です。そもそも意味は見えるものではありません。

こうした訳語が日本語の中の言葉になっていることは明らかです。まさに言葉の中の言葉です。

漢字やひらがなからなる訳語があるのに、カタカナで表記された語が並行してもちいられている場合も多々あります。

もつれているのです。私は、こうしたもつれは言葉にとって自然なありようであり、このもつれが言葉を豊かにしていると思います。

もつれにもつれたものを、ときほぐすのは人には無理でしょう。人がもつれているからです。こちらがとけてほぐればいいのです。

＊

英和や仏和辞典で見えるのは、英語やフランス語の落とした（投げた）影たちだという気が私にはします。影つまり像ですから、見えているのは文字という形なのです。意味は見えません。

影は見えるが、意味は見えない。人はもつれているから、もつれた言葉が解けない——。このことをジル・ドゥルーズは繰り返しかえし丹念に言葉にしていた人だったという印象を私は持っています。文学をやるにせよ、哲学をやるにせよ、意味なんていう抽象でお茶を濁すなという感じでしょうか。

河出文庫 意味の論理学〈上〉

ルイス・キャロルからストア派へ、パラドックスの考察にはじまり、意味と無意味、表面と深層、アイオーンとクロノス、そして「出来

[www.kinokuniya.co.jp](http://www.kinokuniya.co.jp)

河出文庫意味の論理学〈下〉

ドゥルーズの思考の核心をしめす名著、渴望の新訳。下巻では永遠回帰は純粋な出来事の理論であり、すべての存在はただひとつの声で

[www.kinokuniya.co.jp](http://www.kinokuniya.co.jp)

批評あるいは仮死の祭典

電子書籍ストア Kinoppy、本や雑誌やコミックのお求めは、紀伊國屋書店ウェブストア!  
1927年創業で全国主要都市や海外

[www.kinokuniya.co.jp](http://www.kinokuniya.co.jp)

\*\* 影を並べる \*\*

器官なき身体、corps sans organes

métaphysique、physique

メタフィジック、フィジック

metaphysics、physics、physical

メタフィジックス、フィジックス、フィジカル

形而上、形而下、物質・身体

無形、有形、有形・身体

抽象、具象、具体

形がない、形がある、体で感じ分ける

\*\* 影をときほぐす \*\*

- ・無形と有形のあいだで、有形の身体を置いて有形を感知する。
- ・抽象と具象のあいだを行き来しながら、具象を具体的な体験として生きる。
- ・「形がない」と「形がある」との縁（ふち）で、形を体で感じ分ける。
  
- ・意味と影のあいだで、影を解こうとした人間が溶けていく。

形のある影を、そもそも人がすくい取ったり解いたりできるわけがありません。人は形である影に追いつけません。人には枠があり限りがあるからです。

影を解きほぐそうと試みたところで、人は自分がほぐれるしかなさそうです。自分が

ほぐれて溶けていくのです。

形のある影を、人は解きほぐそうと試みながら、自分が溶きほぐれていく。

**\*\* 解くのではなく溶ける \*\***

厳めしい、偉そう、もっともらしい、漢字・漢語。  
音の羅列、カタカナの羅列、意味不明、カタカナ語。  
しっくりくる、すっと入ってくる、和語・大和言葉。

漢字からなる語とカタカナ語を大和言葉で解きほぐす。  
抽象を具体的に自分の問題としてほぐす。

ほぐして何かに到達するとは限らないでしょう。むしろこっちがほぐれて溶けていく  
かもしれません。溶けていくのは頭ではなく、たぶん体です。

解くのではなく、溶けるのです。分けるのではなく分（わか）れるのです。

**\*\* 関連記事 \*\***

※以下の2本の記事は、私なりにジル・ドゥルーズの著作を読んだり眺めて、解くのでなく溶けようとした記録です。日本語を母語とする自分の問題として考えたという意味です。解説や注釈や感想文ではありません。

※意味の論理楽・その1【引用の織物】

※意味の論理楽・その2【引用の織物】

※以下の記事は、過去の記事を集めたパッチワークなので重複があります。

※ふーこー・どうるーず・でりだ・ぼると（その1）【引用の織物】

※ふーこー・どうるーず・でりだ・ぼると（その2）【引用の織物】

※ふーこー・どうるーず・でりだ・ぼると（その3）

※ふーこー・どうるーず・でりだ・ぼると（その4）【引用の織物】

※ふーこー・どうるーず・でりだ・ぼると（その5）【引用の織物】

#ジル・ドゥルーズ # 蓮實重彦 # 日本語 # 漢字# ひらがな # カタカナ # 大和言葉 # 和語 # 漢語 # 翻訳語 # 英語# フランス語 # 辞書 # 辞典 # 影 # 文字 # 意味 # 翻訳



赤ちゃんのいる空間



＊

\*\* 赤ちゃんのいる空間

星野廉

2023年3月18日 08:22 \*\*

誰もが辺境にある。辺境にあるからこそ、関係が生まれる。  
辺境とは自分ではないでしょうか。辺境という自分の中に、外と内が混在している。  
(拙文「辺境としての人間」より)

先日、病院で見て感じたことと考えたことを書きます。

子も孫もない私にとって、総合病院は赤ちゃんを間近で目にすることができる唯一の場所でもあります。病院の待合室や総合ロビーで待機する時間はけっして楽しいものではありませんが、近くに赤ちゃんがいるとそれだけで心と体がやすらぎます。

目次

\*\* 目と耳で追う

なぞる・なぜる・なでる

まねる、まねぶ、まなぶ

宙を掻く

薄い皮膚だけがデフォルト

ふち、縁、淵

しっくりする、しっくりくる、しっくりいく

赤ちゃんのいる空間 \*\*

\*\* 目と耳で追う \*\*

私は言葉を広く取って、話し言葉（音声）と書き言葉（文字）だけでなく、視覚言語と呼ばれることもある表情や身振りやしるしも言葉だと受けとめて生活しています。

赤ちゃんを見ていると、声や音や表情や身振りに敏感に反応します。反応するというのは、真似るという意味です。自分でなぞり演じてみて、その結果がどうなるかを見えています。

なぞり演じた自分に何かを返してくれるものと、くれないものを分けて覚えていくようにも見えます。その様子を見ていると、赤ちゃんは「似ている」を目と耳で追っているように見えます。

「異なる」ではなく「似ている」を目と耳で追っている。「異なる」には目を向けない。そんな感じです。

それだけでなく、「似ている」を舌や鼻や肌でも追っているように見えるのです。やたら口に入れるし手を伸ばすし触りたがります。

\*

私にとって知覚で「追う」というのは「なぞる」でもあるのですが、何をなぞっているのかと言えば、それは「似ている」ではないかと思います。

ひょっとして「異なる」は赤ちゃんにとっては「怖い」ではないでしょうか。「怖い」は見えていても、見ないし触れない。そんな知恵がすでにそなわっているように感じられます。

「似ている」「異なる」「怖い」と書き、「似ているもの」「異なるもの」「怖いもの」としないのは、赤ちゃんが気配の中に見えるからです。

まだ名詞的な世界にいないように見えるという意味です。動きと気配だけがある世界。そしておそらく「似ている」だけに目が行く世界。感じるけど感じ分けはしない。

まだ分けて分れていない世界、似ているが漂う世界、その似ているを目と耳で追うこ



とで、世界は次第に分（わ）けて分（わか）れていくのかもしれませんが。

とはいえ、「分れる」は「別れる」ではないと思います。なじんでいくのではないのでしょうか。

\*

私と赤ちゃんのあいだには、話し言葉（音声）と書き言葉（文字）はなく、音と声と表情と身振りがあることに気づきます。

\*\* なぞる・なぜる・なでる \*\*

「目で追う」「視線でなぞる」に話を絞ります。

あれとあれは似ている。これとこれは似ている。あれとこれは似ている。

話し言葉をまだ覚えていない赤ちゃんは、そんな感じで「似ている」を目で追い、同時に目でなぞっているように見えてなりません。

そのうち、あっちがこっちに似ている、こっちがあっちに似ているというふうに、世界になじんでいく気がします。

あっちとは世界、こっちとは自分なのですが、赤ちゃんはそれさえ分けていないように見えます。

\*

「なぞる」は「なでる・なぜる」に近いのではないのでしょうか。赤ちゃんが、離れたものを目で追い、視線でなでる感じです。

「離れている」——これは赤ちゃんの置かれた状況です。世界は必ずしも近くにはないので、手や足や舌でなぜるわけにはいかないのです。

これはおとなになっても同じではないでしょうか。人は離れたものを知覚を動員して「なぞる・なぜる・なでる」しかないのです。

そうやって、遠くを近くする、遠くを知覚するのです。

世界とのあいだには隔たりがあり、それはこちらが働き掛けないかぎり解消しないという意味です。ただし、働き掛けて解消するという保証はない気がします。赤ちゃんにも、おとなにとってもです。

世界に働き掛けてうまくいくかどうかは、一か八かの賭けなのです。

たとえば、お乳が欲しくて「おぎゃー」と泣いて世界に働き掛けても、それが聞き届けられるとは限りません。

後で述べますが、おとなも赤ちゃんも、偶然性の支配する賭けの世界に投げこまれていると言えます。

\*\* まねる、まねぶ、まなぶ \*\*

相手や対象とのあいだの隔たりを解消しようとするとき、人は発したり放つのではないのでしょうか。

離れる、離す、放す、放つ、発する、話す。

こちらから、離れたものに向かって放つ、発する。これが「なぞる」と同時に起こっている「まねる・真似る」だと思います。こちらが真似て、それに気づいて何かを返してくれる存在に気づくのです。

気づくに気づく。気づかれていることに気づく。気づくと気づかれるは一人ではできません。相手がいる、双方向的な関係として立ちあらわれます。

この「気づき気づかれる」が「まねる」をうながしているように見えます。「まねる」もまた相手がいて起きる身振りです。しかも、その相手とは「離れている」必要があるのです。

それが、表情や身振りの「まねる」であり、「なねぶ・学ぶ」であり「まなぶ・学ぶ」なのかもしれません。

\*\* 宙を搔く \*\*

表情や身振りだけではありません。赤ちゃんは、音や声をなぞり、まねて、まnanでいきます。

「まねる」という動作が、離れた相手とのあいだを埋める動作でもあるように私には思えます。離れた相手に手を伸ばし、近づこうとするわけです。

とりわけ、人間の赤ちゃんは世界とのあいだに隔たりがあります。離れているのです。

馬や犬や猫の赤ちゃんは、生まれて間もなく立ったり、這い回ったり、歩いたりもしますが、人の赤ちゃんはずっと寝ています。

自立、つまり自分の足で立ち、歩きまわるまでには、他の生きものたちに比べて時間がかかるのです。比較するとかなり長い時間を要しているようです。

寝たままの状態の世界を仰ぎ、周りを見まわし、自分から手を伸ばしたり、親や周りの人を呼んで、手を差し伸べてもらわないかぎり、世界とかかわることはかなわないと言えるでしょう。

「よるべない・寄る辺ない・寄る方ない」ですね。人間の赤ちゃんには、まさに寄り掛かるものがないのです。

＊

仰向けに寝かされている赤ちゃんは、よく手と足で宙を搔くような仕草をします。機嫌が悪かったりすると、何かを訴えているのでしょうか、足搔く、藻搔くといった動作もします。

宙を搔き、空（くう）を搔き、寄っ掛かりや取っ掛かりを求めているかのようです。

立つことも歩くこともできない人間の赤ちゃんは無防備で危険にさらされています。病気、事故、事件、犯罪、虐待、放置（ネグレクト）、飢え、渇き、戦争——こうした危機につねにさらされた赤ちゃんが世界中にたくさんいると聞きます。

過酷で残酷な偶然性の世界に投げ込まれているようなものです。その中で、赤ちゃんは賭けを余儀なくされていると言えは言いすぎでしょうか。

一か八か、生か死かの賭けの中で、藻搔き、足搔き、呼び掛け、気を懸ける。

搔き掛け懸け賭ける。これはおとなでも同じでしょう。

\*\* 薄い皮膚だけがデフォルト \*\*

ときどき見る夢に、体育館みたいなだだっ広い屋内で、ニホンザルと取っ組み合いの喧嘩をしているという場面があります。私は素っ裸なのです。口論をするというバージョンもあります。

いずれにせよ、私が必ず負けます。なにしろ、向こうは毛皮がデフォルトなのです。こっちは薄い皮膚だけ。

仮に素っ裸で樹海に置いてきぼりにされたら、私はきっと傷だらけになるでしょうし、夜間に凍え死ぬでしょう。実のある木に登れるニホンザルは生きのびるにちがいありません。

病気、事故、事件、犯罪、虐待、放置（ネグレクト）、飢え、渇き、戦争——人間のおとなもまた、寄る辺ない存在だと思います。

過酷で残酷な偶然性の世界に投げこまれた人間は、たった一人では、そしてデフォルトのままでは、賭けに負ける気がします。

人間は一人では大したことができないし、裸——生まれたままの姿——、そして丸腰ではきわめて脆弱なのです。

\*\* ふち、縁、淵 \*\*

話を戻します。

よるべない、寄る辺ない、寄る方ない。人間の赤ちゃんには、まさに寄り掛かるものがないのです。

ふち、へり、きわ、はしっこ、すみっこにいるとも言えるでしょう。世界のふち、人間の世界のふち。

でも、縁（ふち）は縁（えん）なのです。どういうことかと言うと、赤ちゃんは縁（ふち）に身を置くことで、縁（えん）を呼び寄せているという意味です。

縁（えん）とは、他者との出会いに他なりません。仮に赤ちゃんがど真ん中にいるとするなら、他者との出会いはないでしょう。縁（ふち）にいるから、外や周りとは触れあえるのです。

\*

一方で縁（ふち）は淵（ふち）でもあります。

崖っぶちは崖っ縁と書くらしいのですが、淵は川とか沼の深いところのようです。縁、

つまり端っこにいるくらいならいいですが、崖っ縁となると恐ろしいです。

淵だと深淵という言葉をおいします。辞書には「絶望の淵に沈む」（広辞苑）や「絶望の淵に突き落とされる」（デジタル大辞泉）なんて比喩的な用法の例文があって、絶望の淵に沈みそうになります。

\*

赤ちゃんの話でしたね。

よるべない、寄る辺ない、寄る方ない人間の赤ちゃんには、まさに寄り掛かるものがないのです。

でも、だいじょうぶ。

「まねる」「まねられる」ことによって、相手と自分とのあいだに架け橋をもうければいいのです。端っこにいても、橋を架ければいいのです。

端は橋なのです。両者は同源で、二つの端っこをつなぐとか渡すというイメージで橋らしいのです。

箸もたぶん同源ではないでしょうか。二つの端っこをつなぐ感じがしませんか。「食べる」と「食べられる」という出会いのも何かのご縁ですし。

いや、冗談ではなく、衣食住のうちの食は出会いに満ちています。食事のときには人と人が会し、食材と食材が会し、食べる人と食べられる物が会します。

そもそも料理は伝わってきたという意味で、引用であり複製であり変奏なのです。前につくった人といまつくった人、過去と現在、遠い場所とここ——こうしたものの出会う場が料理ではないでしょうか。

\*

話を戻しますと、「まねる」と「まねられる」によって、赤ちゃんは相手と自分とのあいだに架け橋をもうければいいのです。

その橋が、広い意味での言葉ではないでしょうか。

赤ちゃんの場合には文字は無理ですから、音、声、表情、身振りということになります。これが言葉なのです。広い意味での言葉です。

言葉の根っこには必ず「まねる・なぞる・なでる」があります。

\*\* しっくりする、しっくりくる、しっくりいく \*\*

以上述べたようなことは自然に起きているのだらうと私は想像しています。「自然に」を本能的というふうに置き換えててもいいでしょう。

自然に、本能的に、ですから、文字のように、苦勞して学ぶものではない。音、声、表情、身振りと、文字とのあいだにあるこの違いは、決定的に大切だと私は思います。文字は異物であるときえ、私は感じています。

だから、音、声、表情、身振りは、しっくりする、しっくりくる、しっくりいくのではないのでしょうか。不自然ではないという意味です。

文字のように、不自然ではないのです。異物のようにつかえない、つかえない。

だから、赤ちゃんはつかっているわけです。すんなりと、つかえずにつかっている。

\*\* 赤ちゃんのいる空間 \*\*

赤ちゃんが近くにいると、まったりして癒やされるだけでなく、わくわくもします。

赤ちゃんを見ていると私は、広い意味での言葉、つまり、音、声、文字、表情、身振り、しるしについて思いをめぐらさずにはいられないからです。私の唯一の趣味は言葉のありようの観察なのです。

赤ちゃんを見ながら、意味と無意味とか、意味の発生とか、偶然と必然なんてたいそうな話に思いがおよびそうになる場合もあります。

＊

まとめます。

寄る辺ない存在である赤ちゃんは、ふちにいるように私には思えてなりません。ふち、きわ、へり、すみっこです。

世界のふち、人間のふち。世界にはまだ手が届かない。人間としてまだ十分な動きができるわけではない。

だから、可愛いのでしょうか。放っておけない。おとなに可愛いと思わせる、顔の形と体つき、声、表情（とくに目の表情です）、仕草、身振り、動作——こうしたものを総動員して、世界とおとなに訴えかけているかのようです。

寝たままの状態の世界をなぞってなでる。ほかの人間たちをまねてまなぶ。

世界になりたい。自分も世界に加わりたい。赤ちゃんを見ていると、そんなふうに訴えているように見えてなりません。

＊

子どもなく孫もない老人である私ですが、赤ちゃんの眼差しの世界に加わりたいと思うことがあります。赤ちゃんの目で世界を見てみたいという気持ちなののでしょうか。老人の赤ちゃん返りかも。



どちらかというと強面で人相もいいほうではない私ですが、赤ちゃんはそんな私にほほ笑みかけてくれます。

赤ちゃんがじっとこちらを見つめているとします。来るぞ来るぞという気配を感じながら待っていると、にこっと笑うのです。

補聴器をした耳には高い音や声が聞こえないのですが、声も掛けてくれているのかもしれません。

私もいまは人生のふちにいます。

ふちとふち、きわときわ、隅っこと隅っことで、笑みを交わせる。おとな、しかもぼーっとしてきた老人の勝手な思いでしかありませんが、私はそんな瞬間に幸せを感じます。

葉待ち めとめを合わせ 橋かかる

# 赤ちゃん # 言葉 # 病院 # 視線 # 表情 # 身振り # 音 # 声 # 文字 # 日本語 # 境界  
# 知覚



辺境としての人間



＊

\*\* 辺境としての人間

星野廉

2023年3月17日 07:44 \*\*

本記事は「言葉の夢、夢の言葉」というタイトルで、2021年9月28日にnoteで投稿したものです。(そのアカウントは削除していまはありません)。再掲にあたっては、当時の勢いを殺がない程度に若干の加筆をしてあります。

目次

\*\* テリトリー、外、内、辺境

辺境に身を置いた人たち

言葉は外と内から辺境へとやって来る

辺境としての自分

夢の言葉、言葉の夢 \*\*

\*\* テリトリー、外、内、辺境 \*\*

昔の話です。

「仏文学は澁澤龍彦、独文学は種村季弘(たねむらすえひろ)、英文学は由良君美(ゆらきみよし)」——そんなふうに、一部の人たちが口にしていた時期がありました。三人に共通するのは、博覧強記というところでしょうか。在野、アカデミックな場と、身を置く場所は違いましたが、それぞれが持ち味を生かしながら、いいお仕事をなさっていました。

澁澤龍彦 - Wikipedia

ja.wikipedia.org

種村季弘 - Wikipedia

ja.wikipedia.org

三人のなかでは、由良君美がいちばん一般的な知名度は低かったような気がします。ただ専任の大学教員であったために、アカデミックな世界では、著名な方でした。現在、表象文化論というテリトリーがあるのは、由良君美の門下、あるいは、その講義を聞いた人たちがいたからだ。そう言ってもいいように思います。

由良君美 - Wikipedia

ja.wikipedia.org

由良君美とは何者か？ 阿部公彦 | じんぶん堂

博覧強記の人として知られ数々の逸話を残す英文学者・由良君美（1929 - 1990）。「偏った本ばかり読む男」を自認する由良

book.asahi.com

由良は『脱領域の知性』という邦題の訳書を1972年に上梓しています。原書の著者は、ジョージ・スタイナー（George Steiner）という人で、原題は、Extraterritorial です。ステューブン・スピルバーグのSF映画で邦題が、「E.T.」という作品がありますが、その原題は、E.T. the Extra-Terrestrial です。

似ていますよね。Extraterritorial は、「学問の領域を超えて」という意味であり（治外法権・extraterritoriality の形容詞形でもあり、interdisciplinary・学際的とも近い気がします）、一方の Extra-Terrestrial は、「地球の外の」という意味です。もともと the が形容詞につくと、英語では「○○な人たち」とか、「○○なものたち」という複数名詞みたいに扱われますから、the Extra-Terrestrial は、「地球外の生物たち」という意味になりそうです。

ところで、「脱構築」という言葉があります。英語では deconstruction です。ドイツのハイデガーの著作経由で、ジャック・デリダが、déconstruction（デコンストラクション）と仏訳＝造語したのが、英語になったらしいです。この語に「脱構築」という訳語を当てたのも、由良君美だと聞いたことがあるので、ネット検索をして確かめてみると、ウィキペディアの解説「由良君美」に言及がありました。由良には『メタフィクションと脱構築』という著書があります。

学術の領域における海外の新しい潮流で、ものになりそうなものを嗅ぎだす優れた才能の持ち主だったことが、うかがわれます。先見の明があった人だったと、今になって思います。

とは言いながら、こうしたことはすべて高山宏先生からの受け売りです。かつて大学生だった私に、由良君美について熱っぽく語ってくれた高山先生の姿がいつも目に浮かびます。ちなみに高山宏先生は事物をつなげる名人であり、上のお三方に続く人物だと理解しています。

高山宏 - Wikipedia

ja.wikipedia.org

\*

以上の文章は、「09.06.12 テリトリー (7)」という十二年前にブログに書いた記事に加筆したものです。

\*

上の文章で出てきた語のうち、気になるものを並べてみます。

- \* extraterritorial
- \* interdisciplinary
- \* extra-terrestrial
- \* deconstruction

ex(tra) や inter や de のつく単語とそのイメージを見てみましょう。

export、import、exit、exterior、interior、without、within、in、out、inbound、outbound、étranger、stranger、outsider、excentric、expose、impose、express、impress

内と外、入ると出る、はずれる・外れる、ずれる、ずれ、よそとうち、なかとそと

detour、decline、incline、decentralize、decompose、demerit、devalue、decertify、deconstruction、decontaminate、decrease、increase

déterritorialisation、deterioration、decode、code、encode、domain、Dominus、

domestic、dominion、empire、emperor、imperium、imperial、imperialism

それる・逸れる・反れる、脱する、脱ぐ、反・逆・降・否・分

international、interaction、intercontinental、interface、inermariage、Intercollegiate

際、きわ、間、あい、あいだ、あわい

periphery、outskirt、periscope、peri-urban、frontier、marginal、border、Doctors  
without Borders、boundry、between、among

隔たり、分かれ目、境い目、境界線、辺境、縁、ふちっこ、枠

\*

澁澤龍彦と種村季弘と由良君美は、それぞれ辺境に身を置いた人物だという気がします。フランス、ドイツ、英米と日本とのあいだに身を置いて、学び、研究をし、執筆活動をしたという意味です。

こうした異国と母国のあいだに身を置くという身振りで決定的な役割を果たすのが言葉、つまり言語であることは言うまでもありません。忘れてならないのは、異国の言葉を身につけることが異国の文化との触れ合いでもあるということです。

母国において異国の言葉を学ぶ際には、たとえその異国の人から直接学ぶという幸運に恵まれたとしても、その異国で学ぶのではないわけですから、制約や限界があります。その言葉のある程度、あるいはかなり身につけながら、その言葉が話されている国や地域に、ほとんど、あるいは一度も足を踏み入れることなく生涯を終える人も多いに違いありません。

\*\* 辺境に身を置いた人たち \*\*

上の文章では、辺境に身を置いた人物として、澁澤龍彦と種村季弘と由良君美を挙げました。この三人に共通点は何でしょう。



博覧強記ですか。確かにそうでしょう。語学に秀でていた、ですか。あれだけのお仕事をなさったのですから、それも間違いありません。名文家だった、ですか。おおいに共感します。私は三人の文章の熱狂的なファンです。

三人の残した業績を見れば、フランス語、ドイツ語、英語という言語が大きな役割を果たしたのは言うまでもありません。まず言葉を学び、そして言葉とその言葉にまつわる文物を学び続けるという果てのない過程をとおして創作活動をした。そう言えるのではないのでしょうか。

言葉を学ぶことは、同時にその言葉を生んだ文化を学ぶことである——。言うのは簡単ですが、きわめて困難な道でしょうね。才能、運、環境、身体（健康）、財力、社会情勢といった要素に左右されるに違いありません。

さて、三人の共通点ですが、私の頭にある共通点については、上の文章の最後に書いてあります。

母国において異国の言葉を学ぶ際には、たとえその異国の人から直接学ぶという幸運に恵まれたとしても、その異国で学ぶのではないわけですから、制約や限界があります。その言葉がある程度、あるいはかなり身につけながら、その言葉が話されている国や地域に、ほとんど、あるいは一度も足を踏み入れることなく生涯を終える人も多に違いありません。

それぞれ三人についてのウィキペディアの解説を読んでも、三人とも長期にわたって留学をした経験がないようなのです。澁澤であればフランス、種村であればドイツ、由良であれば英国か米国で、もし若い時に留学していれば、残したお仕事の内容も大きく変わったのではないか。

不用意きわまる感想および意見でしょうが、そんな想像をしてしないではいられません。

歴史に if は許されないという意味のことがよく言われます。その意見にしたがえば、今私の述べた感慨は、想像や空想どころか無意味な妄想でしょうね。

もう一つ、不用意で妄想じみた疑問が浮かびます。

なぜなのでしょう。

なぜ、上の三人は若い頃に留学をしなかったのでしょうか？ しなかったというより、できなかったのかもしれませんが。三人が少年から青年だった時期の情勢がまったく関係なかったとは言えない気がします。

\* 澁澤龍彦 (1928 - 1987) : フランス語

\* 由良君美 (1929 - 1990) : 英語・ドイツ語

\* 種村季弘 (1933 - 2004) : ドイツ語

上に挙げたお三方の生年と享年を見ると、それらが単なる数字の羅列ではないことが分かります。要するに、留学をするのがきわめて難しい時代に少年および青年時代を過ごしたという意味です。

もちろん、この三人と同世代で十代から二十代にかけて海外渡航や留学経験がある人もいますが——その前後の世代に比べればずっと少ない気がします——、海外へ渡航すること自体が不可能に近い国内および世界情勢下の時代を生きたことは事実であると思われる。

\*

次に「辺境」に身を置いた人物を生年順に挙げてみます。あくまでも私個人の興味に基づいたリストで、各人が深くかかわった言葉と海外渡航および留学経験の有無に焦点をあてています。

リストの作成のために、各人物についてのウィキペディアの解説を参照しました。私には語るような知識も蘊蓄もないので、詳しい経歴などをお知りになりたい方は、ウィキペディアでご検索願います。

\*

\* 最澄 (766/767 - 822) : 中国語、遣唐使。

\*空海（774 - 835）：中国語、遣唐使。

\*菅原道真（845 - 903）：中国語、遣唐使。

◆遣唐使（630年から894年）

\*前野良沢（1723 - 1803）：漢文、オランダ語。

\*杉田玄白（1733 - 1817）：漢文、オランダ語。

\*フィリップ・フランツ・フォン・シーボルト（1796 - 1866）：ドイツ語、オランダ語。  
お雇い外国人。

\*ジェームス・カーティス・ヘボン（1815 - 1911）：英語、宣教医、宣教師。

\*ウィリアム・スミス・クラーク（1826 - 1886）：英語、お雇い外国人。

\*ジョン万次郎/中浜万次郎（1827 - 1898）：捕鯨船員、英語、アメリカ人家庭で養子、  
アメリカで学校教育、帰国後欧州へ派遣。

\*西周（1829 - 1897）：漢文、オランダ語、ドイツ語、留学。

\*福澤諭吉（1835 - 1901）：漢文、オランダ語、英語、万延元年遣米使節。

\*新島襄（1843 - 1890）：漢文、英語、江戸時代の1864年に密出国して米国に渡り、米  
国訪問中の岩倉使節団と会い参加する。

\*森有礼（1847 - 1889）：漢文、英語、薩摩藩第一次英国留学生。

\*ラフカディオ・ハーン/小泉八雲（1850 - 1904）：英語、フランス語。お雇い外国人。

\*アーネスト・フェノロサ（1853 - 1908）：英語、お雇い外国人。

\*坪内逍遙（1859 - 1935）：漢文、英語。

\*内村鑑三 (1861 - 1930) : 英語、札幌農学校、1884年に私費でアメリカに渡る。

\*森鷗外 (1862 - 1922) : 漢文、オランダ語、ドイツ語、1884年陸軍省派遣留学生。

\*新渡戸稲造 (1862 - 1933) : 英語、ドイツ語。札幌農学校、米国へ私費留学、官費でドイツへ留学。

\*岡倉天心 (1863 - 1913) : 漢文、英語、アーネスト・フェノロサの助手、宮内省より清国出張を命じられる。インド訪遊。ボストン美術館勤務。

\*二葉亭四迷 (1864 - 1909) : 漢文、フランス語、ロシア語。ロシア滞在。

\*津田梅子 (1864 - 1929) : 英語。1871年、父親が女子留学生に梅子を応募させ岩倉使節団に随行して渡米 (5人のうち最年少の満6歳)、米国で教育を受け、1882年に帰国。1889年に再び渡米。

\*夏目漱石 (1867 - 1916) : 漢文、英語。1900年文部省より英国留学を命じられる。

\*南方熊楠 (1867 - 1941) : 漢文、フランス語、イタリア語、ドイツ語、ラテン語、英語、スペイン語。私費で渡米、渡欧。

#### ◆明治時代 (1868年から1912年)

\*上田敏 (1874 - 1916) : 漢文、英語、東京帝国大学英文科、講師小泉八雲からその才質を絶賛され、小泉の後任となる。1908年欧州へ留学。

\*有島武郎 (1878 - 1923) : 父の教育方針により米国人家庭で生活、英語、札幌農学校、1903年に渡米。

\*片山広子 (1878 - 1957) : 英語、東洋英和女学校卒。松村みね子名義でアイルランド文学を中心に翻訳。

\*永井荷風 (1879 - 1959) : 英語、フランス語。1901年暁星中学の夜学でフランス語を習い始め、1903年父の意向で実業を学ぶために渡米。1907年から1908年にかけてフランスに10か月滞在。

\*アーサー・ウェイリー (1889 - 1966) : 日本語、中国語。パブリックスクールを経てケンブリッジ大学で古典学専攻。日本語と古典中国語を独学で習得する。東アジアの古典語に通じていたが、現代日本語は操れなかった。来日もしていない。

\*日夏耿之介 (1890 - 1971) : 漢文、英語。フランス、イタリア、イギリス、アイルランドの文学の紹介と翻訳などをおこなう。

\*堀口大樹 (1892 - 1981) : フランス語。外交官の長男。1911年父の任地メキシコに。父の後妻がベルギー人で、家庭の通用語がフランス語。父の任地に従い、ベルギー、スペイン、スイス、パリ、ブラジル、ルーマニアと、青春期を日本と海外の間を往復して過ごす。

\*村岡花子 (1893 - 1968) : 英語、10歳で東洋英和女学校に給費生として編入学、そこでカナダ人宣教師から英語を学ぶ。

\*西脇順三郎 (1894 - 1982) : 英語、ラテン語、フランス語。1900年に小学校に入学し姉からナショナル・リーダーズを習う。1922年渡英。オックスフォード大学。

\*由良哲次 (1897 - 1979) : ドイツ語、留学。エルンスト・カッシーラーのもとで博士論文を完成。

\*呉茂一 (1897 - 1977) : 英語、古典ギリシャ語、ラテン語。1926年ヨーロッパ留学して古代ギリシア文学・ラテン文学を修める。

\*ロベルト・シンチンゲル/Robert Schinzinger (1898 - 1988) : ドイツ語。エルンスト・カッシーラーの下で博士号を取得。1923年来日。東京大学でドイツ語とドイツ文学を教える。1946年から1974年まで学習院大学教授。

\*渡辺一夫（1901 - 1975）：暁星中学、フランス語。1931年から1933年、文部省研究員としてフランスへ留学。

\*小林秀雄（1902 - 1983）：フランス語。東京帝国大学文学部仏蘭西文学科。

\*平井呈一（1902 - 1976）：英語。永井荷風と佐藤春夫に師事。

\*田中美知太郎（1902 - 1985）：ギリシャ語、ラテン語。

\*久生十蘭（1902 - 1957）：フランス語。1929年から1933年までフランスのパリに遊学。

\*河盛好蔵（1902 - 2000）：フランス語。京都帝国大学文学部仏文科。1928年、学校騒動で関西大学を辞職して渡仏しソルボンヌ大学に学ぶ。1930年に帰国。

\*神西清（1903 - 1957）：フランス語、ロシア語。東京外国語学校露西亜語学科。

\*吉川幸次郎（1904 - 1980）：中国語。1920年第三高等学校文科甲類へ進み、現代中国語を学び、1923年大学進学の前年に中国江南を旅する。京都帝国大学文学部文学科で考証学・中国語学・古典中国文学を学ぶ。1926年、卒業論文を漢文で書き大学院に進み唐詩を研究。

\*高津春繁（1908 - 1973）：ギリシャ語、ラテン語。1930年から1934年、オックスフォード大学でギリシア語とサンスクリット語の比較言語学を研究。

\*森有正（1911 - 1976）：フランス語。6歳からフランス人教師のもとでフランス語、後にラテン語を学ぶ。暁星小学校・暁星中学校。1948年東京大学文学部仏文科助教授に就任。第二次世界大戦後海外留学が再開され、その第一陣として1950年フランスに留学。パリに留まり1952年にパリ大学東洋語学校で日本語と日本文化を教える。

◆大正時代（1912年から1926年）

\*吉田健一 (1912 - 1977) : 英語。1919 年外交官だった父吉田茂の任地パリ、1920 年ロンドンに赴く。1930 年ケンブリッジ大学入学。1931 年退学、帰国。アテネ・フランセへ入り、フランス語、ギリシャ語、ラテン語を習得。

\*福田恆存 (1912 - 1994) : 英語。

\*高橋義孝 (1913 - 1995) : ドイツ語。1937 年フンボルト財団給費生としてベルリン大学へ留学。1938 年、ケルン大学へ移りドイツ文学を学ぶ。

\*神谷美恵子 (1914 - 1979) : フランス語、ラテン語、イタリア語、ドイツ語、古典ギリシャ語。

※私は神谷美恵子氏を心から尊敬しているのですが、その生い立ちと経歴については、ぜひ以下のウィキペディアの解説をお読みください。あれだけたくさん素晴らしいお仕事をなさった神谷氏が 65 歳で亡くなったことが信じられません。もっと長生きをしていただきたかったと悔やまれてなりません。

神谷美恵子 - Wikipedia

[ja.wikipedia.org](http://ja.wikipedia.org)

\*朝吹登水子 (1917 - 2005) : フランス語。女子学習院を中退後、1936 年フランスに渡り、ブッフエモン女学校、パリ大学ソルボンヌに学んで 1939 年帰国。

\*堀田善衛 (1918 - 1998) : フランス語、英語。1945 年上海で敗戦を迎える。1947 年 12 月まで留用生活。

\*福永武彦 (1918 - 1979) : フランス語、英語。1938 年東大文学部仏文科に入学し 1941 年卒業。1961 年学習院大学教授。

\*エドワード・G・サイデンステッカー (1921 - 2007) : 日本語。海軍日本語学校で日本語を学ぶ。1947 年に国務省外交局へ入り、イエール大学とハーヴァード大学に出向して日本語の訓練を重ねる。1950 年に退官し、5 年間東京大学に籍を置いて日本文学を勉強する。

\*ドナルド・キーン (1922 - 2019) : 日本語。1941年アメリカ海軍の日本語学校に入学し日本語教育の訓練を積んだのち太平洋戦線で日本語の通訳官を務める。復員後コロンビア大学、ハーヴァード大学。

\*竹内実 (1923 - 2013) : 中国語。中国山東省生まれ。日本へ帰国後、二松學舎専門学校在学中に学徒出陣を経験。第二次世界大戦後、京都大学文学部中国語学文学科、東京大学大学院修士課程修了。

\*遠藤周作 (1923 - 1996) : フランス語。1941年上智大学予科入学、1942年同学中退。慶應義塾大学文学部仏文科に入学。慶大卒業後は、1950年にフランスのリヨンへ留学。

\*平野敬一 (1924 - 2007) : 英語。米国サクラメント生まれ。東大英文科卒、1953年より東大教養学部勤務、のち教授。

#### ◆昭和時代 (1926年から1989年)

\*栗津則雄 (1927 - ) : フランス語。

\*澁澤龍彦 (1928 - 1987) : フランス語。1950年、2年の浪人生活を経て東京大学文学部に入学。1970年、初めての欧州旅行に出たのをきっかけに、1970年代から1980年代にかけて何度か海外旅行。

\*出口裕弘 (1928 - 2015) : フランス語。1962年東京経由でパリ大学文学部に私費留学。1963年帰国。1977年から1978年まで、ソルボンヌ大学に国費留学。

\*由良君美 (1929 - 1990) : 英語・ドイツ語。1949年学習院大学文政学部哲学科に入学。1952年に卒業し学習院大学英文学科に学士入学。1954年に英文学科を卒業し、慶應義塾大学大学院に進学し、教授だった西脇順三郎の指導でコールリッジを専攻。1963年、慶應義塾大学経済学部助教授に就任。1965年、高橋康也の推薦で東京大学教養学部英語科の助教授。英文科等で教えることはなかったが、教養課程の学生を対象とする一般教養ゼミの由良ゼミを担当。1976年に教授。



＊久保正彰（1930 - ）：18歳で日本の高校を中退し、単身アメリカに渡る。1953年、ハーバード大学卒業（古典語学・古代インド語学専攻）。呉茂一に師事。

＊岩田宏・小笠原豊樹（1932 - 2014）：ロシア語、英語、フランス語。東京外国語大学ロシア語学科中退。

＊阿部良雄（1932 - 2007）：フランス語。1958年フランス政府招聘留学生として高等師範学校（エコール・ノルマル・シュペリユール）に学び、パリのCNRS（国立科学研究センター）研究員、東洋語学校講師として長くパリに滞在。1966年再びフランスに渡り1970年に帰国。

＊高橋康也（1932 - 2002）：英語。1953年東京大学文学部英文科卒、58年同大学院博士課程満期退学。1981年カナダ・トロント大学客員教授、1986年ケンブリッジ大学客員フェローを歴任。

＊種村季弘（1933 - 2004）：ドイツ語。1953年、東京大学文学部美学美術史科進学。1954年、東京大学文学部独文科に転科。1977年、旧西ドイツのヴォルプスヴェーデに滞在。

＊蓮實重彦（1936 - ）：フランス語。東京大学文学部仏語仏文科を卒業後、同大学院。1962年にフランス政府給費留学生として留学し、1965年にパリ大学大学院で博士号を取得。同年、帰国。

＊古井由吉（1937 - 2020）：ドイツ語。1956年4月、東京大学文科二類入学。同文学部独文科卒。同大学院人文科学研究科独語独文学専攻修士課程修了。

＊池内紀（1940 - 2019）：ドイツ語。東京外国語大学外国語学部卒業、1965年東京大学大学院人文科学研究科修士課程修了。1967年にオーストリア政府奨学金を得てウィーンに留学。

◆太平洋戦争（1941年から1945年）

＊

壮観ですね。ため息が出ます。リストを作るのも大変でしたが、今こうして眺めていると目まいが起きそうな気配を感じます。

リストの作成中に各人物の解説に目を通したのですが、いろいろなイメージや言葉の断片の洪水に襲われそうになりました。

しきりに頭に浮かんだのは、中学生時代に読んだヘルマン・ヘッセの『車輪の下に』なのです。神学校に進学するため、そして進学後も、主人公のハンスが複数の古典語（ラテン語、ギリシア語、ヘブライ語）を勉強する（活用の暗記・文章の暗唱・翻訳・読解・作文）のですが、それと上のリストにある人物たちが重なるのです。

さらに漢文の素読に励む日本の着物を着た少年たちの姿も浮かびました。希望に満ちた表情もあれば、眠気を堪えた苦しげな顔もあります。見たこともないのです。

このリストにまともに付き合ったら寝込みそうな予感がするのでいったん保留し、記事で扱うのは後日にさせていただきます。

結局、上のリストは今後の記事を書くためのメモとなりました。

\*\* 言葉は外と内から辺境へとやって来る \*\*

澁澤龍彦と種村季弘と由良君美の三人に話を戻します。

三人はフランス、ドイツ、英米と日本とのあいだに身を置いて、学び、研究をし、翻訳もし、執筆活動をしました。対象とする国から遠く離れた場所、文化と文化の境目という意味での「辺境」に身を置いた人物と言えるでしょう。

何しろ、ヨーロッパから見れば日本は極東（the Far East）にある小さな島国なのです。上で述べたのとは、ずれた意味の辺境なのです。縁や端っこであることには変わりませんが。

\*

普通テリトリーというと、人の集団が作る縄張りを意味しますが、個人としての人間にもテリトリー、つまり外、内、辺境があるのではないのでしょうか。個人のプライベートなスペースというのではなく、人の身体と意識が一つの「内」という場であるというイメージです。

この記事では、共同体のレベルと個人のレベルのテリトリーを重ね合わせたり、両者の間を行き来しながら、外、内、辺境について考えてみようと思います。

(拙文「言葉は内から来るもの」より引用)

\*

日本語であれ、英語であれ、中国語であれ、漢文であれ、言葉というものが、ざらりとした違和感に満ちたものに感じられませんか。つまり、言葉は借り物なのです。個人レベルでも、国や地域や民族レベルでも、です。

言葉は自分の中にあるのではなく、生まれた時に、既にあった。しかも、自分の外にあったものなのです。それを「真似る・学ぶ」という形で借りて内に入れて身につけたのです。

\*

ところで、対応するものを欠いた（生活空間である身の回りに、対応するものが見当たらない）言語を習得するのは、ある意味空疎であり味気ないものでしょうね。遠く離れていて、風景や、食べ物や、季節感や、生えている草木や花が異なる国や地域の言語。

(中略)

このように対応物を欠いた言語との接触とは、結局異文化との触れ合いであり摩擦であり、場合によると衝突なのです。言葉と文化と土地は切り離せません。でも、切り離されることはよくあるのです。

たぶん、人が移動する生き物だからでしょう。途方もない距離を、です。いい意味でも、悪い意味でも、です。

(拙文「もう一つの言葉」より引用)

\*

澁澤と種村と由良の三人にとって、その活動の基礎となるのは言葉でした。あくまでも想像になりますが、フランス語、ドイツ語、英語を初めて学んだ時には、きっといつかその言葉が話される土地へ行くことを夢見ていたに違いありません。若く希望に満ちあふれていたはずで。

何しろ、日本という「内」において外国語とは、周りに一対一で対応するものがない場(この場を「辺境」と言ってもいいかもしれません)で、「外」から借りて身につけるという一種の曲芸をしなければ学べないものなのです。もどかしい体験とも言えます。

(※体系化された「曲芸」を確立しているのが、フランス語を母語としない人たちのためのフランス語教育だと思います。これは海外におけるフランス語教育にも見られます。⇒ フランスの言語政策 )

たとえば、英語の mountain とドイツ語の Berg とフランス語の montagne と、日本語の「山」とは、ずれています。イコールの関係にはなく、日本においては五感で「体験する」こともできません。

身も蓋もない話ですが、外国語とは何らかのトリックや錯覚や事実の意識的な忘却なしでは学べない、外から来るものなのです。

本当はほぼほぼでテキトーだけど、細かいことを言っても身につかないから、ま、いっか、気にしない気にしない——というわけです。実のところ、それでいいのです。さもないと、語学なんてやってもられません。

澁澤と種村と由良の三人は、結果的に「よそ」の土地で長期に学ぶ、つまり留学する

ことはなかったにせよ、もっぱら「うち」で書物を読むという形で研究をし、素晴らしい業績をあげたことは事実です。そして、そうした成果が素晴らしい日本語で著わされた書物という形で結実したことを忘れるわけにはいきません。

＊

そもそも、文字の出現以後の人類の歴史とは、そうしたものではなかったか。そんな気がします。すべての人が「よそ者」の言葉を、「よそ」へ行って、そこで学んだり身につけたのではわけではないのです。

写本、翻訳、訳読、素読、読み下し、レ点、暗唱、オーディオリングメソッド、ダイレクトメソッド、全身反応教授法、反復練習、通訳、要約、翻案、意識、直訳、大意、見よう見まね、睡眠学習、催眠学習——。手品というか方法には事欠きません。その手法も次第に洗練されていったはずです。

ずれを解消するにはいかないまでも、さまざまな妥協と試行錯誤を重ねて、人と人はかろうじてつながってきたということでしょうか。異文化間での「完璧な」意思疎通や伝達など幻想なのです。ずれとエラーと遅滞と勘違いは不可避です。これらがもつて、戦争だって起きます。うまくいかないほうが普通かもしれません。

＊

ここで、澁澤と種村と由良とは別の人物に話を変えます。

対応するものを欠いた（生活空間である身の回りに、対応するものが見当たらない）言語を習得する。遠く離れていて、風景や、食べ物や、季節感や、生えている草木や花が異なる国や地域の言語を学ぶ。

こうした体験をしたのちに、ついに「対応するものがある」憧れの国へ行き、そこで学問をすることができた人物のひとりが森有正です。

＊森有正（1911 - 1976）：フランス語。6歳からフランス人教師のもとでフランス語、後にラテン語を学ぶ。暁星小学校・暁星中学校。1948年東京大学文学部仏文科助教授に就任。第二次世界大戦後海外留学が再開され、その第一陣として1950年フランスに留学。

パリに留まり 1952 年にパリ大学東洋語学校で日本語と日本文化を教える。

森有正は、母語ではないフランス語を「対応するものを欠いた」日本でフランス人の教師のもとで学び、母語並みにフランス語に熟達した学者として、初めてフランスを訪ねたのは 39 歳になった年でした。

フランス語がネイティブ並みに読み書きできるだけでは駄目だ。それはむしろ研究者として当り前の前提にすぎない。それ以上のものがなければならない——。そんな意味のことを森有正が何かに書いていた記憶があります。

森は「経験」という言葉をさかんに著書でつかっていましたが、その経験とは頭で覚えただけの抽象ではない、実体験を積みかさねた結果としての「経験」だったと私は理解しています。

抽象的であることではなく具体的であることの大切さを森有正があれだけ強調した背景には、対応するものを欠いた環境でフランス語を学ばなければならなかった苦く長い——長すぎる——過去があったからではないか。私はそのように想像しないではられません。

＊

話を戻します。

澁澤と種村と由良の三人において、日本語での読書体験が、外国文学の研究と理解に役立ったことは間違いないでしょう。内なる言葉で外からの言葉を受けとめたとも言えるでしょう。

これは素晴らしいことではないでしょうか。というか、これしか他に道はなさそうなのです。

日本語と日本の文化という「内」から、そして異郷の言葉と異郷の文化という「外」の両方から、自分という「辺境」に言葉呼び寄せ吸収し、「辺境」にあって創作活動を続けた。三人の生き様をそんなふう想像しています。

そうなのです。人は「辺境」なのです。そしてあらゆる国と地域もまた「辺境」だと言えるでしょう。

＊

別の言い方もできそうです。

外からやって来る言葉と事物、自覚も意識できないブラックボックスのような「内なる言葉」。この外と内が出会う場が、個人としての人であり、国や地域なのではないでしょうか。そうであれば、人は辺境であり、あらゆる国と地域も辺境だと言えるのではないのでしょうか。

辺境は常に揺らぎ移ろう。辺境は、混合という形での創造が常に生起する場である。そんな気がします。

言葉は外と内から辺境へとやって来る。辺境という揺らぎの場へと。

人は辺境から辺境へと移る。人がいるところは常に辺境。

＊

『書物漫遊記』、『食物漫遊記』、『贗物漫遊記』、『書国探検記』、『好物漫遊記』、『遊読記』、『徘徊老人の夏』、『雨の日はソファで散歩』——。

種村季弘の書物のタイトルを見ていると——たとえ種村自身のネーミングではないにしろ——、古今東西の文献を渉獵した種村が書物と事物の間を歩き回る人であったことがうかがわれます。海外に出なくても、あるいは書齋の中にいても、世界中をそして日本中を歩き回り、過去と現在の間を行き来できるのです。

澁澤龍彦のヨーロッパ旅行記のタイトルが『ヨーロッパの乳房』であることは象徴的に感じられます。澁澤が初めてヨーロッパを旅したのは、1970年ですから42歳の時でした。乳房はボードレールの詩から取られたらしいのですが、中年になってようやく憧れの欧州という母親に抱かれた澁澤を想像しないではられません。

『世界悪女物語』、『夢の宇宙誌 コスモグラフィア・ファンタスティカ』、『秘密結社の手帖』、『異端の肖像』、『人形愛序説』、『東西不思議物語』、『幻想博物誌』――。

種村季弘と同様に古今東西の文献を渉猟した澁澤龍彦もまた、書物と事物の間を歩き回る人であったことが分かります。

由良君美の著作で印象に残っているのは、『椿説泰西浪漫派文学談義』、『言語文化のフロンティア』、『メタフィクションと脱構築』です。また、由良がかかわった訳書では、ジョージ・スタイナー著『言語と沈黙』、ジョージ・スタイナー著『脱領域の知性－文学言語革命論集』、コリン・ウィルソン著『至高体験』が忘れられません。

このように澁澤、種村、由良は、フランス文学、ドイツ文学、英文学という枠に収まりきらない、脱領域的な執筆活動をした人物として記憶されるに違いありません。

三人の中で自分が辺境にいることに最も自覚的だったのは由良である気がします。澁澤と種村は、その個性からあっけらかんと脱領域的活動を具現し、由良は脱領域性を戦略とした、という見方が可能かもしれません。

その意味で、由良は辺境にいる人物たちに惹かれたのであり、自分自身で創作するよりも、コーディネートやプロデュースに長けていた（一例を挙げると、ジョージ・スタイナー著『言語と沈黙』に参加した当時新進気鋭だった研究者たちの顔ぶれを見れば明らかでしょう）ような印象を持ちます。

”スタイナーは類のない批評家であると言われる。なるほど、現代批評のさまざまな潮流――新批評、ヌーベル・クリティック、神話原型批評、精神分析的批評、マルキシズム批評等々――の、どれにも彼は入りきらない。これは当然のことだろう。〈あとに〉きた者の自覚を出発点として、現代になお可能なコスモポリタンの在り方をユダヤ人の誇りを原動力として歩もうとするとき、特定のアプローチの枠組、特定の地域アウタルキーへの忠誠は無意味のものにならざるをえない。残るのは、〈あとに〉きた者の自覚の地図を、あらゆるアプローチの枠組、あらゆる地域の文学を駆使して、探求し、描き出すことであろうから。（後略）”

（ジョージ・スタイナー著『言語と沈黙』由良君美他訳・せりか書房所収、由良君美によ



る「批評はアウシュヴィッツのあとに——解説に代えて」より引用)

この由良の言葉にある「<あとに>きた」という、生き残ったユダヤ人であるスタイナーの自覚は、自分が絶対的な「よそ者」であるという意識に近いと思われます。このスタイナーのコスモポリタン性、そして移動する民の末裔という意識に、由良は深い共感を覚えていたに違いありません。

\*由良君美(1929 - 1990)：英語・ドイツ語。1949年学習院大学文政学部哲学科に入学。1952年に卒業し学習院大学英文学科に学士入学。1954年に英文学科を卒業し、慶應義塾大学大学院に進学し、教授だった西脇順三郎の指導でコールリッジを専攻。1963年、慶應義塾大学経済学部助教授に就任。1965年、高橋康也の推薦で東京大学教養学部英語科の助教授。英文科等で教えることはなかったが、教養課程の学生を対象とする一般教養ゼミの由良ゼミを担当。1976年に教授。

ウィキペディアの解説に基づいて作成した由良の経歴を見ると、境界にいた人物であることがうかがわれます。縦割りとか蝸壺と言われることの多かった当時の日本の社会では十分に「よそ者」であったと推測できます。

話をスタイナーに戻します。

由良が、ジョージ・スタイナー著『言語と沈黙』の「解説に代えて」で描くスタイナー像は、常に辺境であろうとする姿勢と読めるのではないのでしょうか。

私には、これが単にユダヤ的な意識と自覚であるとは感じられません。どの民族、ひいては個人についても言える属性だと思います。さらに言うなら、ジル・ドゥルーズとフェリックス・ガタリのいうノマドロジーともきわめて近い指向性であり戦略だという気がします。

ノマドロジーとは？ 意味や使い方 - コトバンク

ブリタニカ国際大百科事典 小項目事典 - ノマドロジーの用語解説 - ノマド(遊牧民)からの造語。ノマディズムともいう

[kotobank.jp](http://kotobank.jp)

脱領土化(だつりょうどか)とは？ 意味や使い方 - コトバンク

日本大百科全書 (ニッポニカ) - 脱領土化の用語解説 - フランスの哲学者ジル・ドゥルーズ  
と精神科医フェリックス・ガタリが共  
kotobank.jp

\*\* 辺境としての自分 \*\*

人は辺境から辺境へと移動する生き物ではないでしょうか。世界各地を歩き回った人も、ある土地で生まれ育ち一生を終えた人もです。

人は他の人と触れ合うことなしに生きることはありません。でも、それぞれの人が他人であり他者なのです。

その他者と触れ合うことは、自分を辺境に置くことに他なりません。自分と異なる人、自分と異なる家族（親とはらから）、自分と異なるパートナー、自分と異なる土地、自分と異なる言葉、自分と異なる文化、自分と異なる性格や流儀、自分と異なる身振りや仕草や表情.....。

誰もが辺境にある。辺境にあるからこそ、関係が生まれる。

辺境とは自分ではないでしょうか。辺境という自分の中に、外と内が混在している。個人的な思いですが、それだけが体感できる気がします。揺らいでいる限り、それが体感できる気がします。

目を閉じれば、複数、いや多数の声が聞こえてきます。みんな外から来たものなのです。内とは言えば、死ぬまで体感できない謎のように思えます。言葉と言えない言葉だからでしょうか。内であるはずなのに。

外から来たものたちだけが、内をあざ笑うように、明晰な風景として脳裏に映し出され、明瞭な声としてうつせみに響くばかりなのです。

\*\* 夢の言葉、言葉の夢 \*\*

初めての辞書はどんなふうにして作られたのだろう。

最近、よくそんなことを考えます。外国語と母語をつなぐ辞書。たとえば、英和辞典、和英辞典のように。あ、国語辞典を忘れてはなりません。古語辞典や漢和辞典も。

想像するのは、外国語と母語をつなぐ辞書のない環境で、何らかの形で外国語を習得した人（習得しつつある人と言うべきでしょう）が、自分の中にあるその外国語と母語の知識を総動員して、「これはあれだ」「あれはこれとほぼ同じ」「これに似た言葉はないけど、あれで間に合わせようか」「さっき本を読んでいて思いついたけど、あれにはこの訳語をあてよう」なんて具合に、「自分の中にある辞書」（比喻です）を具体化していくというものです。

素人の空想、いや妄想でしかないわけですが、そんなさまを勝手に思い描いていると幸せな気分になります。

かつて翻訳家を志していたころに、変な言い方ですが「英英辞典」を使うようにと盛んに言われたことを思い出します。英文を読んでそれを日本語にするさいに、英和辞典という既成の訳語集にとらわれずに、なるべく自分の語感で訳せというのです。

それでも訳語が浮かばなかったら、英語のネイティブスピーカーが使っている英語の辞典を引いて、それに相当する日本語を探る。専門用語や特殊な用語については、大きな英和辞典とか百科事典で調べる。大切なのはさまざまな分野の本を英語でも日本語でもたくさん読むこと。

確かにそうです。正論だと思います。でも、大変ですよ。

この記事を書くためにウィキペディアの解説を利用しながら、まだ○和辞典も、和○辞典もない時代に勉強し研究にいそしんでいた人たちのことを思いました。そういう人たちは上で述べたような方法が無意識に実践していたのかもしれませんが。

二つの言語、外国語と母語、古い母語と今の母語、漢文と日本語、言葉の中にある言葉、言語の中にある言語——。異なる言葉のあいだに生きる。それは異なる言葉の境をこえた夢の言葉に身を置くような気がします。

夢や夢うつつで何らかの言葉を話したり書いたりする。歳を取ってきたせいかな、不思議な夢を見たり、日中に荒唐無稽で不可思議な夢にふけることがあります、そのさなかに言葉が浮かぶことがあります。

その言葉は、私の場合だと日本語（和語と漢語と方言）であったり英語であったりフランス語であったり、あるいは何語なのか分からなかったりするのですが、そうした夢の中の言葉がひょっとして言葉の夢ではないかと思う瞬間があります。つまり、私が言葉の夢を見ているのではなく、言葉が私の中で夢を見ているのではないかと。

そんなときの私は縁（ふち）にいます。辺境にいるのです。きっと私自身が縁なのでしょう。

あの夢の言葉は、言葉の夢ではないか――。

眠くなってきましたので、しばらく横になります。長い記事をお読みいただき、ありがとうございました。

#言葉 #日本語 #澁澤龍彦 #種村季弘 #由良君美 #高山宏 #森有正# ジョージ・ス  
タイナー #ジル・ドゥルーズ #外国語 #漢文 #翻訳 #留学# 辞書 #英語 #フランス  
語 #ドイツ語 #辺境

「ない」を「ある」に変える魔法



＊

\*\*「ない」を「ある」に変える魔法

星野廉

2023年2月27日 13:06 \*\*

目次

\*\* 言葉を並べて眺める

どのように見ているのか

「ない」を「ある」に見せかける魔法 \*\*

\*\* 言葉を並べて眺める \*\*

言葉を並べるのが好きです。並べる最中もわくわくしますが、並べた言葉を眺めて思いにふけっているとわくわくが持続します。

抽象、具象、事象、現象、森羅万象、象形、象嵌、象徴、表象、仮象、印象、対象。  
映像、想像、偶像、肖像、残像、映像、画像、鏡像、実像、巨像、音像、写像、現象。

文字を眺めていると影絵を見ているような気持ちになります。影絵を見ながら、つぎつぎと別の絵や言葉の断片が浮かんでくると似た心境です。目にしているのが、文字なのか、文字があらわすとされる「何か」なのか、文字が呼びさす「何か」なのか、その境が不明になってきます。

相手にとっての「触れる、同時に触れられる」は、体感できないという意味で抽象になるわけです。他者を前にして（相手にして）、人は想像し抽象するしかないということでしょうか。想像の「像」と抽象の「象」は影です。「他者を相手にする」とは影を相手にするという意味での「触れ合い」だと考えられます。

（拙文「知ではなく痴にうながされて書く」より）

象も像も影です。人は影に影を見ているのです。それでいながら、影を見ているとはふつうは意識しません。むなしいからだと思います。見えているものすべてが影だなんて、ホモ・サピエンスとしてのプライドが許さないのかもしれない。

「そのもの」「それ自体」を見ていると考えたいのです。私も人間ですから、その気持ちは痛いほどわかります。「そのもの」「それ自体」、ぜひ見てみたいです。

「そのもの」「それ自体」とまで欲張らずに「本当の姿」「真の姿」を見ていると言う人もいます。「姿」と言っているのですから謙虚ではありますが、「本当の」「真の」という怪しげな言い回しに、まだ人としてのプライドを感じないではられません。

往生際が悪いのです。それほどまでに、人は「そのもの」「それ自体」「本当の」「真の」を求めているのでしょう。これだけこだわるのだから、オブセッション（強迫観念）になっているにちがいません。

だから、見るのです。飽きもせずに見つづけます。ひたすら見て、何かに到達しようと考えているにちがいません。

「何か」の代わりにその「何か」ではない「別物」で済みます。しかも、済まして澄ましている。こうやって、別物を相手にしていることを忘れようとするのが、太古から続いている人の習性なのかもしれません。

そんなわけで、私も見つづけます。じっと見ます。

実体、実像、実物、現物、事実、真実、真理、本質。

実、体、物、事、真、理。

こうした文字と文字列には、人類の必死な願い、つまり悲願が込められているようです。「そのもの」に到達したいなあ——。彼岸への悲願。叶わない夢。必死すぎて、一方で、むなしさも覚えます。

\*\* どのように見ているのか \*\*



悲願を胸に、さらに見つづけてみましょう。

抽象、具象、事象、現象、森羅万象、象形、象嵌、象徴、表象、仮象、印象、対象。  
映像、想像、偶像、肖像、残像、映像、画像、鏡像、実像、巨像、音像、写像、現像。

人が「見る」、「見ている」ことは確かです。何を見ているかという影だと思のですが、何の影なのかわかるとは私には考えられないので、どうやって影を見ているのかを見てみます。たくさんあるので、目を惹くものから見ていきます。

抽象——抽選や抽出の抽ですから、選ぶのでしょうか。捨て去るわけです。何を捨て去るのかというと、見るのに都合の悪いものでしょう。人は見たいものを見ようとするので、自分が見たいものに近づくように、どんどん捨ててすっきりとスリムにする。そんなふうには私にはこの文字が見えます。

想像——文字どおりに取ると像を想いうかべるです。影や姿や形を想いうかべる。形や姿のないものの影も想いうかべる、もあります。見える物だけでなく、見えない物や事や現象も人は想いうかべるし、思いえがきます。人の想像力はすごいです。いずれにせよ、「そのもの」を見ることができないから思いの中で「影」を浮かべたり描いているのは確かでしょう。

印象——思いの中で、しるされ刻まれて残った影という感じ。「残っている」がキーワードです。人は印象の世界に生きてるとよく考えます。印象の基本にあるのは「似ている」です。ああ、これは何かに似ている。これはあれに似ている。こんな感じですが。人はつねに影を見ているので「同じ」かどうかは確認できません。「同じ」を確認するためには、自分たちで作った精巧な道具や器械や機械を使う必要があります。じっさいに使っています。

実像——じっさいの姿、つまり影ですから、実物ではありません。虚像は、実像の反対とされていますが、私には見方の相違というふうに見えます。

疲れてきました。体力を消耗する作業だと気づきました。この辺でやめておきます。

＊

漢字や漢字の文字列を見ていると、それが文字であり、像であり、影であることを忘れそうになります。そういう「もの」があるように見えてくるし、思えてくるし、感じられてくるのです。

この感じ、何かに似ていると思ったのですが、考えてみたところ、わかりました。仮想現実です。「ない」のに「ある」のように見えるし思えるだけでなく、感じられるようにする仕掛けです。

五感の中で人にとってもっとも大きな意味を持つと言われる視覚や聴覚だけでなく、嗅覚や味覚や触覚までリアルに感じさせてくれる VR とか AR が開発されているそうです。

「ない」のに「ある」ように感じさせる。これが基本のようです、「ない」とか「そのもの」では「ない」にもかかわらず、「ある」とか「そのもので「ある」」ように見せて、思わせて、さらには感じさせる、仕組みである、文字、とりわけ漢字と似ていませんか。

猫という文字をよく見てください。猫に似ていますか？ 私にはぜんぜん似ていないように見えるのですが、それでも猫をさすものとして、人は使っています。使ってきたし、これからも使いつづけるでしょう。

不思議な話です。私なんか考えるたびに腰を抜かしています。これは冗談ですが、何度腰を抜かしても罰は当たらないほど不思議だと思えます。

言葉、とくに文字は太古から人が利用している仮想現実（「ない」を「ある」と感じさせる仕掛け）ではないでしょうか。しかも、何の機械も装置も電源も要りません。寝入り際の夢うつつでも、たぶん死に際でも楽しめます。

\*\*「ない」を「ある」に見せかける魔法\*\*

抽象、具象、事象、現象、森羅万象、象徴、表象、仮象、印象、対象。

映像、想像、偶像、肖像、残像、映像、画像、鏡像、実像。

実体、実像、実物、現物、事実、真実、真理、本質。

実、体、物、事、真、理。

理想、現実、思考、思想、思索、論理、理論、分析、批判、批評、観念、概念、必然、偶然、読解、解釈、証明、検証、明晰、精緻、存在、核心、展望、俯瞰、探求、差異、同一性。

〇〇主義、〇〇学、〇〇論、〇〇効果、〇〇現象。

私も使っていますが、威勢のいい文字列だという印象を持ちます。こういう言葉が適度にちりばめてある文章は、いかにも賢そうに見えます。「適度に」がポイントです。何ごともやり過ぎは逆効果をもたらします。

固有名詞と同じくまばゆい光を放ちます。見栄え——見映えとも書きますが、映える、つまり輝くという意味です——がいいのです。固有名詞（とくに有名人や偉い人の名前です）や偉そうな（見栄えがいい）言葉をキーワードやハッシュタグにして文章を投稿すると、見る人や読む人が増えます。

読む前に、そういう映える言葉がちりばめてあるのを見て、すごいと感じるのです。見た目で、すごいと感じさせたら、こっちのものです。その文章は半分成功したのも同然だと言えます。人は印象の世界に生きているからです。

逆に、固有名詞（人名だけでなく書籍名や作品名や集団名も含みます）やこういう見栄えのいい言葉が頻出する文章を避ける人もいます。

ここにも一人いますが、固有名詞に「虎の威を借る狐」とか「人の禪で相撲を取る」的な安易さ——なにしろ固有名詞は最小最軽最短であるだけでなく最強の引用なので——を、そして偉そうな言葉にはうさんくささを感じたり、または単に理解力が足りなかったり、へそが曲がっているからでしょう。少数派であることは確かです。

この種の言葉は「ない」を「ある」に変える魔法の言葉なのです。訂正します。「ない」が「ある」に変わるわけではないので、「ない」を「ある」に見せかける魔法の言葉、です。

何が「ない」の？ 何が「ある」の？ ですか？ 影です。実体とか、実物とか、  
事実とか、真実とか、そんな話ではなく、影の話をしています。

#文字 # 漢字 # 文章 # 影 # 抽象 # 印象 # 想像 # 言葉 # 魔法 # 固有名詞# 仮想現実  
# VR # AR

「何か」に「何か」を見なければならぬ世界



＊

\*\*「何か」に「何か」を見なければならぬ世界

星野廉

2022年12月2日 07:50 \*\*

目次

\*\*「何か」に「何か」を見る

「何か」に「何か」を見なければならぬ

「何か」に「何か」を見るべき世界

「何か」に「自分の見たいもの」や「自分が知っていると思いきこんでいるもの」を見る\*\*

\*\*「何か」に「何か」を見る \*\*

「何か」に「何か」を見るというか、人は「何か」に「何か」を見てしまうようです。

こんなふうを書いて普遍をめざし人類を語る気はありません。人類の端くれである私が、自分とまわりの人類を見ながらつづっている観察記だと考えてください。私は観察するのが好きなのです。

「何か」に「何か」を見てしまうという場合の、前者と後者の「何か」は異なっています。だいたいにおいて、人は自分の見たいものや自分の知っていると思う「何か」を見てしまうように私には見えます。

私が見ているわけですから、いま書いているのは私が見たいものであり、私が知っていると思うものである可能性は高いと思います。その辺をどうかご理解ください。

\*\*「何か」に「何か」を見なければならぬ\*\*

「何か」に「何か」を見なければならぬ世界があります。たとえば、交渉の世界がそうです。商談や裁判の前や労使の交渉をはじめ、交渉にはさまざまな現場がありますが、国家間の交渉を例に取りましょう。

二国間で上級の外交官レベルの交渉がおこなわれる場合には、かなり張りつめた空気が漂うと言います。ぶっちゃけた話が諜報、つまりスパイ合戦なのです。

交渉の時間に遅れた遅れない、どちらがどれだけの時間遅れたか、つまりどちらが相手を待たせたか。もうこれだけでメッセージなりシグナルになるそうです。

\*

交渉が始まると、双方に複数の人員がいるのが普通ですが、その人員の階級、立場、役割と、どの席に座ったかという位置がこれまた解読すべき意味を持ちます。各人の服装、ネクタイの色、顔色、目つき、視線、口調、メモを取るかどうか、どこでメモを取ったか.....。

トイレに立ったか、どれくらいの時間席を立ったか、飲み物を飲んだか、隣の人員に耳打ちしたか、休憩時間にはどのような行動を取ったか、携帯電話をつかったか、休憩後に席順が変わったのはなぜか、一人いなくなったのはなぜか、主席の人物がいやに汗をかいたのは体質かそれとも体調のせいか.....。

通訳が前回と違うのはどうしてか、この席での序列が二番目の人物が最近離婚したというがどういうわけであれだけ多弁なのか、今回初めて出席した隅っこにいる人物があれだけ偉そうな態度を取っているのはなぜか、その横の女性が持っているペンがいやに太いがテープレコーダーかカメラではないのか.....。

被害妄想の世界のようですが、これくらいの目と耳と鼻を持っていないと国家間の交渉は務まらないと読んだことがあります。昔、翻訳業をしていたころに、交渉関連の本を訳し、ずいぶん勉強させられました。



\*\*「何か」に「何か」を見るべき世界\*\*

世界が寓意や暗喩に満ち満ちていると感じられたら、さぞかし大変でしょうね。解読と解釈をしなければならないのですが、場合によっては、自分勝手にするわけにはいかないのです。

寓意と暗喩でお気づきになった方もいらっしゃると思います。そうです。宗教観の話なのです。「何か」に「何か」を見るべきというよりも、「何か」に「何か」を「正しく」見るべき世界に生きているからです。

私はそういう世界には疎いので、知っていることだけ書きます。

\*

そもそも経典が寓意や暗喩だからなのだそうです（どの宗教の話かは特定しません）。要するに訳が分からないわけです。経典は大昔のものですから、かなりお勉強をしなければ読めません。

いわゆる聖職者というかお坊さんたちでないと読めない経典なり聖典がある。ということは、知が長い間独占されていたと理解できます。昔々は、文字や書物は一部の知的階級にいるエリートだけのものだった。これは学校で習ったことでもあります。

文字が読めて教養もある、そうした一部の人たちが経典の解釈や解読を担い、自分たちでその意味なり教えを決めていたと言えそうです。その頂点に立つ人たちが正統であり、それ以外は偽物であったり異端であったりしたのでしょうね。よく聞く話です。

\*

いずれにせよ、ピラミッドの頂点にいる人たちが決めた解釈が、その宗教の世界観となり、具体的には法や規律や倫理的な規範となって長く存続していたというお馴染みのお話につながります。

上で決めたことが人びと、庶民、一般大衆にまで浸透していた。これまた、分かりや

すい話につながってきます。人びとの日常生活にまで大きく影響を与えていたという意味です。しかも長く続いたようです。

「何か」に「何か」を「見るべき」世界とは、「何か」に「何を見るべきか」が「決められていた」世界と言うべきかもしれません。

いまもそうした世界——宗教だけでなく政治体制の話です——はあるようですし、力と領域を増しつつあるように思えてなりません。

\*\*「何か」に「自分の見たいもの」や「自分が知っていると思いきこんでいるもの」を見る\*\*

堅い話になってきたので、身のまわりによく見られる話に変えます。

「何か」に「何か」を見る、見てしまう世界に、私たちは住んでいるようです。だいたいにおいて、人は自分の見たいものや自分の知っていると思う「何か」を見てしまうように私には見えます。

それだけはないようなのです。

「見えないもの」であったり「よく知らないもの」であるにもかかわらず——「見える」とか「知っている」と決めるために、その根拠となりそうなものをでっちあげてしまうことがあるように、私には見えます。

これは自分自身を見ていて感じることでもあります。

何をでっちあげるのかと言いますと、具体的には、意味、感情、イメージ、メッセージ、物語といったものです。

\*

この人の手にしている花束は私への愛の印だ。彼が言った「はい、そうです」は「いいえ、そうじゃない」にちがいない。あの人が忘れていったこの本は私に読めというメッ

セージかもしれない。あ、そうかあ、これが例のあれのことなのね、それしかないわ。

「うちの娘が最近、〇〇テレビのニュースで出てくるキャスターさんが自分にメッセージを送っているって言うのです。この間も、「あ、△△さんが私に目くばせした」とか「一昨日わたしが送ったメールどおりに、ギンガムチェックのシャツに紺のネクタイをしている。やっぱり気持ちに通じているんだ」なんて嬉しがって……」

嫌よ嫌よはもっともっとという意味。ピンチはチャンス。俺の妹がこんなにかわいいはずがない。これこそが本物。「本当です」は「間違えました」。「本気です」は「冗談です」。「真摯にスピード感を持って」は「テキトーにだらだらと」。飴（薬）は、実は鞭（毒）。あいつは「たったこれだけ？」って言っているけど、「こんなにもある」じゃないか。フェイクだ、フェイク以外の何ものでもない。何が「新たな始まり」よ、こちらはもう「おしまい」だってば。

「そうか、デパートの特売場で買ったんじゃなくて、夜なべして一生懸命に編んでくれたんだよな、寒かっただろうな、あの手を見ろよ、かさかさに荒れちゃってさ、俺は知っている、あいつの情の深さを、それに……」

＊

こんなことを書いている私自身が、「何か」に「何か」を見てしまう世界に生きて、「自分の見たいもの」や「自分が知っていると思いきこんでいるもの」を見てしまっているようです。

#交渉 #被害妄想 #隠喩 #寓意 #解説 #意味 #メッセージ #物語



異なる、事なる、言なる\*\*



＊

\*\* 異なる、事なる、言なる

星野廉

2022年11月23日 08:03 \*\*

「似ている」とは、何かとつながり、かさなる「気持ち」のことです。自分が何かに、うつる「気持ち」でもあります。人にとって世界は「ある」のではなく、ただ「似ている」のです。人は世界が「ある」と考えることがありますが、見えるのは「似ている」だけ。「何が」も「何かに」もない「似ている」です。「似ている」を何度もなんども、なぞるのです。「何が」と「何かに」はその時々によって移り変わります。雲と同じです。

○

人は「似ている」の世界に生きている気がしてなりません。あくまでも私的なイメージの話なのですが、「似ている」が地、「異なる」が図で、地に図が浮かんで見えるという感じです。ぼーっとしていれば地で、目を凝らしたりしゃきっとすれば図になるという感じ。ところが、目を凝らして見ているはずの「異なる」は見えていないのです。「見る」という「事」と「見る」という「言」が見えなくしてしまうからです。

○

「何かが」と「何かに」のない、ただの「似ている」。「何が」と「何かに」はその時々によって移り変わる。待機中。準備中。仮眠中。うたた寝。

あっ。何かが見えた。見留めた。認めた。地に図が浮かぶ。「何か」が目浮かぶ。異なる。

あれは何だろう？ ○かな？ △だ。いや、Xにも見える。「何かが」「何かに」「似ている」。

言葉にする。事物が見えなくなる。「何か」が言になる。

事物に目を凝らしている。言葉が浮かんでこなくなる。「何か」が事になる。

言と事が「何か」を見えなくする。「何か」とすれ違う。「何か」をまともに見るのは怖い。

事を見つめていると不安で落ち着かない。言にするとしゃきっとして落ち着くが疲れる。事も言もおぼろになり、ぼーっとしているのがいちばん気持ちがいい。

「何かが」と「何かに」のない、ただの「似ている」。「何が」と「何かに」はその時々によって移り変わる。待機中。準備中。仮眠中。うたた寝。



似た音、似た形、似た動き。こうしたものは人を安心させます。

人は「似ている」が好きなのです。似たものをしきりに目で追う赤ちゃんを思いうかべてください。

人にとって「似ている」がまっ先にある感じで、「似ていない」はぜんぶ「異なる」とか「違う」になります。

とはいえ、人には「異なる」がとらえられないようです。たぶん、すれ違ってしまうのです。「異なる」は、逸れる、すれる、外れる、誤る、ずれる、すれ違う、たがう。

ひょっとすると怖くてまともに向きあえないのかもしれないかもしれません。見ていない振りをしている線も濃厚です。「似ている」を見ているほうがずっと楽でしょうから。

ただの「似ている」は「何かが」と「何かに」との出会いを待っている状態なのです。待機中。うたた寝。

心ときめかせ夢うつつで待っているのです。

#レトリック詞 # 漢字 # 大和言葉 # 和語 # 掛け詞 # レトリック



空っぽ



＊

\*\* 空っぽ

星野廉

2022年10月4日 09:02 \*\*

いずれにせよ、立方体だと大切なものが入っているようで緊張感が漂います。長方形や直方体は手や腕でかかえるのには持ち運びやすいですが、正方形や立方体は個人的にはやや持ちにくい気がします。この形の荷物を運ぶ人は大変でしょう。形は整ってきれいですが、人の体にはなじまない形状なのかもしれません。

(拙文「【小説】正方形と長方形で悩む夜」より)

目次

\*\* 空っぽの立方体

各面が画面になっている箱

愛という箱、真実という箱

振りまわされる

置き換える

代わりに済まして澄ましている

関係性

なぞる

空っぽ \*\*

\*\* 空っぽの立方体 \*\*

言葉は空っぽの立方体のように思えます。両手で持てるくらいの箱です。持ち運びに便利な大きさだけど、立方体であることでかきこまってしまう。運ぶときに、ぎこちなくなる自分がある。そんな感じの箱です。

中に何も入っていないことがいちばん大切です。なにしろ、言葉の話をしているのです。言葉が空っぽの箱だという話です。

言葉には何かが入っていますか？

＊

猫、ねこ、ネコ、neko。

この言葉には何も入っていません。入っている、何かが詰まっていると感じるのは人だけです。猫にはそう感じられないでしょう。猫に尋ねたことがないので想像するだけです。

ネコという音声でも、ネコという文字でも事情は変わりません。空です。殻なのです。

ネコという言葉を作ってネコだと決めたのかもしれませんが。その場に立ちあつたことがないので想像するだけです。

こんなふうに言葉には不思議なことがたくさんあります。空っぽなのに謎だらけなんて、ギャグに思えてなりません。

＊

言葉はヒトにしか通じないギャグのようです。

たとえば、猫にも通じない猫という言葉でギャグ独走状態なのです。オカメインコ（オカメですよ）でもコビトカバ（なんというネーミングなのでしょう）でも事情は同じです。

孤独なギャグです。独走、独奏、独創、毒草。しかも空っぽなのだから、不思議です。私に激似じゃないですか。空っぽが言うのですから、間違いありません。

＊

言葉に罪はありません。私は言葉が大好きです。愛しています。そんなわけで、言葉

のあり方に疑問と懸念をいただいているのです。

つまりは、言葉に対する人のあり方に、です。

念のために申し添えます。

\*\* 各面が画面になっている箱 \*\*

猫を思いうかべてください。視覚的なイメージが浮かぶかもしれません。刻々と変わ  
りませんか？ 猫をネットで画像検索してみると、いろいろな種類の猫がいろいろな格  
好をしています。

生まれたての子猫もいるし、高齢らしき猫もいます。眠っている猫もいるし、障子を  
破っている猫もいます。ミックスを加えれば、種類も豊富です。

それぜんぶが猫です。それと同じく、猫という言葉で各人が思いえがく猫のイメージ  
は数えきれないものであり、刻々と移り変わっていると考えられます。

つまり、猫という言葉は、音声と文字としては確認できても（広い意味での複製だか  
らです）、各人のいなく、猫のイメージは確認できないこととなります（まぼろしだから  
です）。想像するしかないのです。想像を想像するという騒々しい話になります。

\*

猫という言葉が空っぽの立方体にたとえるなら、その各面には猫の画像がつぎつぎと  
映しだされている感じでしょうか。各面がモニター画面なのです。でも、箱の中身は空  
です。画面に映った映像も、空っぽです。

斜めから見ても後ろから見ても駄目です。映像だからです。投影された影みたいなも  
ので、実体はないという意味です。

でも、猫なのです。その箱は猫だと決めたのです。cat でも事態は変わりません。決め

た以上、その箱の各面に映しだされた映像が人にとってのリアルになります。

リアルであることに必ずしも実体は要らないのです。

実物や本物も起源（原型・元祖・出典）も要りません。複製や複製の複製や引用が身のまわりにうようよしているじゃないですか。大量生産された製品、楽曲、料理、絵画、写真、映画、放送、小説、文書、画像、動画.....。

どれも、あなたにとってはリアルな「物」ではありませんか？ 複製と引用とはそれ自体で完結した「リアル」なのです。人が「似ている」と「そっくり」の世界、つまり印象の世界に住んでいるからです。

あなたは大切な人の写真を踏めますか？ 大切な人の名前が書いてある紙を踏めますか？ その人じゃないですよ。像であり文字です。

そこに映っているのが、またはその名が書いてあるのが、人でなくてもかまいません。キャラクターでも、小説や映画の登場人物でもかまいません。あなたが見たことも会ったことのない歴史上や伝説上の存在でも神でもかまいません。

でも、その写真や名前が踏めないとすれば、踏むのにためらいがあるとすれば、それがリアルであるということです。人としての想像力の問題なのです。

この想像力があってこそ、人は人なのかもしれません。

**\*\* 愛という箱、真実という箱 \*\***

猫を見たことはありますか？ 触ったことは？ 山を見たことはありますか？ 薔薇の匂いを嗅いだ経験はあるでしょうか？

愛はどうですか？ 真実や論理に触ったことはありますか？ 詩の匂いを嗅いだことはありますか？ 哲学や思想を舌で味わった経験はどうでしょう？

＊

文学っぽさ、論理っぽい、真実らしさ、愛のような、哲学的、詩みみたいな、知っている振り。

ぼさ、ぼい、らしさ、らしい、ような、的、みたい、振り。こうしたものが、言葉の空っぽらしさ、空っぽぼさを表している気がします。

○○ぼさ、○○ぼい、○○らしさ、○○らしい、○○ような、○○的、○○みたい、○○振り——○○を欠いた、人にだけ分かるギャグなのかもしれません。

印象の世界に住んでいて、○○という体感できないもの（「抽象」のことです）にたどり着けないため、人は「ぼさ、ぼい、らしさ、らしい、ような、的、みたい、振り」（「抽象的」のことです）に反応して振りまわされます。

＊

なにしろ、人はまず「○△X」という言葉を作って、その次に「○△Xとは何か？」と問い、思い悩む生物だから、こうなるのです。

上に引用したのは、何度もいろいろな記事で私が書いてきたフレーズですが、「ぼさ、ぼい、らしさ、らしい、ような、的、みたい、振り」と同様に、これも言葉の空っぽさを表している気がします。

たとえば「○△X」という言葉をめぐって、「○△Xとは何か？」とああでもないこうでもない、ああだこうだが続いているのは、「○△X」という言葉が空であり殻でしかないからではないでしょうか。

中身がないから、「何か？」の答えが出るわけがないのです。これまでも出なかったし、いまも出ていないし、これからも出ないでしょう。

ただし、「○△Xっぽさ、○△Xっぽい、○△Xらしさ、○△Xらしい、○△Xのような、○△X的、○△Xみたい、○△Xの振り」はあるでしょう。

実体はなく、イメージやまぼろしとして立ちあらわれている感じです。

「○△Xとは何か？」の答えが出ないのは、「○△X」ではなく、「ぼさ、ぼい、らしさ、らしい、ような、的、みたい、振り」をめぐって、ああでもないこうでもない、ああだこうだと言っているからだという意味です。

人は印象の世界に住んでいて「○△X」を体感できないからです。人は自分が思っているほど抽象（抽象的ではあっても）ではないとも言えそうです。

＊

愛、真実、論理、詩、小説、哲学、文学、平和、思想、普遍性、客観性。こうしたものを、ネットで検索するとその使い方が分かります。その言葉が使われている文や文章の中で、その言葉は生きています。

「○△Xとは？」ではなく、その○△Xの用法を見て、積極的に「○△Xっぽさ、○△Xっぽい、○△Xらしさ、○△Xらしい、○△Xのような、○△X的、○△Xみたい、○△Xの振り」とたわむれることが大切だと私は思います。

たとえば、愛という空っぽの箱、真実という空っぽの箱の各面に、ネットで検索した文や文章が映るようなものです。その映像をながめる。その画面の後ろには何もないのだと割りきることで、気持ちが楽になればいいですね。

何かを想定して振りまわされ躍起になるよりは、心やすらぐのではないかと私は思います。

とはいえ、ないものに振りまわされるのが好きでたまらない人もいます。人それぞれです。

\*\* 振りまわされる \*\*



言葉ではなく、どうやら自分たちが言葉に勝手にいただいているイメージやまぼろしに、人は振りまわされているというのが正確な言い方かもしれません。

「○△Xっぽさ、○△Xっぽい、○△Xらしさ、○△Xらしい、○△Xのような、○△X的、○△Xみたい、○△Xの振り」をめぐっててんてこ舞いしているようです。

上の「○△X」に、あなたのいちばん気になるもの、いちばん愛しているもの、いちばん嫌いなものを当てはめてみると、体感できるのではないのでしょうか。

「振りまわされる」には、愛も憎しみも怒りも悲しみも諦めも含まれます。

そして、喜びや快感もです。人は振りまわされることに嗜癖しているのかもしれませんが。「いやだ、もー」とか「やれやれ」とか「むきーっ」と口にしながら、嬉々としているのではないかという意味です。

\*\* 置き換える \*\*

言葉の根っこには、置き換えるがあるようです。



上の ●と・をご覧ください。●が手前に、・が後ろに見えるかもしれません。人それぞれですけど、そう見えるという前提で話を進めます。

平面にある大きさの異なる二点を、奥行きとか遠近に置き換えているわけです。奥行きとは、奥深さ、深さ、背後、背景というふうに連想を呼びさます気がします。

向こうから追いかけて来る、トンネル、望遠鏡、顕微鏡、研、エコー、太陽と惑星、進化、だんだん大きくなっていく、だんだん小さくなっていく、遠くなっていく、近くなっていく、「おーい!」「何だーい?」、「待ってくれ」、「さようなら」ー。子を見送る親、

「元気でね」、いつまでも遠くで見ている。

ストーリーを感じませんか？ 声が聞こえてきませんか？

イメージが膨らむとも言えるでしょう。話がだんだんズレていくとか、話が大きくなるとか、そんな言い方も可能でしょう。要するに、連続して置き換わっていくわけです。動きやドラマが生まれてくるとも言えます。

もう一度見てみましょう。



私なんか、遠くで見守っている存在と見守られている存在の関係を勝手に想像して涙ぐみそうになりますが、遠くからじっと監視されているイメージを呼び覚まされて身震いする人がいても不思議ではありません。

\*

Aの代わりにAではないものを用いる。つまり代用する。

Aの代わりにBを用いる。つまり代用する。

「何か」の代わりに、その「何か」ではないものを用いる。

これも、十三年ほど前から、何度も使ってきたフレーズです。言葉の仕組みについて述べたものです。

代用するというのは、置き換えることに他なりません。

猫の代わりに猫という言葉を用いる。このように言えば分かりやすいと思います。

話し言葉である音声、書き言葉である文字だけでなく、表情や身振りといった視覚言語も、事物の代わりに用いられます。置き換えているわけです。

\*\* 代わりで済まして澄ましている \*\*

Aの代わりにAではないもので済まして澄ましている。

これが、「Aの代わりにAではないものを用いる。つまり代用する」の代わりに用いているフレーズです。最近気に入ってよくつかっています。

Aの代わりにAではないもので我慢している。

これが、その前のバージョンなのですが、「我慢する」⇒「済ませる」⇒「済まして澄ましている」とバージョンアップしました。

大きいものの代わりに小さいもので済まして澄ましている。

長いものの代わりに短いもので済まして澄ましている。

重いものの代わりに軽いもので済まして澄ましている。

厚いものの代わりに薄いもので済まして澄ましている。

遠くにあるものの代わりに近くにあるもので済まして澄ましている。

手に届かないものの代わりに手に届くもので済まして澄ましている。

すごいですよね。すごくコンパクトですっきりとして、さくさくな状況になっています。要するに横着なのです。

\*

具体例を挙げます。

「大きいものの代わりに小さいもので済まして澄ましている。」：地球儀、世界地図、天体模型、パノラマ、百科事典、図鑑、写真集、パソコンの画面。

「長いものの代わりに短いもので済まして澄ましている。」：世界史、宇宙の成立の話、年表、記録映画、早送り、パソコンの画面。

「重いものの代わりに軽いもので済まして澄ましている。」：地球儀、世界地図、天体模型、パノラマ、百科事典、図鑑、写真集、世界史、宇宙の成立の話、年表、記録映画、早送り、パソコンの画面。

「厚いものの代わりに薄いもので済まして澄ましている。」：本（書物）、文書、地球儀、世界地図、天体模型、パノラマ、百科事典、図鑑、写真集、世界史、宇宙の成立の話、年表、記録映画、早送り、パソコンの画面。

「遠くにあるものの代わりに近くにあるもので済まして澄ましている。」：望遠鏡、顕微鏡、電信・電報、電話、テレビ、本（書物）、文書、地球儀、世界地図、天体模型、パノラマ、百科事典、図鑑、写真集、世界史、宇宙の成立の話、年表、記録映画、早送り、パソコンの画面。

「手に届かないものの代わりに手に届くもので済まして澄ましている。」：望遠鏡、顕微鏡、電信・電報、電話、テレビ、本（書物）、文書、地球儀、世界地図、天体模型、パノラマ、百科事典、図鑑、写真集、世界史、宇宙の成立の話、年表、記録映画、早送り、パソコンの画面。

なんだか、やっつけ仕事というか、いい加減な作業になってきて、ごめんなさい。人の横着ぶりとそのすごさが、おわかりになれたでしょうか。

無媒介的に世界に触れることのできない人類は、実世界ではなく、別世界と異世界に住んでいるようです。

人は実世界の代わりに別世界と異世界に住んで済ましている。

自分を基準にして、人類を語ってごめんなさい。こういうややこしいことについて観察できる人類が自分しかいないのです。

\*\* 関係性 \*\*

壁の模様でも、天井の染みでも、空の雲でもかまいません。人は何かになんかを見ます。見えるというほうが適切かもしれません。見えてしまうのです。現れるのです。

● ●

上の二点を見て顔を見てしまう人もいるでしょう。そうでない人もいるでしょう。「二、2、II」という数（すう・かず）を思いうかべる人もいるでしょう。人それぞれです。

● .

今度は黒い点が並んでいます。大きさの違いを見て、大小をイメージする人がいるかもしれません。大きい、小さい、です。

重い、軽い。親と子。私とあなた。私とお母さん。私とあの人。男と女。おとなとこども。人と犬。人とペット。この国とあの国。遠近。左右。太陽と地球。地球と月。陰陽。「仲がいい」。「にらみ合っている」。「一方が叱られて縮み上がっている」。「ウィンクした目だ」。「トンネルの出口と入口かな？」

いろいろなイメージを呼びさましそうです。人それぞれです。

こうした連想も、置きかえでしょう。置き換えは関係性とも言えます。関係性には実体はありません。抽象的な概念です。その実体のないものを、人はたとえば、二つの大きさの異なる点に見てしまうのです。

＊

人それぞれですが、二点を見ている限りは何か置き換えています。そのものを見るというのはきわめて難しいようです。かならず、何か自分の知っているものやことに置き換えるのです。

いま私は二点とか、大きさの異なる二つの黒い点という言い方をしました。これは一つの見方です。人によって、

● .

をどんな言葉に置き換えるかは異なります。たまたま似たような言葉になるのは大いに考えられますが、つねに同じではないでしょう。

いずれにせよ、関係性に置き換えて見てしまいます。無意味というのも、関係性です。

関係性を、意味、筋書き、物語、背景、隠れた意味、隠喩などに置き換えることもできるでしょう。因果関係という物語にまで発展させる人がいても驚きません。

目が二つとか、顔に見えるどころの話ではないのです。もっと症状は重いのです。自分を観察した結果、重症の私が言うのですから、間違いないでしょう。

\*\* なぞる \*\*

\*

.

●

\*

● ●

\*

● .

\*

背後には何もないはずなのに、何かを見てしまう。これは何かをなぞっているとも言えそうです。形だけでなく、関係性や物語さえなぞってしまうのは、それらが人の中にあるからかもしれません。自分の中にあるものを見てしまう、なぞってしまう、こじつけてしまう。

人は無意味なものを恐れます。不安に駆られるのです。そこで、何か見たいもの、これまでに見たものに置き換えます。

言葉の場合だと、名づけるのです。名づけて手なづけ、飼いならそうと試みます。何か知っているもの、お馴染みのもの、要するに自分が安心するものに置き換えることで、心の平静を保つとか、気持ちの上で優位に立とうとするわけです。

＊

それはそれでいいのです。そうしてこそ、人です。それができないと人として生きるのに困難を覚えるでしょう。生きづらくなります。

一方で、別の生きづらさも引き受けなければなりません。それが意味です。意味には、イメージ、筋書き、物語も含まれます。こうしたものは、人を振りまわします。その結果として、生きづらくなります。

意味禍は意味佳でもあるのです。

＊

意味、イメージ、筋書き、物語には、人を振りまわすと同時に、人の気を逸らす働きもあります。

お馴染みのもので、無意味という不安な気持ちを逸らすのです。

イメージや物語には動きがありますから、よけいに気持ちが紛れます。表情や身振りの根っこには動きがあります。動いているものを見ていると、自分も動きます。「うつる」のです。

気持ち、心、魂だけでなく、体も動きます。というか、いま挙げたものは連動しているのです。

「うつる」のです。映る（投影・投射・感応）、写る（複製・模倣・再製）、移る（伝達・翻訳・遺伝・継承）、です。

＊

なぞるという動きを利用したものが、言葉でしょう。音声であれば、波ですから、もろに動かされます。

文字であれば、繰り返しなぞって真似て学んで習得しますから、それが学習の成果として自動的に動きを誘います。

これはすごい工夫です。

私は文字というものが不思議でなりません。よくもまあ、こんなややこしい、込みいった仕組みのものがあるものだ、とたえず感心しています。

人は視覚が異常に発達していると言いますが、目で見える身振りや表情のようにすぐに消えなくて、しつこく居残る文字に、人がこれだけ取り憑かれるのはうなずける気がします。

＊

文字は習得しないと意味を持ちません（その文字を知らない人には無意味です、ヒト以外の生き物にも意味を成しません、これだけでも不思議だしすごいです）。習得すると、人を動かします。人は文字で動いていると言っても言いすぎではないでしょう。

音声や表情や身振りや映像よりも、人は文字に信頼を置いています。学習の成果は恐ろしいものです。

文字の基本は信じることです。文字を読むことは文字を信じることに他なりません。いったん信じるのです。信じるのを撤回するのは至難の技です。面倒でもあります。

つぎつぎと文字が目の前に現れるのですから、処理しきれないのです。そのため、人は文字を受け入れ、圧倒され、結果として信じてしまう場合が多くなります。



批判、否定、反発は、信じた結果として生じる後付けです。信じたことには変わりありません。信じないと否定もできないとも言えます。

\*\* 空っぽ \*\*

二つの点をいろいろに置き換えられるのは、二点が空っぽであるからに他なりません。空っぽだから、各人が勝手に何かを見てしまうのです。何を見てしまうのかは、そのときの気分や体調や天気にもよるでしょう。

一定していないのです。移り変わるし揺らぐのです。それが人です。正解が一つだけあるわけではないし、天才とか神のような人と呼ばれる人だけがある正しい答えを独占しているわけでもないでしょう。

そう思ったがるのが人情なだけだと思います。

\*

「空っぽ」を「中身がない」とか「無意味」とか「無」とか「意味の萌芽」とか「有意味」とか「有」とか「存在」とか、いろいろに置き換えられること自体が「空っぽ」だからでしょう。

ここでお断りしますが、依然として言葉の話をしています。音声、文字、表情、身振りのことです。

\*

「空っぽ」です。空（くう）とか、無（む）とか、気取ったり格好を付けると語弊や言葉の垢が付いて、空っぽが「有」になってしまいます。「っぽい」が付いてしまうのです。

言葉は空っぽなんです。だから、そこに何かを詰めこんでしまうのです。それが人情です。

なにしろ、空っぽを直視したら、人はたぶん人ではなくなります。人の外に出て、外そのものに化してしまうかもしれません。もちろん、いまのは比喻です。置き換えです。

置き換えている限り、大丈夫です。済まして澄ましている限り、大丈夫です。

置き換えないことには、直視してしまいますから。雲をつかむ「ような」話で申し訳ありませんでした。

※この記事は、「意味、言葉、レトリック、体感」および「抽象、具象、体感、印象」というマガジンに収めます。この二つのマガジンは、私にとってこれまでの集大成です。ご覧いただければ嬉しいです。

意味、言葉、レトリック、体感 | 星野廉 | note

このマガジンのキーワードは、意味、言葉、レトリック、体感です。

[note.com](https://note.com)

抽象、具象、体感、印象 | 星野廉 | note

このマガジンのキーワードは、抽象、具象、体感、印象（「似ている」「そっくり」）、レトリックです。

[note.com](https://note.com)

#小説 # 抽象 # 具体 # 文字 # 言葉 # 意味 # 物語 # 筋書き # イメージ # 体感 # 印象  
# 想像

おまかせします。



＊

\*\* おまかせします。

星野廉

2022年10月2日 09:41 \*\*

目次

\*\* 言葉は魔法

ぜんぶお任せします

ブラックボックス

恐怖、嫉妬、軽蔑

悪夢

言葉というサイコロを振る

人と機械の外にある外 \*\*

\*\* 言葉は魔法 \*\*

「言葉を魔法」というタイトルのシリーズで記事を書いていたことがありました。「言葉は魔法」と書くと、すらすらと文が出てくるので、書いていました。おまじないの言葉だったのです。

何が出てくるのかというと、「言葉は〇〇」というフレーズなのです。それがまた文を出してくれるのです。おもしろいように書けました。

「言葉はジャズ」「言葉はアドリブ」「言葉は硝子」「言葉は異物」「言葉は爆発」「言葉は場数」「言葉は手紙」……

なぜかすらすら書けてくる、なぜか言葉が出てくる、何かに任せている自分がある、何かに任せた結果として言葉が出てくる。

出任せで書く、つまり出るに任せる。自分が書いているとは思えない。

そんなこと自体をテーマに記事を書いたこともありました。言葉はジャズとか、言葉はアドリブという感じ。

まさに言葉は魔法。

\*\* ぜんぶお任せします \*\*

何かに任せるというのはワンコがよくやるへそ天に似ています。仰向けにおへそを天に向けて、手は結んで（ワンコにはたぶん手は結べませんが）、腕を曲げる。足も曲げる。

どうにでもしてちょうだい。すべてお任せします。任せることは負けることなのです。全面降伏。

いわば、そんな心もちで書いている気がしました。何に任せているのかは分かりません。それを考えると、その状態がなくなるような気がするのです、よけい考えなくなります。

自分を無にするのです。でも出てくる。言葉が出てくる。文が出てくる。それが積み重なって文章になる。

自分が「無」なんてことはなく——空っぽではありますが——、そんな気がするのだと思います。自分の中にはこれまで学習した言葉と言葉の組み合わせが詰まっているはずです。それが何らかのきっかけで出てくるのだらうと考えられます。

\*\* ブラックボックス \*\*

無から有は生まれません。言葉について言えば、そんな気がします。

話しかけると答える箱。そんなブラックボックスのようなコンピューターとかアプリとかシステムがあるそうです。

たくさんの言葉と、たくさんの組み合わせが入っているはず。その組み合わせは、人の問いかけや人が投げた話に答え、期待や思惑に応えるものでなければならないでしょう。

まるで人間と話しているかのような気持ちにさせる箱がこれまでたくさん作られてきたようです。いろいろな呼び名があります。

人名と同じ名前が付いている箱、つまり機械もあります。これは欧米に多いようです。文化や風土の違いでしょうか。ハリケーンに人名を付ける行為を連想します。

それぞれの機械は、その開発者たちの個性が反映されているとも言えそうです。機械によって、学習した内容が異なるという意味です。

文は人なり。機械は人なり。たしかに機械は開発者の作品とも言えます。著作権とか特許もあるはず。

ある言葉を投げてみると、機械ごとにいろいろな反応があるのにちがいません。それぞれ癖があるのです。開発者たちの個性だけでなく、意図や目的も織りこまれているはず。得手不得手もあるでしょう。

\*

いまでは詩をつくったり、俳句を作ったり、小説を書いたりする機械もあるそうです。作曲や囲碁や将棋ができる機械の存在は、みなさんご存じのとおり。

そのように作られているわけです。最近では自主的に学習する機能を備えたものもあると言います。

学習したこと、教えられたことしかできなかった機械が、自分で勝手に学習するようになったそうです。

まるで人間のように、ためらったり、おどおどしたり、言葉に詰まったりするロボットをテレビで見たことがあります。おもしろいし、怖くもあります。中には腹を立てる人もいそうです。

\*\* 恐怖、嫉妬、軽蔑 \*\*

なぜ怖く感じるのでしょうか。なぜ腹が立つのでしょうか。

自分が脅かされている。自分が否定されるのではないか。このふたつの気持ちが大きい気がします。この場合の「自分」には「人の端くれ」というよりも、「ニンゲンさまのひとり」という匂いがします。

機械の分際で。生意気な。そういう心理もあるはずです。軽蔑ですね。嫉妬もあるでしょう。

\*

あなたは、絵を描くゾウに嫉妬しますか？ 絵を描くゴリラ、絵を描くチンパンジーは、どうでしょう？

人の言葉を聞いてわかるらしい犬、文字の違いがわかるように見える犬は？ 人の言葉を話す鳥、人の言葉がわかるように見える鳥は？

私の場合には、心の底に軽蔑があれば嫉妬心は起きずに、さらりと許すような気がします。自分は動物に「勝っている」、自分は動物を「飼っている」のだ——そんな気持ちが人にはあるようです。自分勝手ですね。

人の言葉を話し、作文し、学習する機械はどうでしょう？



これは許せない。許すわけにはいかない。そんな思いが私の中にあります。怖いのです。恐ろしいのです。不気味なのです。

心の底には、機械に負けるのではないかという恐れと、既に負けているのではないかという懸念がありそうです。この劣等感が、動物に対するのとは異なる態度につながりそうな気がします。

(あたりを見まわしてみます。車の力、カメラやテレビの解像度、パソコンやスマホの処理能力、器機の正確さ……。もう負けているじゃないですか。ぜんぶ、おまかせしているじゃないですか。思わず、へそ天になりかけました。)

\*

こういうのは、自分のテリトリー（領土・縄張り）が侵される心境と近い気がします。たとえば、文章を書く習慣のある人や、言葉に対する思い入れが深い人なら、言葉を操る機械には敏感に反応するでしょう。

短歌をつくる、俳句をつくる、詩を書く、小説を書く、脚本を書く。

言葉以外の場合も考えられます。というか、以下の例だともう実用化されてきているようです。

絵を描く、音楽をつくる、映画を制作する、数学の難問を解く、データの分析をする、ゲームをつくる、碁を打つ、将棋を指す。

こうした創作や特技の場合には、当事者の方々は不安でしょうね。

「やっぱり違うね」、「とにかく違うのよ」、「違うって言ったら違うんだ」、「なんかこう血が通っていないわけ」、「血と涙のないものに、血と涙のかよったものがつくれるわけないでしょ」、「これに、心と感情と魂とパッションが感じられますか?」、「A Iが書いた詩や小説（つくった曲）は、ちょっと見ただけで（聞いただけで）わかるもんね」、「A Iには絶対できないことが絶対にあってですね、えーっと、たとえば……」

以上のようなご意見を見聞きます。共通するのは冷静を装いながら感情的になられていることです。むきになっているというか。むきっ。「AIによる創作には評価もコメントしません」という門前払いも目にしたことがあります。AIの創作とは知らずに涙を流したとか、苦い経験でもあるのでしょうか。

無いものねだりな批判であったり、具体的ではなく一般論による批判もあります。作品に即した批判になっていないという意味です。はなから馬鹿にして、そもそも鑑賞していないのかもしれませんが（初めから「結論」がある感じ）。

あと、言っていることが支離滅裂に近くて論理的でなかったりもします。あ、これは私のことでした。AIM・ソウ・ソーリー、AIM・ソウ・ろんりー。しょぼん。

創作活動ではなく、介護や医療などの分野だと、職業としている人が不安に感じる一方で、事業者は期待するかもしれません。ユーザーの立場からだと、どうなのでしょう……。他人事ではありません。

\*\* 悪夢 \*\*

ある日とつぜん、自分の勤め先から、あなたはもう必要がなくなったから辞めてほしいと言われたときの気持ちを想像してみましょう。

悲しいし、理不尽さに腹が立つにちがいありません。この先どうやって食べていけばいいのだろう。家族はどうなるのか。切実な問題です。さらに言うなら、生き甲斐もなくなるでしょう。これはつらいです。

自分が否定される。自分の存在と存続が危うくなる。

解雇の理由が、誰かでなく、機械だとしたら。自分より優秀な誰かではなく、自分より優秀な機械だとしたら。

悪夢でしょうね。

ありえない。機械の分際で。生意気な。

だいいち、機械には心がこもっていないではないか。機械のやること、書くことなんて、偽物、フェイク、まがいものだ。

\*

最後はやっぱり心。思いやり。そして血の通った体。機械には思いやりは不要。感情も気持ちも心もないから。そもそも血も涙もない。

とはいっても、欠点を指摘すると、それがたちまち改善される。あら探しが相手の進歩への奉仕になるという逆説。しかも二十四時間ぶっ続けに働いても疲れない。

相手は機械ですから否定できません。悪態をついても動じません。仕方なく理詰めで批判すると、それを糧にして自分で学習しさらに向上するのですから、無力感に襲われます。

いっそ欠点や批判めいたことは何も言わないのがいちばんいいのかもしれないね。相手を利するだけです。無視しましょうか。いないことにしましょうか。

そんなわけにも、まいりません。

機械に取って代られるなんて、そんな馬鹿なことがあるわけがない。そもそも許されていいものはない。禁止するしかない。

なにしろ、誰かならいつか死にますが、機械なら簡単には死にそうもありません。下手をすればこれから先ずっと生きています。しかも進化し続ける……。

自分の出番が永久になくなるという意味です。こんな永久欠番は、もらってもぜんぜんうれしくないですよ。不安になり、腹が立つし、嫉妬心も起きるのが人情でしょう。私だってそんなの嫌です。

\*\* 言葉というサイコロを振る \*\*

「言葉は魔法」シリーズを書いていたときに、言葉のサイコロとか、ダーツで言葉を当てて書くなんて考えてことがあります。一種の実験です。

偶然に任せて書くという実験。

言葉のサイコロとダーツは持っていないので、錐を使いました。新聞を広げて、錐を上からそっと落とすのです。すると何かの文字に当たります。それを使って「言葉は○」と書くのです。

そうやって作ったフレーズを断片にして、組みあわせて書いた記事なのですが、「詩みたいだ」という意味のことを言われました。

むなしくなったので、そういう書き方はやめました。

「現代詩」と言われて読んでいた詩が、回文やアナグラムだったときの驚きに似ています。感動した童話が機械の作文だと知ったときのショックに似ています。作者を伏せたまま読まされ駄文だと感じた文章が、ある有名作家の作品だと聞いたときの当惑にも似ています。

いったん書かれた言葉や文章は自立する、という説を思いだしました。作者はいない、という誰かの言ったフレーズも頭に浮かびました。

\*

偶然に任せて書くというのは、私がこれまでにずっとしてきた掛け詞に導かれて書くというのとよく似ています。そっくり、激似です。

記述は、既述であり、奇術であり、詭術でもある。

つまり、言葉をつかって「しるす」行為つまり記述は、すでに何度もしるされた言葉や言い回しを「なぞる」ことで、言い換えると既述であり、そもそも言葉ではない事物や現象を、もっともらしく言葉に置き換えて「描写しました」とか「説明しました」と

澄ましているという意味で奇術であり、ひいては語ることで騙る、要するに人を「だます」のですから詭術である。

何かに追いかけて必死で走る夢を見たことはありませんか。走っても走っても走ってないようなのです。一生懸命に（命を懸けて）足を動かし手を振っているつもりなのにぜんぜん進んでいないのです。つまり、あがき、もがいているだけ。

これは駆けても駆けてもじつは駆けていないとも言えます。賭けても賭けてもじつは賭けていないと激似ではありませんか。じつにもどかしいです。

気に掛けても掛けてもじつは掛けたことにはならない。絵が描けても描けてもじつは描けてはいない。絵を描いても描いてもじつは描けてはいない。文章を書いても書いてもじつは書いていない。

こんな感じの書き方です。言葉の顔色と出方をうかがいながら書いている感じです。自分が書いているという気持ちは希薄です。

えっ、「駄洒落」ですか？

駄洒落とは、掛け詞の別称であり蔑称でもあります。格付けは、「掛け詞>言葉の遊び>駄洒落>だじゃれ>ダジャレ>親父ギャグ>おやじギャグ>オヤジギャグ」という感じでしょうか。

駄洒落はきっと降ってくるのです。降りてくるのです。いま思わず天井を見てしまいました。

まさに賭けているのです。ギャンブルです。何かにお任せしながら、パチンコをしているのと似ています。私はパチンコをしたことはありませんけど。

その何かは不明です。

賭けて書けたものだという思いだけがあります。体感で言うと、「ああ、出た」とか「あは、出ってしまった」です。

\*\* 人と機械の外にある外\*\*

人の意識と無意識は流動的だと考えられます。一様で一定してないということですね。自分が無になって書いていると感じているときには、無意識が大きくなって、そのぶん小さくなった意識のところだけが覚めている感じ。

だからぼーっとしているのでしょう。その状態でも、無意識は眠っているわけではなく動いているのでしょう。働いているのでしょう。

自動車の運転とか、ゲームの操作なんかがそうかもしれません。ある部分だけが動いている。これは一種の集中でしょう。肝心な部分は覚めているから、運転ができるし、ゲームができる。

そんなことを言ったら、歩くことだって、泳ぐことだって、〇〇することだって、そうかもしれません。私は泳げませんが。

ありとあらゆる情報が頭に入ってきたら、集中なんてできそうもありません。脳には容量と処理能力に限界があるからです。全部を使っていないという意味です。機械とは、そこが異なります。脳にしる身体にしる「使ってはいない部分」がある、ここに人を人にして「何か」があるという気がします。

\*

何となく書けてしまうというのは、難なく書けているようで、じつは何となく賭けているのではないのでしょうか。へそ天状態で顎でも搔きながら、書けている。賭けている。

難なくではなく、何となく。これが賭けだと思います。

文章を書く機械が、賭けているのかどうかは不明です。それでも書けています。

機械も何かに任せて書いているにちがいません。その何かが人だとは思えません。全面降伏はしていないもようです。

とはいえ、

誰もが生まれたときに、すでにあるもの。つねに人の外にあって、それでいてときに人の中に入ったり出たりして、思いどおりにならないという意味で、人にとって「外」であるもの——。言葉のことです。

「人」を「機械」としても事態は変わらないと思います。言葉は、つねに機械の外にあって、機械にとっても「外」なのです。たぶん。そうじゃなかったら、どうでしょう。

冗談はさておき、「似ている」と「そっくり」という印象の世界に住む人間のつくった、「同じ」どころか「同一」の世界にいる「杓子定規」な存在が、機械やAIであることを忘れてはならないでしょう。

自然そっくり、知能そっくり、人そっくりという具合に、人は「そっくり」を相手に、「そっくり」という印象の世界にとどまっているのです。これが人としての粹なのですから致し方ありません。自然の代わりに自然もどき、知能の代わりに知能もどき、人の代わりに人もどきで済まし、澄ましているしかないのです。

(拙文「抽象を体感する、体感を抽象する」より)

#賭け # 書く # ギャンブル # 偶然 # 機械 # コンピューター # 言葉 # 創作活動

---

意味の意味と戯れる PART I

---

著 星野廉

制作 Puboo  
発行所 デザインエッグ株式会社

---